

工部C-70

81-944

河東碧梧桐著

俳句評釋

東京人文社藏版

一七下をニニ下

版丁 四〇六三〇

自序

俳句には文字難解なる關門あつて、一見こゝに出入せんとする人を阻むが如き觀あるも、決して然らず。凡そ何事に限らず、其事を究めんとするには、多少専門の智識を要す。一の團扇を張り、一の疊を刺す尙ほ其道に應ずる専門の研究を要するに非ずや。俳句は文學なり。文學の研究には多くの勞力と時間とを費さざるべからず。漫に其外形を見て、是に批評を加ふるは智者の爲すべきことに非ず。一度文字難解の關門を衝いて其天地に遊ばんか、汪洋たる新趣味は人の採るに委して、珍花奇草爛熳として我を迎ふ廣野の如きものあるを發見すべし。文字難解の關門は、或は嚴に過ぐるべからん。然も其關門を入る

たる自由の天地は、人をして苑遊嬉々去る能はざらしむるもの
あらん。本書は蓋し其關門通過の割符を以て居るものなり。
この割符を以てして、尙ほ關門通過を欲せざるの人あるか。

明治三十六年九月

碧 梧 桐 識

凡 例

- 一、本書は、或る講義録に連載せし稿本を一輯せしものなり。
- 一、比較上俳句創始時代に審にして、後世旺盛時代に疎なる傾あるは、講義の一ヶ年を期せしと、其頁數を制限せしとによる。前後權衡を得ざりしは、予の不用意の致す處にして、讀者に負くことと少しとせず。
- 一、本書の要は、各時代の變化を研究して、側ら俳句を解し得ぬ人の伴侶たらしむるに在り。時代を現はすが爲めには、比較的其時代の特徵を備へたる句を集むるに勤めたり。
- 一、淺見菲才、加ふるに忙中の寸閑を偷んで筆を執る。杜撰粗漏誤謬の誹を免れざるべし。謹んで垂教の榮を待つ。

俳句評釋

河東碧梧桐著

明治に勃興し、俳句の事を暫く他に置いていふと、俳句の歴史は、略徳川氏の歴史に始終して、俳句の歴史ともいふてもよい。即ち上下三百年間の歴史である。之を他の文學に比して、言へば、遂に短い歴史である。

予は嘗て俳句の歴史を分つて、初期、第一期、第二期、第三期の四期に區別した。初期とは俳句の原始時代で、和歌の連歌から分れて、別に一幹を成した時である。宗鑑、貞徳、宗因等この期に屬する。第一期は、俳句が始めて俳句としての價値を現はした時代で、或は所謂俳句なるもの、文明史は此時に始まるといふてもよいのである。芭蕉、其角、嵐雪等この期に屬する。第二期は俳句の文明史に、光彩を放つて居る、絢爛時代で、蕉村、太祇、几童などこの期に屬するものである。第三期は今日の明治時代である。

初期の時代は暇も直さず第一期を作る前提である。第一期を大成する階梯である。故に初期中にも種々の變化と階段があつて、之を區別すれば、又た數期に分つことが出来る。其著しい變化は、貞徳と宗因に依つて作られて居る。が其貞徳派も、其檀林派も、共に俳句圏外の變化であつて、俳句といふ文學の變化の上には、左程重きを置いて見るべきものでない。

第二期は、俳句潭成の時、元祿の多士濟々、又た各自の特色を發揮した。けれども其盛時は餘り長い間ではなかつた。其盛時には變化と見るべき程の變化もなかつたが、たゞ時を追うて俗化したのみであつた。

其俗化して殆ど文學の圏外に走せたものを、再び圏内に引戻したのみならず、それに光を添へ花を飾つたのが、第三期の天明時代である。元祿の荒蕪に清鍾をかけたやうなもので、今日迄の俳句史中、優に中興の美觀を呈して居る。併し其盛時も亦た餘り長い時間ではなかつた。年を追うて、文祿の俗化するが如くに墮落した。

第三期の明治時代は、其墮落を救うて起つたので、天明に元祿以後の墮落を救う

たのと同じである。

以上概略述べた俳句の歴史を通過して見ると、俳句の興廢消長亦た決して偶然でない。必ず興るには興るべき原因、衰ふるには衰ふる順序がある。芭蕉は忽然と生れたのではない。天保の俗化も、たゞ理由なく俗化したのではない。其一起一伏の跡を探るも亦た興趣のある事であらう。

故に俳句の研究といつても、漫に元祿天明をのみ摘み取つて満足すべきでない。初期の變化も後世俗化の道筋も一應は研究せねばならぬ。而して始めて俳句の價値も明らかになるであらう。

今假に全軀を通じて言へば、俳句の歴史は僅に三百年に過ぎなかつたけれども、俳句を作つた者は意外に多かつた。元來の性質が普遍的のものであつた爲めでもあらうが、殊に世捨人、浪人、ねぢけ者など好んで吟詠した。つまり不秩序な頭腦を持つて居るものが多く、俳句の下に集つたやうな傾向があつて、其一起一伏亦た雜然として居る。且又其紛雜な歴史を巨細に順序立てて研究した人物も出なかつたので、今に不明未決に終つて、五里霧中に埋没されて居る部分が多

い。現に芭蕉の研究は前後思ひを疑した人が少くはないけれども、天明の蕪村に就いては、其性行等精しく叙述した物を見ないのである。俳句の歴史にも研究すべき餘地は尙ほ多く存するといふべきである。

支那宗鑑

名は彌三郎範光又た一夜庵と號す。近江の人。後山城山崎に住して山崎宗鑑と稱す。天文十二年十月二日歿。享年八十五。(歿年諸説あり、天文五年正月廿四日歿年七十二(西讃府志)天文廿一年八十九(滑稽太平記等)。著書大筑波。

元朝の見るものにせん富士の山

宗鑑の句として、富士山の句として、古今に鳴つて居る句である。元朝は元日の朝、句の意は富士山を元日の見る物にせうといふのである。富士山の八面玲瓏たる姿は氣高くも亦た尊い、か年の新らたになつた目出度い元日のしかも其朝、朝に其姿を拜むことの如何に清い快いことであらうか、或は花晨月夕、或は春

天秋空富士山を見る時はいつれとも分ち難いけれども、元朝の物色凡て新に畏こい時に於て眺むるを尤も尊しとしたのである。つまり富士山の尊い清い感じと、元朝の畏の草まつた感じとを調和せしめたので、一方からいへば、元朝の感じを富士山をかりて現はしたのである。元來富士山のやうな大きい景色で、其上何となく尊い感じの何人の頭にも浸み込んで居るやうな靈地を句の材料とするのは、普通の感じでは、人の感興をひくよい武器のやうであるけれども、實際は決してさうでない、ので、景色の小さい、左程人の頭に感じの浸みて居らないものを材料とするよりも遙にむづかしいのである。といふのは、汎く頭に浸み込んだものを材料とする場合には、其普通な感じ以外に超脱することが出来なない、句も亦た陳腐になつて仕舞ふからである。徒に前人の精神を嘗むるに過ぎない、特に句を作る働きを示し難いからである。だから古來より富士山を詠じた詩でも歌でも又は文章でも、さほど面白いものが無むと言はれて居る。それは外でもない。詩でも歌でも文章でも、其根本となるべき思想が多く、陳腐で前人以外に道破し得ない爲めである。單り俳句のみならず、凡ての文學に於ても

多少の研究を積んだものは、富士山のやうな大景を捕へるのを幼稚な手段だと
合點するに至るであらう。が、宗鑑はそのむつかしい材料を捕へて、これ程に面
白く作り得たといふので、識者間には大に持て囃されて居る。其後元日に富士
山を配合した句も澤山出来たやうであるけれども、开は皆宗鑑の摸倣である。
嘗め糟である。俳句の元始時代に於て、かゝる句をなし得た技倆は、是を今日か
ら見ても達見といふべきで、芭蕉なども其大成に至るまでには、これらの句の感
化を受けた事は言ふまでもない。

手をついて歌申し上る蛙かな

古今集の序に、水にすむ蛙云々の詞があるにちなんだ句で、蛙の鳴くのを、手をつ
いて歌を申上げると、稍滑稽に見立てたのである。何も蛙が態々手をついて歌
をうたふやうな雅なものではないけれども、そこを古今集の序があるから、かく
古雅にいふので、いかにも眞面目らしい詞つきと、眞の蛙の滑稽な態度との衝突
して居るところにこの句の面白味があるのである。且つ、手をついてといふ初
め五文字で、蛙の様子がいかにもありありと眼前に書き出される。前足を立て

て腹の白いところを見せて、大きな口をあいて「ヤアア」と鳴く、其様が目に浮
ぶところも、儘に此句の働きてある。單に古今集の序によりて、歌を申上ぐる蛙
といふのみでは、未だ脱化の功を奏したとは言はれぬ。「手をついて」の五字輕々
に看過すべきでない。此句の價值あるところも亦たこゝに存するのである。
「申し上る」といふのは、誰に申し上るといふ意味ではないので、たゞ歌を申すとい
ふのを、今一層勿躰らしく見せる爲めに敬語として附加へたのに過ぎぬ。一躰
後世に及ぶ程、蛙の句には滑稽なのが多い。中には蛙合せなど、其滑稽さを競
べ合したものとさへあるが、いづれも其趣向の由来するところは、この宗鑑の句の
ある爲めである。

にがくしいつまで嵐ふきのたう

これも名高い句で、扱て「にがくし」事ぢや、いつまで寒い風が吹くのか、露
の曇もにがくし、しぢやないか、といふ意味で、露の曇の苦いといふことから、
「にがくし」と言ひ嵐吹くといふ詞の縁で、ふきのたうといふたのである。また餘
寒の寒い時候を現はしたのであるが、句は前にいふた「にがくし」と嵐ふきのた

うの縁語が生命になつて居る。だから句の趣味からいへば、景色を現はしたの
てなく、事物を現はしたのでもなく、又は配合調和の上に面白味があるでもなく、
其面白味は單に縁語を甘く操つた詞の上にのみ存するのである。俳句文學の
趣味からいへば、一種の詞の洒落ばかりで、句の價値は甚だ低いものである。け
ども、當時の特色は却つてかういふところにあつた。俳諧連歌から發句を獨立
せしめた時代であるから、其連歌の習慣が尙ほ附隨して居るのは免れ難い事だ。
これらの縁語も亦た其餘習である。或は附會説であるかも知れぬが、宗鑑が逍
遙院殿へ参向した時、手に杜若を持って上つたので、宗鑑のいかにも汚ならしい
姿を見て、逍遙院殿が

手にもてる姿を見ればがきつばた

と洒落られたところが同行した宗長が

飲まんとなれば夏の澤水

といふ脇をしたといふやうな話もあり、當時さういふ例はいくらもあつた。即
ち重に詞の洒落などを目的として居つたので、前に上げた二句の如きは殆ど偶

然に出來たといふてもよいのである。つまり俳句の進歩すべき鋒鏑が無我無
心の間に現はれたのに過ぎぬ。

月に柄をさしたらばよき團扇かな

これも今に喧傳されて居る句である。月が圓く空にかゝつて居るのを見て、如
何にも涼しい圓い形ぢや、あれに柄をつけたらさぞよい團扇になるだらうとい
ふ句意である。月の圓いといふところに趣向を立てたのであるけれども、たゞ
それだけの滑稽に止つて、趣味甚しく淺薄である。これは縁語のやうな地口的
洒落ではないが、丁度落し話のやうな洒落で、寧ろ子供だましにしか過ぎない。
が、これらも當時の特色であつて、其後かういふ句は再度世に出なかつた。要す
るに宗鑑時代の句は凡て斯くの如く幼稚なものであつたが、或は世にはかゝる
句をのみ俳句の特色のやうに思ふて居る人もあるやうで、予等の屢々遺憾に思
ふところである。

尙宗鑑の句には左の如きものがある。讀者試みに解釋を下して見給へ。

花の香をぬすみてはしる嵐かな

聲なくは驚こそ雪の一つくね
つもればや雪のごようの庭の松
かくふるにいつくへとてかゆき佛

荒木田守武

山田御師長官たり。又た園田長官といふ。叙爵して禰宜となる。天文十八年八月八日歿。享年七十七。著書守武千句。

元朝や神代のことも思はるゝ

元日の朝になつて遠き神代のこといも思ひうかべらるゝといふのである。普通の武士又は商賈でも元日は殊更儀式などを重んじて何事も昔の習慣に従ふものであるから自然と威儀尊く感ぜられるものである。其威儀尊く感ぜられるところから神代にはいかにもゆゑしい事であつたらうかと、自然昔も忍ばれるのである。それが殊に伊勢内宮の神官であつて見れば、普通の家よりも更に嚴かなものがあるにきまつて居る。守武が神の代ゆゑも思ひ辨べたの事は

だ理屈的に推した考つてなく、全く心の底から感じたのであるといふこともわがるであらう。守武が烏帽子直垂の姿で端然と坐つて、さう神の代もと言ひ出したとすると、この句にもどこか尊嚴な感じがして来る。

ちる花を南無阿彌陀佛とゆふべかな

花の散るのに哀れを催ふじて南無阿彌陀佛と念佛といふゆふべであるかなと嘆息した句である。ゆふべはいふゆふの縁語である。同じ縁語にしても、これらは其縁語のつかひがたが淺い言はれ縁語ばかりを生命とした地口的發句とは稍趣を異にして居る點がある。即ち夕べの散る花に對して哀れを感ずる作者の考へがよく之を讀む者にも了解し得らるゝのは、宗鑑の風ふきのたうのながくしといふ詞を生み出す爲めにのみ露の憂尤も其季節物ではあるがを用ひたのと全く趣を異にして居るのであらう。かういふ縁語が段々に發達して、元祿に其角天明に蕪村の縁語的俳句を生むやうになつたのである。

撫子や夏野の原の落し種

撫子の夏野の原の中に飛びくゞ咲いて居るのを見て、これを種が落ちて咲いた

のであらうといふのである。落し種といふと俗に由緒のある人が田舎などへ来て、鄙の女と通じて生んだ子のことなどといふけれども、こゝてはさういふ意味の詞には見ない。又た「夏野の原の落し種」といふのを普通の文法で解すると夏野の原が物主格になつて何か落し種をするやうに見えるけれどもそれもさうは見ない。こゝの「原の」のは原にといふと同じやうに見るので、一句の全眸を平たく解して見ると、夏野の原に撫子が咲いて居る、それは落ちた種が咲いて居るのだ、とかう見るのである。

稍景色を叙する傾向を生じて、夏野に撫子を見つけた點は、當時の發句中での出色とも見るべきであるが、まだ落し種などいふ作者の理想を加へて、純粹に景色を叙するには至らなかつた。且つ景色を見つけたといふも、夏野の撫子位は幼稚といへば甚だ幼稚である。殊に後世「夏野」といふて其意を現はし得たにも關らず、こゝには「夏野の原」とまで斷つてゐる。これは歌の詞をかり用ひたので、守武自身には何の考がへもなかつたであらうけれども、後世俳句の發達した後の事を知つて居ると、それが如何にも冗詞を費して居るやうに思はれるのである。

る。

或は思ふ。この句「夏野の原の撫子許りては往々歌などにも其趣向がある」と云ふから「落し種」といふて始めて俳諧化したやうに思ふて居たかも知れぬ。が、それは成功した脱化のしかたではなかつた。尙守武には左のやうな句がある。

青柳の眉かく岸の額かな

鶯の捨子ならなけほととさす

飛梅やかろくしくも神の春

落花枝にかへると見れば胡蝶かな

杉田望一

伊勢山田に住す。寛永七年六月歿。享年八十三。

さく花の兄は兄ほとの色香かな

望一は盲人で、宗鑑守武後畧八十年許りを經過して歿して居る。が、矢張守武の

流れを汲んで、當時の作者として世に名高かつた。天明の俳人、蕉にのみ入
て望一に誰とさしれけりといふのもある。

この句は梅の花を詠じた句で、梅を花の兄といふところに趣向を立て、居る。
意味は世間多くの花はあるが、其花の兄と言はる、ただ、色も香も實にめてたい、
といふのである。矢張、花の兄といふ詞のみにかゝはつた淺薄な句であるが、當
時の風潮も亦た察するに足るであらう。

それとさきくそら耳もかな時鳥

これは望一の句として尤も世上に喧傳して居る。「それと聞くは、それ時鳥が鳴
くといふのを聞くで、そら耳もかなはさうでもないものをさうと聞き誤る事も
あらう、といふのである。だから句の意は、時鳥を待つて聞く時の状況で、それ鳴
いたといふのに、空耳で聞き誤つたのもあらう、といふのに過ぎない。普通、何々
もがなといふ時には、希望を述べ、意味は使ふけれども、こゝでは一種の詞の曲
折で、そら耳もあらうぞ、といふのを、そら耳もかなとつめていふたのである。俳
句の「かなは、や」と共に尤も汎く使はれる詞で、多くの場合、一種の音調替りに用ひ

ら七^ん居つて、特に詠嘆する意味などを現はして居らぬ。のみならず種々なる
意味を現はす場合に代用せられる事さへある。例之ば、闇の夜は吉原ばかり月
夜かなといふ句は、闇の夜は吉原ばかりで切つてあと「月夜でも」とつくやうに
見る、即ち月夜でも吉原ばかりは闇の夜である、といふ意味であるが、此場合には
「月夜でも」の「か」は「月夜かな」といふてある。でもの替りに「かな」を代用したること
になつて居るのである。

時鳥を待つて聞く時の即興で、かゝる事はいつも有勝の事でもあるが、それを縁
語又は他の詞の滑稽によらずに其儘を直寫した手柄は異色とせねばならぬ。
文學上より見ても左程低度な價値の句ではない。

尚望一には左の句がある。
鶯も初音に口やあきの方
花房を乳ふさにそたつ胡蝶かな

糸遊は霞の網のはつれかな
君か御手もかゝれ子の日の姫小松

俳句評釋 杉田宗一

松永貞徳

幼名勝熊吉左衛門と稱す。別に松友、頌遊、明心居士、柿園、蘆丸舎、長頭丸、延陀丸、逍遙軒、花開翁等の號あり。始めて俳諧花の本の稱を許さる。承應二年十一月十五日歿す、享年八十三歳。(又九十四歳)。京師の人。著書、御傘、紅梅千句、百頭自注、俳諧獨吟集、貞徳俳諧未來記、淀川、あぶらかす、戴恩記等。

初寅の泥障て參れ鞍馬寺

貞徳は御傘といふ書て俳諧の方則を定めた始めての人なので、俳諧史中には特に記すべき一人である。又た其俳諧も特に一風を開いたといふ程でもないが、其門人に英雄が輩出したので、之を宗鑑守武の原始時代に比すると優に一期限を作つて居る。後年貞徳派として一宗の祖に仰ぎ、或は俳諧の中興者として尊ぶ所以も亦た其處にある。今其俳句を通覽すると、矢張宗鑑守武などの響に倣うて盛んにかげ言葉などを使うて居る。が元來幼時から言ひ捨ての句などて人を驚かす程の才氣煥發した人て、殊には從來の連歌に精通して居つたから吐

欠

MISSING

に恨みを言ひに來たなどいふ趣向であつたと肥臆する。芝居でする子持山姥しやべり山姥とは違ふかと思ふ。龍田姫は言ふ迄もなく秋の神の名で春の佐保姫に對するものである。秋もだんく／＼開けて來て冬近くなつて來ると紅葉も散り草も枯れ、天地の光景何如にも物淋しく哀れに荒れて仕舞ふが、その荒れ果てた様を見て、始めは七草其外の草花など咲き亂れて、所謂野草蜀錦を織る美しい様であつたものが、かうもかはるものと感じたやうな心持を「山姥とつひには名にや龍田姫と主觀的に詠じたのである。始めの美しかつたさまは即ち龍田姫の姿で、後の荒れたさまを山姥の姿に見立てたのである。「つひには名にや」の名にや「はこ」は疑問の詞づかひで、名にたつてあらう、といふのであるが、それは詞のあやであつて、意味は矢張名に立つと斷定していふたものとして差支はない。龍田姫の美しかつた姿も遂に山姥のやうな恐ろしいさまになつたといふのである。「名に立つと龍田姫のかけ言葉であることはいふ迄もない。この句も亦た詞の操りが主で、趣味は論ずるに足らない。

庭にさへさそな落葉は東山

自分の庭にさへこれ程の落葉があるものを、東山の落葉は無々大變な事であらう、といふのである。「落葉は」といふ止めかたが俳句特得の技術で、到底普通の文法で解釋することはむづかしい。これは普通の文章を種々省略し又た轉倒したものと見る方が解釋を得易い。庭にさへかゝる落葉を見るに、東山の落葉はさぞ多きことならん、といふやうなので、括弧のうち句は省略されて居るものと見るのである。若しこの文章に近い句法からいへば、庭にさへ落葉はさぞな東山といふべきであるが、そこを今一ひねりして、さぞな落葉はと轉倒したのである。が、其轉倒省略が謂れない轉倒省略でなくて、甚だ要を得て居る點は注意せねばならぬ。即ち省略されて居つても、其意味が直に通ずるのは省略の法を得て居るもので、且つ、落葉はさぞなといふ調子では句にしまりがなく、其上、落葉といふ感と興へることが薄いけれども、さぞな落葉はといふので、調子のしつかりすると同時に、落葉の感と興へることも強くなるのである。單りこの句に惜むべきは落葉の多いといふことを主に言ひ現はして、其他の客觀の趣味を現はすことを等閑に附して居ることである。が、東山の客觀的配合を得て幾分か其

没趣味の點が救はれて居るやうに思ふ。これが東山でなかつたならば、全く淺薄な句になり了したであらう。

其他尙數句を拾へば

行水や汗もほこりも夕被ひ

涼しさを進上申す扇かな

山の鳥も立ちよぎせり霧の海(霧の深く野原又た山谷など下りたるを霧の海といふ)

長明

尋ねばや古人の心水の月

衣配りまづや師走の一重ね(衣配りは年の衣を替へることにたり親しき人々に衣を贈ることなり)

安原貞室

別號正章、一蕪軒。名は彦左衛門。京師の人、紙商。二世花の本の稱を許されたり。延寶元年(又二年又七年)二月六日(又七月七日)歿。享年六十四。著書、正章千句、玉海集、玉海集追加等。

これはく とばかり花のよしの山

貞室は貞徳門の高弟であるが世間では寧ろこの吉野の句の作者として有名である。芭蕉の古池、貞室のこれはく 蓼太の五月雨、五月雨やある夜ひそかに松の月など、人口に膾炙して居る三幅對ともいふべきもので、これはく の句の貞室であるか、貞室のこれはく の句であるかも分ち難い程になつて居る。正章は其壯時の號である。其門から榎並貞因、乾貞恕、相淵貞山などいふ俳人も出た。

扱てこの句は解釋を待たないで意義も判然して居るやうであるが、吉野の絶景に對して他にいふべき形容の詞もなく、これはく とたい、ひた呆れにあきれ嘆息したといふのである。

何故この句がそれほど有名になつたかといふと、固より代々の俳人が之を賞讃し喧傳し、其外俗曲歌謠の類にまで引用した爲めではあるが、元來この句の何の巧みも弄せず、無邪氣に言ひ放つた其天真爛漫なところが、何人の耳にも聞え易く、何人の頭にも感じ易かつた事が其基因である。例之ば富士山の晴れた雪景

色を見ては、如何なる無風流漢でも、是は立派なものだと嘆稱せぬことはないのと同じく、吉野の花に對して、若し形容の詞があつたとすれば、ア、美しい、といふ一語しか無つたであらう。貞室の句は、其刹那に咽を掘つて出た嘆美の聲であつて、即ち何人の口からも發せらるゝ真情其儘である。且つこの句の出来る以前の句といへば、和歌のやうに優にやさしいことをいふたのでなくば、大抵は文字の操り、掛詞の巧みなどで、下手な手品師のするやうな小細工をやつて居たのであつたから、かういふ真情そのまゝを吐露した單純な句には何人も一驚を喫したに相違ない。よし句の善惡を批判する邊がなかつたとしても、たい其句の珍らしい破天荒であるところに膽を奪はれたであらう。かくて甲傳へ乙談し丙稱し丁嘆ずる間に、この句の眞の批判を下す餘裕もなく、天下の人舉つてこの句を佳句にして仕舞ふやうなことになつた。今日でも其餘勢は尙ほ残つて居つて、たいわけもなく佳句の一例にひくやうなことになつて居る。貞室は俳人中の幸福な男である。

併し一步退いて、靜に句の價值如何を考へて見ると、句としては寧ろ幼稚な寧ろ

平凡に近いものであるが、たゞ一つ、この句の以前にも類句といふものがない。許りか、この句の以後にも亦た類句といふものがない。即ち古今を通じて他に類例のないといふことだけの珍とすべきはある。其外にこの句の尊むべき所以を見出すに苦むのである。尤も後世では、この句の喧傳されて居る爲め、かやうの類句は、直ちに陳腐として排斥されて仕舞ふた。若しこの句が早く世間に埋没して居つたならば、後世いくらも其類句は出たであらうと思ふに。貞室の幸福な男たる所以である。

しづのほれ嗟峨の鮎くひに都鳥

よしの、句を作つたその年江戸に下りて句を作つたのがこのいざのほれと、跡の月はみよしの、雲や富士の雪の二句であつたが貞室はこの二句と吉野の一句とを以て生涯の句とし、其他の草稿は皆焼いて仕舞ふたといふことが傳へられて居る。

都鳥は業平のいざこと、はんの角田川の歌にあるからかりて來たので、又た、いざのほれのいざも其詞と暗襲して居るのだ。いざは上りなさい嗟峨の鮎を食

ひに都鳥よ、といふので都鳥といふ名のやさしさは、いつか上落もして見よとすゝめるのである。たゞ都へ上れといふだけでは曲をなさぬから、そこで嗟峨の鮎といふことを言ひ出して、都鳥が鳥であるから鮎食ひにと結んだのである。あるは作者の考へては、都鳥を桂川の美しい流れに浮べて見たくも思つたのであらうか、そこを鮎食ひにといふところが、俳句として働いて居る、所謂俳諧手段である。

吉野の句と違ふて多少の巧みを弄して居るが、嗟峨の鮎くひにといふことも俗でなく、又た詞つきも思ひきつて居つて面白い。これも多少名高い句で、さすがに貞室の自信して居た程の價値はあるかと思ふ。

松影や月は三五夜中納言

須磨とさふ前置のある句である。謡曲松風などから行平の故事を想ひ浮べたので、十五夜の明月の夜に中納言行平が松影に居るといふ意である。松風の詞に「ア、ちうれしやあの松影に行平の御入り候ぞいて参らう」といふのがある、それから「松影や」と置き、三五夜中新月色などといふ句と中納言をかけて「三五夜中納

言としたのである。又た松風村雨の松といふのが今も残つて居る、その松の聯想もこの句に含まれて居る。

結局謠曲松風の翻譯のやうな句であるが、松の影と言ひ三五夜と言ひ、中納言といふ、いづれも美しい物づくめで、梨地の蒔繪でも見るやうな心持がする。當時流行の掛詞が主になつて居るけれども、掛詞としては上乘なるもので、人をして其技巧に驚かしめる。芭蕉が鹿島紀行に「松かげや月は三五夜中納言」と其狂夫貞室がむかしを慕ふて鹿島山の月見んと思ひ立ち云々と書いて居るのも、其巧みに驚いたことを證して居る。

抱て寐ても肌はゆるさぬ火桶かな

抱いて寐ることは寐ても猥りがましよう肌はゆるさない火桶である、といふ句意。火桶の佗びたさまを、猥りがましようないと形容したやうな句である。後世竹婦人(竹で編んだ籠で夏それを抱いて寐ると涼しいといふもの、又た抱籠などといふ)などにかういふ風の句が澤山ある。こゝで火桶といふのは普通の火鉢のことであるか、又た置火燵のやうなものをいふたのか、未だ確たる考證を得ない。

貞室の他の數句を掲げて見やう。

紫や焼野をけして萱草

涼しさのかたまりなれや夜半の月

猶わはれ撰残されし虫のこゑ

月影やかたけて通る傘の雪

松江維舟

名は重頼、俗名大文字、治右衛門、京師の人。延寶八年六月廿九日歿。享年七十。四。犬子集、毛吹草、毛吹草追加、重頼獨吟百首、懷子、佐山仲山集、今様姿、藤枝集、武藏野等の著書あり。

彼岸として慈悲に折らする花もかな

彼岸は春の彼岸のこと、彼岸の日には特に平生は手折らさない花でも慈悲に折らすのはあるまいかといふのである。花は櫻のこと、俳句では櫻の異名を花といふて居る。佛家の所謂凡俗の得度の意を偶した心持もあつて、世の俗人

は皆其道を得ないで、名利に走つたり、色慾に耽つたり、浮ぶ瀬がなくて三途の巷にさまようて居るが、彼岸會によつて其成佛得脱の道を得るやうにした、いものである、といふ希望を述べて居る。「彼岸とて」といふ發語は俗語の「彼岸ぢやからとて」といふ意味でなく、「彼岸」といふて「彼岸會を修するに就て」といふやうな意味にとりたひのである。維舟の句として最も名高い。

順禮の棒ばかり行く夏野かな

夏野の草高く茂つて居る中を順禮の棒ばかりあるいて行くのが見えるといふ、全く客觀の景色の句である。順禮の姿は草にかくれて見えなくて、其突いて居る棒の先ばかりが見えて居るのである。こゝに注意すべきことは、已に「夏野原」などといふ詞を使はないで「夏野」と言ひ、又た其詞つきが文字のかけ合せもなく、純粹の俳句らしく、之を元祿の句といふにもまぎらはしい程であるといふ點である。

木綿帆やもろこし船も雲の峰

長崎といふ前置がある。長崎港の實景其儘を句にして居る。木綿帆の白帆も

見えれば、もろこしの黒船も見える、その上に雲の峰が立つて居るといふ是も純粹の客觀の句である。何故「木綿帆」と言ひ「もろこし船」と「や」ともを使ふたかといふと、それは句の曲節であるばかりでなく、實景が木綿帆の方が澤山に見えて居てもろこし船は其中に二三艘見えて居たのであるまいかと思ふ。「もろこし船」の「も」は今一つといふ意味で、木綿帆は固よりのこと、もろこし船も亦た雲の峰の下に見えて居るといふのであらう。時代が時代であるから、今日のやうに蒸氣船は多くなかつた、寧ろ蒸氣船を見ればもろこし船とか黒船とか和蘭船船とかいふて居たのらしい。重頼が其實景に接して其儘を句にしたのは非常の手柄で、句の調子も亦た面白く出来て居る。

松島や日のもとの本月の本

松島の絶景は日のもとの國の美景の本となるべきもので、併も月の景色の本ともいふべきものである、といふのである。尙詞を平たくしていふと松島は日本一の絶景であるが、其松島を月が照らした光景も亦た日本一であるとかういふのと同じである。

かうなるとかけ詞ではないが文字のあやつりが主になつて居て、意味は例の淺薄なものになつて仕舞ふた。「日のもとといふから月のもと」といふ詞も出たのであらうが、多少日月のもとといふやうな、日から月へかゝるやうな心積りであつたかも知れぬ。作者は松島をほめちぎつた、これより上のほめやうはないと信じて居たかも知らぬが、松島の方では却つて下らぬお世辭を使はれたやうで餘り難有くは思はないであらう。

維舟は貞徳門の英物で、屢々師及び立圃貞室など、句の批評などに就て争論した事があるらしい。其門人には池西言水、朝生軒春可、高野幽山、中野一三など、いふ人があつたが、彼の上島鬼貫なども其門に學んだ一人であつたのである。其外維舟の句には

やあしばらく花に對して鐘つく事(詠曲三井寺に、今宵の月に鐘つくこと、狂人)
峰入や雲に起き伏す頭巾あり(詠曲花月に、雲に起伏す時もあり云々と)
落行くやこゝは浮世の嵯峨の結

長崎

阿蘭陀の文字か横飛ぶ天つ雁

齋藤徳元

剃髮して帆亭と號す。岐阜の人。後江戸に住し、又た京地に遊ぶ。正保四年歿。享年八十九。著書、徳元獨吟千句、初學抄等。

春たつやにほんめでたき門の松

徳元も貞徳門の一人。東武に住して俳諧五哲の一人と言はれた人である。この句は維舟が犬子集を選した時巻頭に入れた句といふので有名である。門松の二本立つて居るのをめでたしと觀じたので、正月の様を詠じたのに過ぎぬ。尤もにほんは二本と日本とにかゝつて居ることはいふまでもない。

何と見ても雪ほと黒きものはなし

奇なことをいふて人を驚かす句で、雪の白いものに對して反對に黒いなどいふたのである。尤も太極は無極などいふ老子などの詞から白いものは黒いもの、といふやうな謎的言葉を使ふことは別に珍らしいことでもない。深い理

窟も意味もある句でなくて、一場の戯言と見て差支ないのである。其他。

何歌も扇にかけは折句かな

淡路潟通ふや須磨の千鳥影

北村季吟

名は信澄。呂庵再昌院拾穂軒等の別號あり。江州北村の人。寶永二年六月十五日歿。年八十八。著書新續犬筑波集、増山の井、續山の井、俳諧兩吟集、埋木抄、季吟十會集、諸國獨吟集等。(俳諧以外の著書省)

一 僕とほくくありく花見かな

季吟は貞徳門の毛色のかはつた人である。後年歌學所に補せられてからは、眞面目な國學の研究に従事したので、俳諧の方は忘れたやうになつた。だから季吟は貞徳より殆ど五十年後に歿して居るけれども、其俳諧は貞徳の死後間もなく聞えぬやうになつた。

この句などは世間に名高いうちで、一人の僕をつれてほくく花見をしてあるくといふのである。「ほくく」といふので、足輕くあるくさまが想像される。尤も一僕といふから其音にちなんで「ほくく」と言ひ出したことは言ふまでもない。例の詞のあやつりである。

まさくといますが如し魂祭

魂祭は盂蘭盆に魂棚を祭ることと、魂祭をすると佛様がまさくとそこに居られるやうであるといふのである。「まさく」は「まさしく」といふ意味で、何か目の前に在るものやうに思ふ心持をいふのである。其外季吟の句。

忍戀

夏瘦とこたへてあとには涙かな

女郎花たとは阿波の内侍かな

獣は吠る顔なり涅槃像

山本西武

俗稱九郎左衛門、別號を無外齋風外軒といふ。京師に住し綿を商ふ。後壬生に住す。延寶六年二月十八日歿。享年七十三。著書、鷹筑波、氷室守、萩花集、後砂金袋等。

からくに身はなり果て何に蟬

西武は貞徳門中ても貞室と共に貞徳には知己を忝うした男である。

この句は空蟬のことを句にしたので、からくになつてこれから後は何とする蟬ぞといふのである。何にせんと蟬とのかけ詞であることは言はずもがなである。或はこの句は「何と蟬」となつて居る書もある。

目や遠う耳や近よるとしの暮

目は遠うなり、耳は近くなつてもう年の暮になつたといふのである。老人の歳晩の感じて必ずしも年の暮に目が遠く耳が聞えぬやうになつたといふのではないが、それを年の暮にもつて來たところに面白味がある。

が、例の詞のかけ合せて、耳が近いといふのと、年の暮の近よるといふのが一所につめていふてある。

其外

何をけふへんてつもなき更衣

芋も子を生めば三五の月夜かな

この外貞徳門には鶏冠井令徳、石田未得、高瀬梅盛、高鳴玄札、萩野安静、棕梨一雪、半井ト養、馬淵宗畔、中島貞宜等の諸名流が輩出したけれども、それらを一々傳へて居つては、到底制限のある本講義を終ることが出来ないから、遺憾ながら、ここに貞徳門の筆をとめて、談林派の宗因一派に及ぶこととする。

西山宗因

名は豊一、通稱次郎(一に次郎作)。肥後の人。後浪花天満に居す。梅翁、西翁、梅花翁、幽子、忘吾齋、野梅子、向榮庵等の別號あり。天和二年三月二十八日歿。

俳句評釋

西山宗因

享年七十八。著書、寛永千句、西山十百韻釋教百韻、談林十百韻、五百韻、天滿千句等。

こゝにせう梅あり山あり川もあり

宗因は、談林派の開祖である。何故談林派といふかといふことに就いては諸説あるけれども、つまり宗因が延寶三年頃江戸に下りて田代松意等と俳諧をして、さればこゝに談林の木あり梅の花といふ句を作つたのが其原因であらう。尤も其以前江戸には、自ら談林と稱する一派のあつたことは儘であるけれども、當時の人が總て「談林」と目し、後世の人亦た之を「談林派」と稱するに至つたのは、この句のある爲めである。

宗因は俳諧史中の奇傑である。彼が世の中へ出た頃は、貞徳派の旺盛を極めて居る時で、いつか其流れを汲んで居つたけれども、其奇才は到底貞徳派の優弱に満足して居られなかつた、彼は活眼を開いて、俳諧に一道の光明を與へたのである。貞徳派の千篇一律、尙連歌の餘臭を脱せなかつたものを、一躍して他の新たな舞臺に置いたのである。俳句の進歩の上から見れば、貞徳派から一躍して

芭蕉派は生れない。即ち彼は芭蕉派を産む、其階段を作つたのであつた。

扱て此句は、「卜居」といふ前置があつて、其草庵を結んだ時の句である。或は始め京都北野に住んで居つたが、後大阪に移つて天滿に居を構へたから、其時の句であるかとも思ふ。句の意は説明するまでもなく、こゝにせうはこゝに居を定めやうといふので、梅も咲いて居れば、山も程遠からずに見え、水もきれいに流れて居る、いかにも可い場所だといふのに過ぎぬ。山水に梅を配合して其幽閑なことを現はして居る。此句を詠じて誰しもさういふところに住みたいと思はぬものはなからう。

こゝて注意すべきことは、此句の調子が既に連韻調の優美なといふやうな趣味を脱却して稍飄逸に言ひ放してある點である。「梅あり山あり川もあり」と無造作に言ひ了せたのは、宗因以前には殆ど見難い調子である。殊に「あり」といふ詞を重ねて、中八字の重い調子を軽からしめた手段などは、單に詞の操り許りてなく、趣向の趣味を言ひ現はす爲め苦心したところがある。これらは貞徳派などの思ひもつかぬことであらう。山ありといふ方からいへば北野の方に近いが、

川ありの方は天満らしく思はれる。梅ありはどちらにも通ずるであらう。

有明の油ぞ残るほととぎす

宗因作中の有名な句である。有明は明方で、明方の油が残つて居る、即ち灯のついで居る頃にほととぎすの啼くのを聞いたといふのである。世俗に有明行燈といふ一種の行燈がある。それを眞の明方の有明にかけて、有明の灯の油が残つてまだついで居るといふのを直ちに「有明の油ぞ残る」と言ふて仕舞ふた。普通の文章として見ると、有明の油ぞ残るは何を意味して居るのかわからぬが、それを大膽にいふたところが、俳句の面白いところで、宗因の達腕たる所以である。ついでに時鳥を聞いた時に、明方の灯のしら／＼と残つて居るのを見た光景である。或は拾遺和歌集の源順の歌「時鳥待つにつけてやともしする人も山邊に夜を明すらん」などの聯想もあつたのであらう。

白露や無分別なる置どころ

この句はほととぎすの句よりも更に名高い句で、森川許六の如きも古今の句と評して居る。露は如何なる草の上でも、如何なる物の上へでも置くもので、一面

露の降つて居る景色は如何にも快いものであるが、裏面からいふて、無分別にとへても置いて居る、今少し置處があらうものを、といふのである。單に露とばかり言はないで、白露といふところは、從來歌などで言ひならはした詞であるけれども、何處かに露をめて、言ふ心持がある。この美しい露でありながら、分別もなく、即ち考へもなくどこへでも置いて居るといふのと同じである。歌では「白露に風のふきしく秋の野は貫ぬきとめぬ玉ぞちりける」又秋の野に置く白露をけさ見れば玉やしけると驚かれぬるなどを始めとして露をめてること一通りでないが、それと同じ心を、無分別なる置處と反對に言ふたところが、此句の人を驚かした唯一の原因であらう。

句の價值からいへば、趣向のない句で、詞は思ひきつて俳諧味になつて居るけれども、さまで許六が古今の絶誦と譽めるやうなものではあるまい。が、これが談林調の未だ全く詩化して居らぬ點で、却て其時調とも見るべきものであらう。

里人の渡り候か橋の霜

謡曲の詞をかりたる句で、舟辨慶などにも、この家の内に静のわたり候かといふ

である。謠曲では「渡り候か」が「わたらせらるゝ」などいふ意味のわたるで、そこに居るかといふのであるが、それを轉用して川などを渡るといふその方の意味にして仕舞ふた。橋の上に霜が降つて居る、その霜の上に足跡でもついで居たやうな場合、もう誰かこの橋を渡つて行たか、といふのを、謠曲の詞をかりて「里人のわたり候か」と滑稽的にいふたのである。謠曲の詞をかりながら、其詞の意味を轉用したのが作者の働きて、萬更不用意でないところに、注意すべきである。けれども、其意味はと言へば矢張淺薄で、たゞ謠曲の詞をかりて奇を弄したのに過ぎぬ。

關は名のみ花に名こそその御意はなし

奥州へ便りにといふ前書がある。勿來關といふて關所は設けてあるけれども、それも名ばかりで、櫻の咲く頃は其掟もゆるい。殊に勿來は義家の歌をよんだところて、花の名所になつて居る程であるから、花といふ優美な名に對して關守は答め立てはせぬ、けれどもその後さらにも便りもさしませぬ、といふやうな複雑なことを言ふて居る。「花に名こそは名こそ得たれ」といふのと同じで、さうし

て勿來にかけて言ひ、御意はなしは關守の御意がない、といふのと、御意を寄せぬ、ち便りをさしませぬ、といふ兩方の意味に通ふて居るのである。里人の句造は宗因の句として比較的尋常なものを上げたのであるが、此句などは所謂檀林調の格を備へて縦横に荒れ廻つて居る。

先生の夏一二本にて足ぬべし

新樹といふ前置がある。縁陰に在つて讀書すといふやうな漢學者を暗に嘲けたやうな句で、先生あなたの涼みになる夏の木も一二本で宜しうございませう、と洒落れたのである。漢學者といへば何か勿躰ふる癖があるところから、ナアに一本か二本で澤山だと冷評したのである。先生と敬稱を用ひたのも態とらしくて、却て輕蔑して居る。

不盡や扇おつ取直して是を譬ふ

意味は説明する迄もないが、下五字のところへ是を譬ふといふやうな大膽な詞を置いたこと、おつ取直してと或る活動した働きを叙したこと、など今迄の句と非常にかはつて居るのを見るであらう。之に到つて談林調の本色を現はして

居る。

屋根や時雨谷深うして耳遠し

谷深い家に住んで居て、其上耳が遠いから、屋根に時雨が降るのもはつきりとはわからぬ、といふのであらうが、餘りに複雑な趣向を無造作にいふて仕舞ふたので、一讀過した位では、其意味がわからぬ。これらも談林派の天下に跋扈した當時、盛んに人を驚かした句である。

かゝる調子は全く宗因の創意であつた。是を宗因以前の句に比すると、これだけの差があるかといふことは何人の頭にも直ちに感ぜらるゝてあらう。宗鑑貞徳の句を一條の棒とすれば、宗因のはもつれにもつれた糸の如きものである。彼は水の流れるやうなもので、是は山の屈曲凹凸して居るやうな差がある。つまり貞徳派の溫柔流麗に飽いた其反動がこの亂調をなしたので、言はゞ俳諧の革命である。世の革命は一時必ず天下の混濁を免れないが、俳諧の革命も亦た一時の騷亂を制することが出来ない。革命は必ず泰平の曙光である。間もなく芭蕉といふ俳諧の大政事家が、其騷亂の後に出て、始めて俳諧の進むべき大方向

針を定めた。宗因は即ち佛國革命に馳驅したル・メーの如きものであつた。この俳風は一時天下を風靡して、其門に出入するとせざるとを問はず、皆一様に相和した。蕉門の奇才其角の如きも盛んに其が勢に走つて、遂に虚栗集といふ選集までした。芭蕉の如きも、宗房又は桃青といふかりの名で、庭訓の往來雖が文庫より明の春、雛祭人形天皇の頃とかやなど、吟じて居た。されば直接其門に出入した者の狂奔する状は醫ふるに物が無い。眞に天下の奇觀を極めたのである。

其外宗因の句として名高いものが多い。

古歌に曰く千とせを見ゆるかいみ餅、

世の中や蝶々とまれかくもあれ(蝶々のか止め、ととまれ、かつてもあ)

中垣にぬれ定まらぬ柳かな

摺子木も紅葉しにけり蕃椒(蕃椒を磨つたの紅葉して摺子木が赤く)

さなきたにあら音高し節季候

井原西鶴

初鶴永といふ。後西鶴と改む。二萬翁、松壽軒等の別號あり。大阪誓願寺に葬る。行年五十二元祿六年八月十日歿。著書、西鶴五百歌、西鶴大矢數、後大矢數、俳諧石車等。(俳諧以外の著書省)

鯛は花は見ぬ里もありけふの月

西鶴は宗因の高弟で、小説に其神來の奇文を創めながら、傍ら俳諧にも遊んだ。一日住吉の社頭で二萬三千句を吐いてから、二萬堂又た二萬翁ともいふやうになつた。

この句は一寸曲節をして居るので解し難いやうであるけれども、一度解すれば釋然として却て其技巧に驚くであらう。「鯛は花は見ぬ里もありといふのは鯛」といふ魚を食はぬところもあらう、又た花といふ櫻を知らぬところもあらう、といふのをつとめていふのである。そこで「けふの月で鯛や花は知らぬところもあらうが、けふの名月は見ないところはない」といふ趣意である。西鶴の句の尤

も有名なものになつて居る。「鯛は花は」といふ言ひかたが如何にも突然として居つて、先づ人を驚かすけれども、魚類中で最も普通なものは鯛に如くものなく、花卉類で最も普通なものは櫻に越すものはない。さうして、兩方とも魚類花卉類中の王ともいはれて居る。それを捕へたところは矢張凡手段ではない。が、つゞまるところ其趣意は、月は何處をも照らす、誰も見るものだといふ理窟をいふに止まるので、其理窟を生硬な詞でなく、婉曲によく言ひ廻はしたといふ働きを見せる許りである。到底談林調の句たるを免れない。

毛が三筋たらいてそれが呼子鳥

西鶴が山中でも通つた時に猿の啼く聲を聞いて、如何にも哀はれに思ふたことがあるのであらう。俗に猿は三筋毛が足らいて人間になれぬといふ諺がある。猿の啼くのはそれを悲しんで泣くのであらう、それを悲むの餘り人を呼びかけるといふところへ、呼子鳥といふ名のあるを持つて来て、それが呼ぶ、呼子鳥ともちつたのである。呼子鳥は如何なるものであるかといふに諸説あつて一定しないが、言海などには閑古鳥のことに説いてある。兎に角山中で淋しく人を呼

ひかけるやうに鳴くものであらう。西鶴は當時呼子鳥の聲は聞かなかつたけれども、猿の聲を聞いた。それが如何にも哀れであつたところから、呼子鳥もかやうな鳴き方をするのであらう、といふ疑問もあつた。そこで、毛が三筋たらいで泣く、之れが人を呼ぶ、其呼子鳥、といふ順序に句作したのである。別に深い意味があるのではない。

長持に春かくれ行く更衣

夏になつて袷に著更へる。さうして今迄著て居つた春衣綿入などは長持に仕舞ふてしまふ。それを長持に春かくれる、といふのである。花見をした衣など仕舞ふてあると思ふと、どことなくそれに名残も惜まれて、春がかくられて居るといふやうな氣もする。「行く」といふのは或は其長持を藏へ持行くとか、餘所の家へ預けに行く、といふやうな場合をいふので、其長持の動いて居ることを想像せしめる。單に衣を藏めるだけの事ではない。つまり、長持の春の衣裳を入れて袷に著更へるといふことをかく巧みに言ひ廻したのである。長持のやうな小さなものに春といふ大きな感じのものがかくれるといふことの如何にも無理

窟のやうであるけれども、其不理窟のやうなところに一種の趣味がある。これらは西鶴の句として上乘のものであらう。

尙西鶴の句には左の如きものがある。

我戀の松島もさぞ初霞

ことし又梅見て櫻藤紅

大三十日定めなき世の定めかな

辭世(五十二歳)

浮世の月見過しにけり末二年

椎本才磨

幼名は才丸。初め西武門に遊び則武といふ。西鶴に師事しては西丸といひ。別號舊徳翁。天文三年一月二日歿。享年八十三。(或は元文二年八十又九十歳)。著書俳諧阪東太郎、悉くば伊丹發句合等。

水につれて流るゝやうな燕かな

俳句評釋 椎本才磨

才磨は宗因門ではあるが、長生した人で、元祿享保の盛時も見たのであつた。だから其一生中の句を上げると談林調よりは蕉門調に近いのが多い。特に之に上げたのは、才磨が西鶴の弟子であつて、後宗因門の高弟となつたからである。句は水の上を飛ぶ燕は、水を流れるやうだといふそれだけであるが、固と景色を主にしたゞけあつて、何ら詞の巧みを弄しない内に詩的趣味を含蓄して居る。これらは全く芭蕉の俳諧の感化である。

夕暮の、物うき雲や紙鷲

この句の如きは全く芭蕉風である。日暮の雲のじつとして動かない空に紙鷲の上つて居る光景を明にして、物憂さと雲のさまの重々しい鈍いところを形容したのである。日はもう入りかけて居る。紙鷲もはつきりは見えぬが空高々と上つて居る。其紙鷲のある側あたりにとんよりした雲がかゝつて居つて動かない。明日は雨にならねばよいがといふやうな景色は往々見るところである。

浮草のうかれありくや女七夕

才磨の句も必ず蕉門調ばかりといふのでない。かういふ句もある。七夕は女の節句だといふので、皆がうかれあるくといふのを、浮草の處定めず生ひ出づるに言ひかけて、いづれも浮草のうさくした者共がうかれあるいて居るわいと、いふのである。「浮草のは固と、うかれあるく」の、うの字を呼び出す調子の爲めに置いたのであるけれども、此場合一句の枕詞と見るのが穩當である。「女七夕は」めたなばたと讀む。七夕は重に女の祭るものであるところからいふので、自然こゝにうかれあるくのは、女の爲めであるといふことを現はして居る。調子の勝つた意味の、深くない句である。

其外才磨の句に

更衣壁に詩をかく御浪人

景清も呆れし蚤の行方かな

蘇よ少しの間にて美しや

小西來山

俳句評釋 小西來山

初め前川由平に學ぶ。十萬堂、湛々翁の別號あり。泉州堺の人、浪花一心寺に葬る。享保元年十月三日歿。年六十三。著書特に上ぐべきなし。

花咲て死にともないが病かな

前川由平は宗因門であるが、由平はそれ程聞へないで、却て來山の方が名高い。又た來山といふと、却て女人形の記を書いたので有名になつて居る。事は閑田子の記に委しい。

句は春になつて見るもの聞くもの皆樂しく言はゞ極樂世界のやうに見えるといふやうな心を、櫻の花を持つて來て現はしたので、花が咲くのを見ると、人間病氣などして死にたうもない事ぢやといふのである。「死にともないが病かな」といふ詞は如何にも婉曲で、其意味が種々にとれるかも知れぬが、「病かなは病氣である」といふやうに決定した詞で、「死にたうもないのが病氣である」即ち「病氣して死にたくはない」といふのが適切かと思ふ。さらば病氣でなくて外のことでは死にたいかといふと、さういふのではない。つまり「死にたくはない」といふことをいふ場合にたゞ「死にたくはない」といふことの突然なところから、病氣まんぞし

て死にたうもないと多少の綾をつけて言ふのである。花をめづる心持ちで、死にとともになど、露骨にむき出しにいふたところが、却てイヤな理窟を忘れて居て人を驚かす點がある。古今集や新古今集などの感化で、多少は優美といふやうなことを主にして居つた場合に、かゝる露骨なことを憶面もなくいふた勇氣は眞に豫想外である。これらも矢張革命時代の餘沫であらう。

兩方に髭があるなり猫の戀

春になると猫其他の交尾期になつて、雌雄交々追ひかけて居る。其猫の交尾期を春季として猫の戀としたのである。猫の戀をして居る、其雌雄兩方ともに髭がある、と猫の口に生えて居る髭を、其戀をして居る場合に見つけて、髭がありながら髭がありながら戀をして居るわいと滑稽に叙したのである。猫は獸物の中でもやさしい物であり、それが戀するといふから、どんなやさしいかと思ふと、矢張髭だけは突立てゝ居ると多少眞面目な場合に意外なものを見つけたので、自然と人に噴飯せしめるやうな滑稽趣味を現はして居る。

我嫁たを首上げて見る寒さかな

この句に到つては已に元祿調即ち蕉門調の句になつて居る。第一詞の巧みがない。第二趣向に理窟がない。第三其叙事に詩的趣味がある。解は、自分の寐たさまを首を上げて見た時、何となく寒く感じたといふのであるが、佗しく蒲團にはいつたさまが、目に見えるやうて全く談林調の句、徒らに詞の奇を弄した趣向は淺薄な理窟を脱せない、さうして詩的趣味に乏しいものとは同日の論ではない。蓋し來山は元祿の盛時をも見たので、自然其感化を受けたのであらう。其外來山の句數句。

春雨や火燧の外へ足を出し
重たくと雪つけて來よ若菜賣
涼しさに四つ橋を四つ渡りけり

岡西惟中

鳥取の人。一時軒開々堂の別號あり。京都又大阪に住む。元祿五年八月十日歿。年五十四。著書俳話三部抄、近來俳諧風體抄、破邪顯正返答等。

とく散りて見る人かへせ山櫻

惟中は寧ろ芭蕉の弟子園女の夫として名高い。婦は蕉門に、夫は談林に遊んで居たのである。句は早く散つて見る人をかへすやうにしたらよからうと、山櫻に命じたやうな趣意で、ま前がいつまでもさうやつて咲いて居るからこそ、人もそれを見に行くの何のと騒ぐなれといふのである。別に深い意味はないが、普通ならば花を惜んで、いつまでも咲いて居れと希ふところを何か一拍子變つたところを言はう、と果てはかやうな反對なことをいふたのである。「何と見ても雪程黒きものはなし」と同じやうにたゞ奇を弄したのに過ぎぬ。

とくろくや鼠神鳴夏寐覺

鼠が天井で荒れた音を神鳴の音かと思ふて夏の短夜の頃に目が覺めたといふのである。「夏寐覺」といふやうな不熟な語をつかふなり、鼠の荒れる音を神鳴に譬へるなどは、談林調の本色だといふてよい。趣味に乏しいのは言ふ迄もない。

紋日なり家々の楊貴妃窓の月

俳句評釋 岡西惟中

これは遊廓の光景で、紋日もんびと稱へて、特に廓中で祝ひをする日がある。其時は遊女も殊に綺羅を飾り又た容色を装ふのである。それが紋日なり家々の楊貴妃で遊女の美しさを楊貴妃に見立てた。さうして其窓には丁度秋の名月の光りがさして居るといふのである。遊廓の美しさを現はした句であるけれども、餘りに誇張に過ぎ、又た楊貴妃名月と道具の揃ひ過ぎるので、却て態とらしい、淺薄な句になつて仕舞ふた。

其外に惟中の句。

柳から眠りさそふや春の雨

紙鳶かみは上らせ給ひけり

草履やぶれ木履ちびけり年の暮

宗因門には以上の外田代松意、菅野谷高政、乾昨非、中堀幾音、岩橋豊流、志水盤谷、松本青運等多くの英才がある。が、以上で略談林調の如何なるものであるかといふことの説明をした積りであるから、こゝには其煩を避けて暫らく其解説を省くこととした。

已に談林調を説明したから、以下直ちに文學的俳諧の第一期に蕉門派に及ぶべきであるが、其間に尙説明して置きたい數人の豪傑がある。少しくそれを叙さなければならぬ。

山口素堂

江戸の人。別號、今日庵、信章、來雪、酒折、宮司等。深川に俳社を結ぶ。享保二年八月十五日歿。【行年七十五。江戸三吟（俳諧、信章）とくく】の句合等

目には青葉山時鳥初鱈

素堂は始め季吟門で貞徳派に屬して居つたが、談林調の盛なるにつれて、其流行を追ひ、後に芭蕉の起るに及んで又た其風調に化せられた。言はゞ三時代を経た人である。芭蕉との關係は俳諧奇人談にも、されば翁と此叟との交際はものづから古人の風ありていとなつかしと書いて、互に親密であつたことを明にして居る。

この句は素堂の句の中で尤も人口に膾炙して居る。貞室のこれはくよりも

入口に膾炙する點は優るとも劣つて居ないであらう。初夏の情景を述べた句で、目に青葉を見、耳に山時鳥を聞き、口に初鰹を食ふといふのである。目に青葉を見るのも面白い。耳に山時鳥を聞くのも面白い。さうかと言つて初鰹もわるくはない、といふやうな意味を單に其材料だけを以て現はして居る。つまり見る「聞く」「食ふ」といふやうな動詞を省いて、其材料だけを併べたのである。

夏の景色又は人事、其外動物植物など、春とは違ふてよい感じを惹くものが澤山ある中から、青葉、時鳥、初鰹の三つをぬきとつて、それを中心點にして、この句を作つたのである。いづれも初夏の感じを現はすに尤も適切なもので、この句を翻すると、いかなる寒中でも、爽快な感じがする。殊に「目に青葉から讀下す一句の調子が、少しのたるみもなく、語呂も暢びく」として居る處に、この句の面白味は過半籠つて居る。假りに之を「目には青葉、山時鳥、更衣」としても調子の面白味は到底「初鰹」に及ばぬであらう。たゞ「目」「耳」「口」と三つに適するやうな材料を集めたところに、少しく態とらしいといふことだけは、あるが、併しそれらのことは、こ

の調子の爲めに殆ど忘れて仕舞ふ。作者素堂は、或は「目」「耳」「口」と三つの材料を集めるに苦心したかも知れぬ。この句の俗人の口にまで膾炙して居るといふ點も、亦た其邊から起つたことであらう。が、發句としての價値は決して其處にあるのではない。并はこの句の面白いといふ、尤も輕い原因にしてはならぬ。「目には青葉」と上六字にしたのに就いて、或は「目には青葉」と何故普通の句法にしなかつたかといふ疑問が起るかも知れぬ。「目に青葉」といふて強て差支はないが、之を「目には青葉」と併べたのに比べて見ると、調子が餘り急促に失する。餘裕がなくなる。つまり幅のないものになる。といふだけの缺點が生ずる。作者の苦心は寧ろ此方にあるので、凡手の考へ及ばぬ處である。俗人中には、目には「青葉」のはを捨てる、といふ説をいふ者が多い。

夕立に焼石涼し淺間山

淺間山の麓でも通つた時の句で、夕立の降つて來たので、そこらにどろ／＼して居る焼石が濡れた。今迄は曇さうに見えて居た其石も濡れた爲めに涼しく見えるやうになつた。淺間はすぐ目の前に聳へて居るといふやうな場合である。

「淺間山」といふので、「淺間山」全體が夕立に濡れて涼しくなつたと取るのは誤りである。尤も淺間も今迄のやうに暑くはない、雨の降るので涼しくは見えるのであるけれども、涼しい感じを起す重なる原因は、目前の燒石の濡れた處に在る。夕立に燒石、涼しいといふ詞はよく順序よく其場合を現はして居る。つまり夕立に燒石、涼しただけでは場處が判然しない。たゞの石でなくて燒石であるから、普通の山の麓ではない。如何なる場所であらうかといふ疑問は自然に起らねばならぬ。其時これは淺間である、と其場處をきめつゝ、又た一方に其景色を叙して「淺間山と置いたのである」と見ればよい。

土佐が繪の彩色、禿し須磨の秋

この句も名高い句で、須磨を詠んだ句中の面白いものとなつて居る。實に須磨の感じは、この一句に盡きて居るかと思ふ程である。「土佐が繪は土佐派の繪で、彩色の最も濃厚な書である。「土佐が」といふのがある。一人假令は光起とか元信とかいふ人の書とする既、又た土佐繪ならば誰の筆といふことは問はぬといふ説の兩説あるが、いづれにしても差支はない。須磨の

浦の秋の有様は、丁度土佐繪の古びた彩色の禿けたやうなものである、といふのである。須磨の秋の景色の書が屏風なり襖なりに書いてあるので、その書の彩色が禿けて古くなつたと見るのは大なる謬見である。これは須磨の秋を譬へた一種の比喩で、須磨の秋は土佐繪の禿けたのに似て居ると解さねばならぬ。一方に土佐繪の古びた、赤い色も青い色も禿げかへつて、物寂びて居るやうな繪を見他方に須磨の松も古り、萩薄の亂れた秋の景色を見ると、兩者の間に何處となく似通ふたはい感じがある。そこを直に土佐が繪の彩色禿げしと句に作つたので、それを何の如しとか又た何に似たとか言はぬところ、この句の面白味がある。尙一步をすゝめていふと、須磨の秋、これ土佐繪の古びたのか、土佐繪の古びたのがこれ須磨の秋か、兩者いづれをいづれともわき難いやうな感じのするところ、即ちこの句の出來た所以であらう。神韻縹緲として、この句を誦する者亦た畫中の人となり、須磨の秋に逍遙する感がある。

西瓜ひとり野分を知らぬ朝かな

俳句評釋 山口素堂

野分は秋に吹く強い風である。野となく山となく、木となく草となく、悉く野分に吹荒されて物すさまじい光景を呈して居る中に、西瓜ばかり、單りそしらぬ風に残つて居るといふ、野分の吹止んだ朝、畑でも見廻りに出たやうな場合の句である。こゝていふ「西瓜」は蔓でも葉でもなく、其實の事で、大きな青いのが舊位置に残つて居るのを認めたのである。西瓜の形の丸く青々として居るのを、すさまじい荒れ果てた光景の中に點出したのは、色の配合ばかりでなく、よく景色の中心點を捕へて居る。野分の様子が爲に躍然として目に見えるやうである。「野分を知らぬ」は作者の主観で、西瓜と雖も固より昨夜の風には吹かれたのであるけれども、元來丸いもので、他の草や木のやうに手痛い目にも遇はず、其儘に位置を保ち得たゞけてあつたのを、他の草木に比しては、野分を知らなかつたと言つてもよい位である所から、かくいふてのけたのである。この語がこの句の生命である。

ふみも見し鬼すむ跡の栗のいが

これは大江山といふ前置のある句である。まだふみも見ずの歌をもぢつて上

五「ふみも見し」が出来た。これは「ふみも見し」としを濁つて讀むのではない。歌の「見ず」を翻案して其反對の意味にふんで見たといふ心である。作者が大江山あたりを通つたか、又た實際通らなくても、通つてを理想に浮べての句である。大江山だから、鬼すむ跡で、鬼のすむだといふ山を通つて、栗のいがを踏んだといふ句意である。

「栗のいが」は栗の殻であるが、鬼といふ聯想、又た山には栗の毬などの澤山あるところから即ち實際の場合から、こゝに點出したのであるが、情景いかにもかね備つて、一句の魂となつて居る。併し「ふみも見し」の詞だけは、多少聯想懸れて、歌を翻案した滑稽を主にして居る。これらは、素堂の談林を學んだ餘習とも見るべきである。

尙素堂の句には

春もはや山吹白く、道苦し(道のこたさなり)

長雨の雲吹出だせ青嵐

巖島

俳句評釋 山口素堂

廻廊に汐満ち来れば鹿ぞ啼く

悼芭蕉

哀れさやしぐるゝ頃の山家集

池西言水

別號紫藤軒、風下堂。京師人。享保四年九月廿四日歿。行年七十三(又七十二)。京都誠心院に葬る。著書、江戸新道、江戸蛇之餅、俳諧、江戸辨慶、後撰姿、京日記、都二曲集、等。

木枯の果はありけり海の音

言水は重續に學んだと言ひ、又た連歌師玄仍の門、又た季吟の弟子だともいふが、兎に角始めは貞徳派を學んだ人である。この木枯の句は、言水の句中尤も有名なもので、木枯の言水と綽名する程でもあつた。句の意味は、海に近しい廣い野原に木枯の吹き荒んで居る光景を叙したので、木枯

の吹くにつれて、木も草も吹き靡いて居る、其果には波がどう／＼と打寄せて居るといふのを、果はありけりと婉曲に叙したのである。「果はありけり」といふと木枯の果てといふことに何か寓意でもあるやうに聞えるが、決してさる寓意のあるのではない。が、木の葉を吹き散り、草を吹倒すすさまじい風が恐ろしく吹いて居るのを見ると、この風がどこ迄吹くのであらう、といふやうな疑ひの出ぬこともない。それに對して、果のないことはない、果はあるといふやうな意味は多少含まれて居る。

兎に角陸の木枯の吹く光景と、海の荒れた有様とを對照したのが、句の精神である。それをかく寓意ありげに叙したのは、矢張時世の流行で、まだ俳句が發達しなかつた昔の句であるからである。

火の影や人にて凄き網代守

網代守は冬川の中に網代をしかけて魚を取る男で、夜中其網代の番をして居るのである。大方藪か何かで、魚末な番小屋を立て、そこで寒さを凌いで居るのであらう。この句は其番小屋などを覗いて見たやうな場合を詠んで居る。火

の影は、灯火の影といふよりも、焚火の影と見るが穩當であらう。何か知らぬが、ちよろく火が燃えて居る、其火影にすかして見ると、其處に眞黒な恐ろしい者が居る。それは儘に網代を守つて居る人間には相違ないが、併し何となく物凄いと云ふのである。

網代守といへば、直に年の寄つたむくつけな爺を連想する。それが夜もしんくと更けた寂い處に火に照らされて居るといふので、忠盛の捕へた坊主でないかとも怪まれる。忽ち見え、忽ち隠れるといふ様を趣がある。それを徒に妖怪視して、さも恐ろしさうに言はずに、人にて凄きと穩當に叙して居るので、却て鬼氣人を襲ふところがある。作者の老手段は中七字に現はれて居る。

夏の夜は山鳥の首に明にけり

夏の夜の短さを形容したやうな句で、山鳥は尾は長いけれども首は短かい鳥であるから、それを夏の夜の短かい對照に持つて來たのである。「山鳥の首に明にけり」の「に」就いて種々な解釋が出て來る。一見して何の事もないやうな句であるが、詳しく調べて見ると、容易に解し難い。

其第一説は、之を全く主觀の句と見るので、夏の夜といふものを一方に考へて、他方に山鳥の首を連想し、兩々短かいものを對照して、夏の夜の短さは、山鳥の首の短さに似たり、といふたものとするのである。この場合に「の」字は殆ど無意味で、強て解すれば、首に似てといふのを略したものと見る位である。「明にけり」の下五字は、句の曲節で別に意味はない。

第二説は、多少の客觀を交へて、山鳥の木なり枝なりにとまつて居る場合を見たやうな句とするのである。作者が實地にそれを見なくても、さういふ景色を想像したとしてよい。尤も「短い」といふ觀念はこの場合にも働くので、夏の夜が段々明けて行く其中に山鳥の首が見えるところから、それを直に「山鳥の首にと仰山に言ふたのである。夜の明けて行く光景の中には、山も水も木も草も其外種々なものが見えるのであらうけれども、其夜の短さに對して山鳥の首の見えたのが一番目立つて見えたと云ふので、夜が其首にのみあけたものゝ如くいふたのである。普通「に」の字は文法上の虚辭と見る場合の外、物の接近して居ることゝか、其場所を示す時とかに往々使はれて居る。俳句では殊に詞を節略する爲

め、よく「に」の字を使ふて他の多くの詞に代用せしめる事がある。

雑ばかり隣留守に沙干かな

秋水

菊萩に膳を居出す野かけかな

稚竹

陽炎に燃ゆるばかりぞ蝶の羽

蘭辱

の如き其一例で、殊に景色の主眼となるものを澤山のものの中から抜き出して、それを指示する場合は

さし櫛に夕日や残る木綿とり

素壺

ちろし置く笈に地震ふる夏野かな

蕪村

など其例に乏しくない。「山鳥の首に明けにけり」といふ句法を、全く抽象的の句と見て仕舞はれぬ理由は、「に」の字の使ひかたに種々の例があるからで、こゝでも其一例と見たい爲めである。

第三説は、以上二説を合した解釋を下すので、一方では全く主観の句と見ながら其裏面に、之を客観を加味したものとするのである。要するに種々な解釋があるとしても、この句の出来た元來の趣向は、山鳥の尾に

對する首を捕へた、一の滑稽手段である。山鳥の首が特に短いといふ事はないが、夜の長さを形容する時に、山鳥の尾といふところから、反對の短さを形容する爲め、尾の反對の首をかりたのである。作者は恐らく其滑稽を主として、「に」の字のことなどは深く考へなかつたものであらうと思ふ。趣向の由て來るところは淺薄で、句も亦た面白いといふのではない。或は言水が檀林調を真似て居つた頃の句でなからうか。

犬吠えて家に人なし 蔦紅葉

多少人里遠い家の様を叙して居る。例へば其家の側を作者が通つたとすると、犬が居て頻りに吠へる。が、別に人氣もなく至て物靜かだ。と見ると、其家の壁又は塀などに蔦が這ひかゝつて、それが紅葉して居るといふのである。實際ありさうな景色又は事實で、矢張秋の物寂びたやうな感の深い句である。

若し一步を進めてこの句法に就て精細な觀察を下して見ると、單に下五字に「蔦紅葉」と置いたきりでは、蔦紅葉の位置、即ち這ひかゝつて居る場所が判然しない。壁であるやら、塀であるやら、又た屋根であるやら、庭の木であるやらがわからぬ。

それがわからぬと、自然この句の感じも曖昧になる。其點この句の大欠點とも見るべきであるが、併し作者も多少それらの點に注意したものであるか、其批難に答へるだけの用意はしてある。即ち中七字の「家に人なし」といふ「家」の字が、決して等閑に置いてはない。若しこれが單に犬が吼へて居つて人は居らぬやうな家といふことだけをいふものとしたならば、犬吼へて人なきさまやといふので「家」と断らずとも其意味は判然して居る。が、それを態々家に人なしといふたのは、全く下五字に「蔦紅葉」と置く爲めて、其爲め、其蔦紅葉は、木に這ひかゝつて居るのでも、亦た家の外にあるのでもないといふことがわかつて居る。其壁なり庇なり、甍に角家を離れて居らぬといふことを想像せしめる。普通作者の等閑に附すことであるが、これらは尤も注意を要する句法である。

象潟や稲木も網の助杭

羽後象潟の景色の句である。「稲木」は稻を干す掛稻爲めに作る棚のこととて、多く刈田の畔などにこしらへてある。象潟には其水の近くまで田があつて、そこに稲木がこしらへてあると見える。「助杭」は補助の杭といふこととて、たすけくひと讀

む。句の全體の趣向は象潟で漁をした網を干して居る光景を叙したので、網を干す場合、それを廣げる都合で、稲木にも一方の裾が引掛けてあるやうな有様を、稲木も助勢に往て居るといふやうに見たのである。眼前象潟の水が廣く冷やかに開いて居つて、汀の漁家に網を干して居る秋の光景は、白露横江といふやうな感じで、心神颯爽覺えず快哉を呼ばしめるものがある。加之、網を干して居る一方の杭は稲木であるといふやうな詳しい觀察までして居るところは、殆ど後世の天明時代の句の面影がある。殊に句の調子、稲木も網の助杭といふところなど一點のたるみも見ないで、却て大に張つて居るところは、之を天明の句としても何の差別もない。蕪村の句であるといふても人は首肯するであらう。たゞこの句で遺憾に思ふのは、稲木も網のといふのみで、網を干すといふことが判然と断つてないところである。かゝる調子の張つた句には、往々意味の不明といふ難があるが、この句も其難を免れることが出来なかつた。が、全く不明といふのではない。多少智解の作用を待てば、其光景も明らかになつて来る。言水時代にかゝる句を作つたといふ功は、多少意味の不明であるといふ失を償ふ

に足るのである。

菜の花や淀もかつらも忘れ水

前置に東山の臺にてとある。菜の花のさく頃東山から遠方を見渡した様で、淀川もあの邊であらう、桂川もこの邊であらうと思はれるが、一面の菜の花で、その流れも見えない。といふのを、淀も桂も忘れ水と作つたのである。見えないのを「忘れた」と洒落れて「忘れ水」といふ詞を和歌にかりたのである。

山里の思ひかけなき忘水いく世を過ぎて思ひ出らむ(金葉)

うとましや木の下蔭の忘水いくらの人の影を見つらむ(同)

霧ふかき秋の野中の忘水たえまがちなる頃にもあるかな(新古今)

など其例に乏しくない。この句に就いて几董(天明俳人)の新雜談集といふ書に書いて居ることがある。

或時夜半(斐村)其外同志のものと清水寺に詣て侍りて閣上より眺望し侍りけるに菜花黄金を敷たるかことく淀川八幡山の邊りうち霞みて春色えもいはれぬ詠なりけるに忽ちかの言水か

菜の花や淀もかつらもわすれ水

かゝる景情の不易なるをのゝ感じあへりしが一人曰昔の句は何となく手厚く時代時繪を見るやうなり予いふ今の人も菜の花に淀も桂もとまではおもひよるべし忘水と慥に置事難しよしわすれ水といふ趣向うかびたりとも得置侍らず只淀もかつらも夕霞などと幽艶めかして句をまぎらかし侍るが今の流行なり云々

几董は之を激賞して居るが、だゞ歌の詞をかりたといふに止つて、句は多少の理窟を含んで居る。寧ろ景色も平凡でさまで歎賞すべき句ではない。宗因調から芭蕉調に移る、過渡時代の作であらう。其外言水の句には左の如きものがある。

勝鶏の世は若衆に抱かれけり

早乙女の見に行く宮の鏡かな

六月の蜜柑見せけり氷室守

月を見にひと雲非なりけふの山

十夜鐘明日の納豆も叩きけり
鉢叩更に都の聲音なし

上島鬼貫

名は治房、通稱與三兵衛、攝州伊丹の人。横花翁、馬樂堂、囃々哩、犬居士、佛兄等皆別號也。年七十三剃髮して即翁といふ。元文三年戊辰八月二日歿す、行年七十八。ひとりごと、犬居士、俳諧七車等の著書あり。

行水のすてごころなき虫の聲

鬼貫は言水と同じやうに俳諧の數代を経た人、幼にしては貞徳派の口吻をまね、中年にして宗因派に交り、晩年芭蕉の俳風に化せられた。爲めに其句集を見ると、種々雑多の風が存して居つて、却て一種の興味がある。殊に伊丹派と後世からも言はれ、其當時にも一派をなして居つた如く稱せられて居た程であつたから、たゞ漫然と句をつくる許りでなく、一文を書き一句を言ひ捨てるにも、自己の意見といふものがあつた。即ち氣骨稜々とした所がある。芭蕉が俳諧の開

眼をした釋迦であるならば、鬼貫は伊丹の山中に居た阿羅々仙人の類ひて、芭蕉の大業を成就する爲めには、鬼貫の先覺預つて功多かつたといふことは争はれない。「ひとりごと」を讀んだものは、直に鬼貫の達識と活眼とを認めるであらう。此句は鬼貫の句中でも最も人口に膾炙して居つて、殆ど作者の名は忘れられて居る位である。「行水」は夏の夕暮汗流しに湯をつかふ行水で、其行水をした後、湯を流さうと思ふけれども、あたりに虫が鳴いて居つて、どこへ捨てたらよいか、と虫の音をめづる心から、湯の捨て處に思ひ惑ふ心持を述べたのである。行水は夏季であるけれども、この句は秋季の句である。初秋の頃でまだ暑さの残つて居る時分と見たい。湯を流したら虫が鳴きやむであらう、といふ事を氣配ふて湯をすてかぬるといふのは趣向が理窟臭くて、句としては價值が薄い。寧ろ無造作に湯を流した方に趣味がある。

兼平が塚渺々と刈田かな

栗津の原の秋の末の景色を叙して居る。稻を刈つた跡の刈田がひろくと見

えて居る其中に兼平の塚を認めたとのである。兼平といふ人物の上の聯想もあるが、刈田の淋しい景色が如何にも判然と畫かれて居る。

始めに兼平が塚と呼出したので、刈田の中には、外に目に見えるものはないといふことがわかる。粟津の原へ来て見たら、稻はもう刈つてある、目を遮るもの何一つない中に、兼平の塚が明らかに目に見えたといふので、原の廣さがばつとして居る處へ、一つのしまりをつけて居る。つまり點晴の手段で、景色の中心點を捕へて居るのである。殊に其點晴手段が人の墳墓である爲め、荒寥たる景色に一種凄味を加へて、能く景色の調和を保つて居る。實景からいふても、亦た句作の手段からいふても、兩々缺點のない句である。

兼平が塚渺々とといふ調子も緊つて居つて、少しもたるんで居らぬ。「塚渺々と」とつゞけて讀むと塚が渺々と廣くやうにとれるかも知らぬが、この句は上下二つに分けて、兼平が塚渺々と刈田かなと切つて讀む方がよい。さすれば文法上の疑ひもなくなる。

古寺に皮むく棕櫚の寒けなり

物古りた寺の庭に棕櫚がある。其棕櫚の皮のむいてある形がいかにも寒さうだ、といふに過ぎぬ。「皮むく棕櫚」といふと今むきつゝあるやうにもとれるけれども、こゝでは剥いてある棕櫚をいふので、俳句にはかういふ言ひがなは珍らしいくない。「寒けなり」も多少調子の上でかくいふ趣がある。寒さうだと疑ひつゝ、實は寒いと断定していふ意味の方が強さ。冬ふゆの寒い時分に、古寺の棕櫚を見つけた點が已に非凡であるが、たゞ棕櫚が寒いといふだけでは、未だ左程に人を感ぜしめるに足らぬ。其皮のむいてあるところを叙したので、始めて景色が活きた。棕櫚の皮をむいた痕は稍白くなつて、木も瘦せたやうに細く見えるものであるが、其白さが人に寒いといふ感じを與へる此句の主眼である。

尙此句には、世の中をすてよとすてさせてあとから拾ふ坊主ともかなといふ狂歌めいた前置きがある。さる前置はなくなつて、寧ろ古寺の景色を叙した純客觀の句とすべきである。併し前置の歌と句の意味の關聯する處はといふと、大方棕櫚の皮をむいて、之れを坊主が自分の利得とするといふのを輕蔑し

たあたりであらう。が、さうなると句が理窟になつて、折角の面白い景色が興味索然として仕舞ふ。諷刺も事によりけりて、かゝる諷刺は何等の趣味もない。

冬枯や平等院の庭の面

平等院は宇治に在る。頼政の扇の芝の故跡などもある處で、有名な鳳凰堂も亦た寺内に残つて居る。冬も大分たけて、平等院の庭にある草や木が皆枯々になつて居る、之れを其儘「冬枯や」と句にしたのである。句は固と平凡な言ひかたであるけれども、平等院といふやうな歴史上名高いところを持つて來たので、却つて其平淡な言ひかたに味ひがある。鳳凰堂は其丹碧色あせて居る。庭には阿字池といふ池があつて其隅々には菖蒲の枯々になつたのもあり、江には種々の枯木が立つて居る、いづれか其名所の物古りた感じをたすけざるものはない。見るものとして面白からぬものもない。後ろには釣殿があり、眼前には宇治の山々肅然として居る。此際若しこの景を愈せんとならば、たゞ「平等院の庭の面」といふより外はないのである。またそれで十分作者の感じを現はし得るのである。

序にいふがかゝる句作の法は、餘り屢々用ゆべきではない。冬枯と言ひ、平等院といふから始めてこの句法も生きるわけであるけれども、これを他の場合に理窟的に應用したとて、それが必ずしもよいとは限らぬ。否却つて失敗に歸する方が多いであらう。かゝる句法を假りに、總括的、又た輪廓的と名づけるが、總括して面白い場合、輪廓だけ書いてよい場合は、之を文章にしても、亦繪畫にしても、甚だ稀れてある。

花散つて又た静かなり園城寺

園城寺は天津の寺で、源平時代には屢々干戈を交へた地である。花は櫻のこと、花の咲いた頃には何かにつけて騒々しかつたが、花が散つて仕舞ふてまた以前の静かさに歸つたといふのである。鬼貫時代には別に荒くれた法師が居つたわけでもなく、騒々しいといふても、參詣人があるとか、お開帳をするとか、花見に群集するとか、いふので何となく賑やかであつたのが、それが花が散つて仕舞ふてから、花の咲かぬ前と同じやうに物静かさを覺えるやうになつたといふ、當時の寫生であらうけれども、元來が園城寺といふと、すゞ源平時代の事を聯想す

る處から鬼貫の作意にも多少其聯想を持つて、以前の兵馬馳驅の様を目に浮べながら、今の物靜かさを詠じた心持がないとも限らぬ。予も嘗て大津に遊んで園城寺に上つた事があるが、山中大樹森々として居つて殆ど仙境の感があつた。殊に山門から本堂に到るまでの間が存外に隔つて居るので、所謂大寺といふ感じが適切に起る。此句を讀んで、羨、矢張壯大な感じをするのである。

北へ出れば東へ出れば花のなんの

前置に「三月二日京に住どころもとめて」とある、京住居をした時の句である。花見の何のといふ騒ぎで、北へも往たり又た東へもさそはれる、といふやうな意味に過ぎぬ。寧ろ句法の奇を求めた句で、意味は淺薄であるが併し花見の爲めに忙がしい思ひをするさまはよく現はれて居る。此句などは恐らく宗因調をまねて居つた時代の句であらう。北と言ひ、東といふことが、南でも西でもないといふのは、京都の地理を知つて居るものにはすぐ了解される。北は北山のこと、大原三千院の櫻であらう。東

は東山講靈佛社の花のことであらう。かゝることの杜撰でないところは、作者の多少苦心して居る處である。

鶯の音をに入れてたゞ青い鳥

鶯は夏になると鳴かなくなる。それを音を入れるといふのである。鳴く時分には、やれ鶯ぞれ鶯と何が大層に美世の鳥のやうに持たはるすはれど、音を大れて仕舞へば、誰も何ともいふものもない。元來其毛色も餘り美びが好ぬところから、音を入れて仕舞へば、たゞ色青い鳥と思はば、かゞやどいばのである。別に鶯を輕蔑したとも、亦た鶯に同情を寄せて其遇不遇を嘆息したとも、或るやうな深い意味があるのではない。たゞ鶯の音を入れた時の即にいふばかりで、淡泊に鶯の音を入れりや、たゞの青い鳥さと言ひせよ、たゞの青い鳥さを見たい。意味を深く探ぐると、理窟臭い俗な句になるを仕舞ふ。

五月雨や鮎のおもしろもなめくじり

さみだれの降る頃鮎を歴じて世いたとをるが、其おもしろの上は、蜻蛉が目たどいふ出来事を叙したのである。蜻蛉は雨が降ると盛んに出るので、思はぬとこ

俳句評釋 上島克貞

ろに這ふて居ることがある、鬼貫の見た時には鮓のちもしに這ふて居たと見える。さみだれの降る頃の鬱陶しい感じが此景色の上に現はれて居て、自然打たびて住む人の様をも聯想される。「鮓のちもしも」といふ「も」の字か普通な置きかたではない。普通なら「に」とあるべきである。「が」とある以上は「も亦た」のも意味で、他でも見たが「鮓のちもしにも亦た」といふ意味に解するのである。これは句法の曲折であつて、かゝる手段を後世まねした者が多い。

次に注意すべきは、此句は「五月雨」と「鮓」と「蝸牛」と三つとも夏季中のもので、所謂季重さなりの句であるといふことである。「かく材料を多く用ひた句は、當時には甚だ珍らしかつたであらう。尤も天明に下りてはかういふ句の方が却て多いかとも思はれる位で、これ位複雑な句は、鬼貫の創始であるといふでも過言でない。

其他鬼貫の句には

山里や井戸の端なる梅の花

夕霧の塚

此塚は柳なくとも哀れなり
 藪垣や卒都婆の間を飛ぶ螢
 戀知らぬ女の糍不形なり
 破芭蕉破れぬ時もはせをか
 古寺や栗をいけたる櫛の下
 老ろく候紅葉の外は奈良の町
 節季候や白くかし来て間が抜ける

松尾芭蕉

名は半三郎宗房、幼名金作、後忠左衛門と改む。伊賀の人、弱冠國を捨て、京都に遊び、北村季吟に師事す。次で江戸に移り、諸國を行脚して、足跡殆ど天下に普し。俳風を創始して、斯道百年の基を開く。桃青、風羅坊、杖錢子、泊船堂、羽扇、風毛、羊角、天々軒、桃々齋等の別號あり。元祿七年十月十二日歿、享年五十一。

近江義仲寺に葬る。著書には、貝多、ほひ、江戸三吟、冬の日、春の曉、春の日、阿羅野

古池や蛙飛込む水の音

芭蕉時代は所謂元祿時代で、予の言ふ俳諧の第一期である。俳句が文學として生命を興へられたのは、全く芭蕉其人の功績であつた。即ち斯邊の始祖である。此事は既に天下の喧傳するところであつた。今更予のくだりしき説明を待たぬ。而して其人の作として尤も人口に膾炙するものも亦た、この古池の句であることは言ふ迄もない。

この古池の句に就いては、古今多くの俳人が多くの議論を費して居る。又た其意味の如何んをも深く探らずに、たゞ芭蕉一代の句として迷信するやうな傾きがあつて、爲めに句の價值は殆ど審美上の批評以外にあるやうにも感ぜられる。が、それらの先入主となつた感じを強て取り捨て、この句の意味如何を考へて見ると、更に深い意味はない。たゞ古い池に蛙の飛びこむ音がするといふのは過ぎぬのである。最も簡單な事柄であつて事實其儘の眞寫である。即ち何等包法に巧みを生じて居らぬ。さらば蛙が古い池の水に飛び込む音がすると

いふのに如何なる面白味、即ち美があるかといふと、それも別に深い事もない。無理に説明をすれば、古池といひ蛙といふに、何となく物寂びた靜かな感じのする所から、自然市中の住居ではなく、人里離れた隱者の詫住居などを聯想する。そこに、外の音はしないで、蛙の水に飛ぶ音が聞えるといふので、其境尙更ら靜かな心持ちがする。つまり三昧線とか木鼓とか言ふは陽氣な氣持がするが、蛙が水に飛ぶ音といへば、ひつぞりとした物寂びた感じがする、といふと、是るに主題を置いてこの句を作つたものであらう。といふのは尙ほ此句の辯護説であつて、今一步進めて嚴密に其價を論ずると、單に古池に蛙が飛び込む音といふだけだつて、果して隱者の詫住居などが聯想されるであらうか、蛙といふものは、多く噪がしく鳴くものであるが、この蛙は鳴かずに飛ぶのであらうか、多くの蛙であるか、一疋であるか、晝の景色であるか、夜の景色であるか、作者は何處に居るのか、など、穿鑿すると、この句も到底完全な句ではない。詮ずると、ある平凡な單純なことを叙したのに止まつて、其趣味に至つては甚だ味ひ難いといふことに歸着するかと思ふ。

それにも關らずこの句が何故名高くなつたか、又た作者自身も其角が上五字を「山吹や」と置けといふのを排して、眞理を道破したやうに誇つたかといふと、それは平凡な事實を直寫したといふ點にあるのである。以前の句は既に掲出した通り、たゞ文學趣味に富んだ句がないとも限らぬが、多くは連歌の餘韻を嘗めたものか、さうでなくば文字上の滑稽を主としたものであつた。宗鑑、貞徳、宗因、皆然りである。殊に其末派に至つては、殆ど論ずるに足らぬものが多い。其中に立つて單りこの平凡な事實を直寫することを發明した芭蕉は、眞に瓦礫中に眞珠を拾ひ得た如きものである。始めて禪僧の大悟徹底した如きものである。芭蕉がそを自負せず終らなかつたのは、彼の心にも非常な愉快さを感じた爲めであらう。かくして芭蕉を神のやうに崇めた門葉徒弟は、この句を難じたく拜誦せずには置かなかつた。一犬廬を賦へ萬犬實を傳へるにも似て、終に芭蕉一代の名句となつた芭蕉自身は後世の趨向を見ず如何の感を起こすであらう。其外芭蕉の名高い句で

道端の木槿は馬に喰はれけり

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

などいふのも、共に平凡な事實の寫生であつて、決して後世俳人の附會するやうな理窟を含んで居るのではない。道端の木槿が馬に喰はれたといふ事實、此句には馬上といふ前置があるから、芭蕉の乗つて居つた馬が道草を食ふ時に有合ふ木槿をくつたものであらう、即ち事實其儘である、枯れた木の枝に鳥のとまりたのを秋の日暮方に見た其景色、其通りを詐りもなく叙したのである。是れ芭蕉の發明であつて、難て文學其もの、大道であらう。

山里は萬歳運し梅の花

萬歳は正月に来るものであるのに、山里の田舎になると、梅の花の咲く頃に来るといふのである。これらも恐らく事實を其儘に叙したのであらう。が萬歳と言ふと、長閑な素袍姿で、古雅な唄をうたふたり、舞をまふたり、するところから、正月に来るものとはいへ、其姿を見ると、もう春になつたやうなのどかな感じがする。其感じと、山里の鄙ひた場所、即ち太古の如き感じのする山里との配合は、趣味ある配合で、それに尙梅の花を點綴したので、津々壺々さざる趣味を生ずるに至

時鳥大竹原を漏る月夜

つた。つまり山里の長閑な景色が面白く書かれて居るのである。其時空を時鳥が鳴き渡つたといふ純客観の句である。前置に嗟峨にてとある。嗟峨を一度見たものはこの句の趣味を忘れることが出来ぬであらう。大竹原をもる月夜といふので、月の大きさはこの句の表には現はれて居ないけれども、何となく大きな真丸い月が漏れて居るやうに感ぜられる。三日月や四日月ではない。さうして今一步進めていふとも、もる月夜といふので、これが出る時の月であるか、入る時の月であるかといふことも判然しないけれども、嗟峨といふ地理上から又たこの句の趣味上からは、是も何となく出る時分の景色でないかと感ぜられるさうすると、この月は十六夜後二十日頃迄の間の月のやうにも思はれる。尤も月が中天に上つては舞ふては漏る月夜といふ感じがなくなるので、月の位置は低い場合でなければならぬ。或は落柿舎の景色であったか、去來に笛や畑隣りに悪太郎などいふ句があるのを見ると、落柿舎近くにも藪があつた

らしい。若しさうでないとすると、天龍寺前あたりの實景でなかつたらうかとも想像される。やかて死ぬけしきは見えす蟬の聲

蟬は命の短いもので、朝生れて夕べに死ぬるといふやうな詩の句もあるところから、蟬も命の短かいものとされて居た。事實上亦た他の虫類に比しては短い命である。今に死ぬるものであらうけれども、其喧しくぢやんか、鳴いて居るところを見ると、さうして死にさうにもないといふのである。前置に無常迅速とある通り、多少世をはかなんだ心持を、蟬をかりて現はしたたのである。多少理窟に渡つては居るが、寧ろ其理窟を露骨に丸出しに言ふてのけた爲め、厭味といふやうな臭味はない。かゝる主観は、多く坊主の脱教めいで人をして厭な感じを抱かしめるものであるけれども、それを露骨に言ふてしまへば却つて雅味を帯びて来る。丁度飾り氣のない幼児の言ふことが罪なくをかしく聞えるのと同じで、要は天真爛漫たることを期すべきである。併し其場合に於ても、句の調子を忘れることは出来ぬ。この句の如き、一氣に言ひ下して少しのたるみをも感

せぬところ、唯一の生命である。

荒海や佐渡に横ふ天の川

この句は奥の細道にある句で、芭蕉が奥羽から三越路へかゝつた時の作である。古來、單に景色を叙した壯大な句として尊重されて居る。下には浪の荒れた海が渺々として居つて、空には天の川が大きく佐渡の方へ横つて居るといふのである。越後の海岸に立つて、佐渡を向ふに眺めながら日本海のひろくした景色に接して、かくありの儘を叙し、さうして雄烈絶大人をして、其實境に接するの思ひあらしむる手腕は、正に芭蕉の伎倆圓熟の時であつたらうと想像される。日本海の荒いことは航海者の常に苦むところで、荒海といふのも實際である。天の川も多く南北に横つて居るもので、佐渡に横たふといふのも架空でない。これらを指して客觀的叙景の理想の句といふてもよいのである。芭蕉の所謂萬古不易の作をなして居る。

こゝに尙注意して置かなければならぬのは、この句に「天の川」と五字を置いたことである。今日から見れば其時の叙景で何の不思議はないやうなもの、芭蕉

以前には、「天の川」といふのも「七夕」といふのも同じ事になつて居た。だから天の川といふと、其形を見るよりも、空想的に七夕の織女のことを聯想する慣例であつた。

鶴やけふ久方の天の川

守武

かさゝぎのふみかへさじと天の川

浪化

取亂すわかれの雲や天の川

八菊

土器や葦の字さやかに天の川

露沾

塀木すゑ越てもかよへ天の川

其角

のやうな風で、これは専ら和歌の慣用を襲ふたに過ぎぬのであるが、芭蕉に至つて、其慣用を脱して、寧ろ其形を主にするやうになつた。今日天の川といへば七夕の事は殆ど忘れて仕舞ふて、其大きく白く流れた形を聯想して月についての秋の景物と稱するに至つたといふのは、つまりこの句が其素地を作つたのである。即ち芭蕉は天の川の新趣味を發揮したのであつた。尤も芭蕉當時は絶て其新趣味を發揮しやうとしたのではなかつた。この句もたまく、文月七日の

七夕の夜に出来たので天の川の用ひかたは一面古例によつて居るけれども、他方に我知らず新趣味を注入するやうになつたのである。芭蕉の悟入は自然に其効を致したのに過ぎぬ。尙ほ銀河序といふ文章を自身にかいて、この句の前置のやうにして居る。

名月や池をめぐりて夜もすから
月のよい夜尤も名月といへば十五夜に限る池のほとりへ出て月を眺めて居つたが、いつ迄出て居つても飽かない。とう／＼夜中池のぐるりをぶら／＼して居つたといふのである。夜もすがらは夜中一杯といふことであるが、この場合必ずしも朝迄池のはたに居つたと見ぬ方がよい。夜も大分更けたに感じて、長らく池の端に居つたといふ時間の關係から、作者の心持ちて夜中一杯といふ風に見るのが穩當かと思ふ。

池といへば直ちに水を聯想する。水に月清涼の氣一句に充滿して心持ちのよい句である。この池も山間などの澄り水でなく、水のいづむ透き徹るやうな奇麗な池であらう。

年暮れぬ笠著て草鞋はきながら

歲月人を待たず勿忙又勿忙なる感じは讀むもあふ。芭蕉は或年の暮に丁度旅立たうとして笠を着たり草鞋を穿いたりして居つたと見える。其場合年のたつことの如何にも早いのを感じたのである。旅立つ時の心忙しい場合と年の暮の心淋しい感じとを對照せしめたのが此句の主眼である。笠著て草鞋はきながらといふ句法がよく其感じを現はすに適切である。さうして其場合が抽象的でなく、よく具象的に現はされて居る。年の暮れぬといふのと、年の暮といふのは多少の差はあるが、こゝではさまで大差はない。つまり下十二字の句法に適應する爲め上を働かして置いたのである。或は上五ががく働いて居るので笠を着たり草鞋を穿いたりして居る間にもう年が暮れたといふやうに長い時間を含めた句とする解釋もあるが、予はそれを取らぬ。尤もさういふ心持は多少無いとはいへぬが、表面は何處迄もある年の暮の芭蕉の狀態と解して、裏面にさういふ感じを句はす位に止めたい。芭蕉の如く一生を旅中に暮した人は、がゝる場合に遭遇したこと一再ではなかつたであらう。これらもあ

りの儘を平淡に叙したのに過ぎぬ。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

これは芭蕉の辭世の句として何人も知るところである。其終焉記花屋日記の

中に

惟然手記云(上畧師芭蕉の事)曰我邊地波濤のほとりに草を敷寝塊を枕として
終りを取べき身のかゝる櫛の上にまかも去來までの友どちにきくしく付
そひ鬼録に上らん事受生の本望なり丈草去來を召し昨夜目のあはざるま
不圖案じ入て吞舟に書せたりおのく詠じ給へ

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

枯野をめぐる夢こゝろともし侍るいづれなるべきこれはこれ辭世にあらず
辭世にあらずるにもあらず病中の吟也まかし斯る生死の一大事を前に置な
がらいかには生涯このみし一風流とは云ながら是も妄執の一ともいふべけん
今は本意なし去來云(中畧)列坐の面々感慨悲想して慟絶聲なじこれ師翁一代
の遺教經也此日より殊更にふとろへ給へり(下略)

とある。これをよめば此句の意味は自然に默會することが出来るであらう。
併し強て解釋をすれば旅で病氣をして何となく心細く淋しい思ひをするので
夢にも枯野の淋しいところをかけづるやうなことを見る、といふのである。枯
野は冬の草木も枯れ果てた野原のことで、屢旅をした芭蕉は屢枯野の荒涼たる
景色に接した旅中の心細さに自然昔の心細かつた事などを夢に見るなど、誰れ
にも有勝の事、殊に芭蕉自身にしては、枯野を夢に見るなど、其時の實際であつ
たかも知れぬ。一讀悽愴の感に堪へぬ句である。

此外芭蕉の句は名高いもの、名高くなって面白きもの枚擧に遑ない。僅に四季
八句を以て其風昧を知らんこと固より難いけれども、其幽寂閑靜の趣味を鼓吹
した一端は略観ひ知る事が出来るであらう芭蕉は幽玄といふをもて俳句の生
命として居つた。尙ほ數を擧ぐ。

からかさ押分見たる柳かな

奈良七重七堂伽藍八重櫻

時鳥聲横ふや水の上

さみなれをあつめて早し最上川

芭蕉野分して盃に雨を聞夜かな

朝顔は下手のがくさ一衰れなり

初時雨猿も小鏡をほしげなり

金屏の松のふるびや冬籠

榎本其角

幼名源助(又源藤後順哲と改む)。年十四始めて芭蕉を師とし學ぶ。江戸の人。

螺舎寶晉齋晋子、文合庵、狂雷堂、狂而堂、六病庵、善哉庵、雷柱子、著子等の別號あり。

寶永四年二月二十九日歿。行年五十五。著書は淡田舍句合、虛粟集、新二百韻

盡集、新山家、續虛粟誰か家花摘集、つを昔雜談集、枯尾花、句兄弟、若葉谷、俳諧欽

續綴、末若葉、焦尾琴、類柑子、五元集等あり。其角は芭蕉の門下にして、芭蕉の

鶯の身をさかさまに初音かなと評す。其角は芭蕉門弟の逸材として、後世まで風雲と俳稱される居る。性落放逸小

節に拘泥せず、酒を嗜んで始終豪放の氣を吐いて居つた。芭蕉と一坐して句を

作る時も、列坐の人を驚かすものは、いつも其角であつた。芭蕉は其角を評して

「晋子の俳諧は伊達風流にして作意の働き面白きはあり」と言ひ、又「俳諧の定家

卿と稱し、去來はさはやかなる事は此人に及ばず」と言ひ、許六は「たとへば堀ぬき

井を見るが如し、水脈まではほりぬきたりいへども五湖の廣さを知らざるに似

たり」と其俳風を評したるなど、いづれも其角其人の面目を見るに足るであらう。

芭蕉歿後、江戸座の一派を立て、門葉甚だ多かつた。

この句は、燕村が蕉門十哲の像を書いた時、其角の贊にあてた句であつたので、後

世名高くなつた。句の意は、鶯が倒さにとまつた時、初音をないた、といふのに過

ぎぬ。鶯や小太刀はいたる身のひねりといふやうに、鶯といへば其飛びかたの

雀の遅鈍に似ず、又た燕の輕跳とも異なり、何處かはさくしたところがある

やうに思はれるが、其飛んで居る間、身体が倒さになつた時、初音を鳴いたといふ

際、どい場合を愈したのである。これらを見ても、伊達風流にして作意の働き面

白さといふ芭蕉の評の當つて居るのに氣付くであらう。事柄は趣味に貧しい、

寧ろ下手にいへば俗具に陥るところを無造作に言ひ放したので、一見人を驚かす處がある。併したゞ人を驚かす許りて、驚かす以上のことは甚だ稀れてある。雜のさま宮腹々にましくける

雜人形の様子は丁度宮腹の御方のやうだといふのである。宮腹は皇女の生み給へる方のことであつて、つまり人形の優にやさしい有様を形容したやうな句である。「みやはらく」と重ねたのは、雜のいくつもあることを聯想せしめるのと、調子を面白うしたのとの二つの注意によつて居る。例の其角の無頓着さで、一氣呵成に言ひ下したやうな句であるが、必ずしも趣味を解さないで、無鐵砲に放言したのではない。此句の如き儘に其角の長所を現はして居る。

越後屋にきぬさく音や更衣

其角は又た好んで人事を讀んだ。芭蕉が景色の幽寂を愛して居る間に、其角はよく人事繁忙の美を研究した。其角の集中、言葉を探り、漫に人を驚かす奇なことをいふた外に、人事を咏んだ句の多いのは、元來が江戸育ちの繁華になれた爲めでもあらうが、全く人事美を忘れずに研究して居つた故であらう。この句な

ども其一例中の句である。更衣時分て、人は裕を買ふの、浴衣を染めるのと騒ぎ出して、爲めに越後屋白木屋大丸の如き呉服屋は皆忙しうなる。其越後屋の即興を愈した句で、絹を裂く音が如何にも耳立つて聞へる。固と更衣などには一種の伊達を競ふた江戸子にあつては、其絹をさく音が如何に愉快に感ぜられたか、己れ自身買ふのでない、他人の買ふ餘所事であるとしても、其音を聞いて一種の快感を起したことは争はれぬ。又た琵琶の響きなどを四絃一聲帛を裂くなど、形容もしてあつて、きぬを裂く音は、殊にきはだつて聞へるものである。更衣時分の状態が明かに書き出されて居る。

名月や疊のうへに松の影

其角の句で最も人口に膾炙して居るものと言へば、恐くこの句と、稻妻やきのふは束けふは西「我雪と思へば輕し傘の上の三句であらう。俗歌俗語にも屢引用されて居る。十五夜の明かなる夜、疊の上に、松の影のうつた場合を其儘に叙したのである。地面にうつた影はさまで珍らしくはないけれども、疊の上に落ちたので、それを珍重する心持も出るのである。花影欄干に上るなど、いふ

趣を多少變化したので、草庵閑寂の情言外に在りともいふべき句である。併し其角の句としては寧ろ平凡で、何の働きもないところ芭蕉の古池やに類したものであらう。其角の、人事好き伊達流でありながら、かゝる平易な叙景の句が喧傳されたのは一の不思議ともいふべきである。

いつしかに稻を干す瀬や大井川

其角の句必ずしも人事的伊達流のみではない。かやうな寫生的叙景の句もある。これは恐らく上京時分の途中目にふれた景色を叙したのであらう。大井川の廣い河原に稻の干してある光景で、其干してある場處は以前水が流れて居つたところまで及んで居るといふのである。水の流れて瀬をなして居る時分には、そこまで稻を干し廣げやうとも思はなかつたであらうが、段々干して居る中に、いつの間にか、以前の川床にまで達したといふのが「いつしかに」といふ所以である。稻干すといふ句にしては、珍らしい見附けどころで、大井川の大きな秋の景色が眼前に書き出される。のみならず、五月雨頃も過ぎて、段々水も減つて行く實情にも適して居り、河原の廣さまだ暑さの残つて居るいら／＼するさま、

他の一方には風物漸次に凋落しかゝる荒涼の情も見えて、一稱三嘆に値する。其角は到底平凡な作者ではなかつた。

秋の空尾上の杉にはなれたり

秋の空は殊にすみきつて、春夏などに比べては、一層高く感ぜられる。詩にも秋高馬肥などあつて特に崇高なやうに思はれる。その感じを「尾上の杉にはなれたり」と叙したので、今迄が尾上の杉にくつ／＼して居つたといふのではないが、秋になつて、特に「はなれたやうに感じた」といふのである。尾上は峯の上のこと、山の高い所、そこにある杉といふので、杉は眞直に上へ伸ぶる木である。其の杉がいかにも高く思はれる、それさへ遠く離れて見えるといふので、秋の空の高さを現はして居る。が、これは高さだけの解釋であつて、未だこの句の趣味を解き得たとはいへぬ。尾上の杉といふのに、たゞ高いものといふやうな抽象的感じを離れて、他に具象的一種の美がある爲め、自然この句にも、秋天の透徹したやうな崇高な趣味が含まれて居る。「尾上の杉には杉を」といふのと意味に大差はないが、「杉を」といふと調子が遅鈍になる。ついではこの透徹した感じを妨げるやう

にもなるところから」と置いたのである。普通の文法から言へば少しの無理を免れぬが、句の趣味上からは已むを得ない事である。

からびたる三井の仁王や冬木立

三井寺のからびた仁王の立つて居る側に冬木立のある景色を叙したのである。からびたるはひからびたるの畧で、色も禿げ、處々窺みても居るやうな古びた様である。古びた仁王に木の葉も落盡した冬の森の配合は、雪舟の書幅も及ばぬ雲慶の彫琢も如かぬ、蒼古な作品であらう。この句も恐らく三井寺に詣つた時の寫生の句であらう、芭蕉の荒海やとは趣きを殊にした千古不磨の句である。尙其他の句を左に。

七草や明けぬに聾の枕もと

夕日影町中に飛ぶ胡蝶かな

時鳥一二の橋の夜明かな

卯の花やいづれの御所の加茂詣

烏帽子屋は烏帽子着て見よけふの月

末枯や馬も餅くふうつの山
あれ聞けとしぐれ来る夜の鐘の聲
爐開や汝を呼ぶは金の事

服部嵐雪

幼名孫之丞、又治助、後彦兵衛といふ。淡路に生れ、江戸に住す。芭蕉に師事して嵐亭治助と言ひ、嵐雪と改む。寒寥堂、黄落堂、不白軒、石中堂、玄峰堂、蓼太郎、佛山大居等の別號あり。寶永四年十月十三日歿。行年五十四。著書には、其袋集、或時集、錢龍賦、寶晉齋其角傳、雪中庵嵐雪傳等あり。

元日やはれて雀のもの語り

嵐雪は其角と名を等うした蕉門の高弟で、十哲の隨一といはれた。江戸に芭蕉を迎へて、大に斯道を鼓吹した。けれども其作品は遙に其角の下にあつたらしく、其角嵐雪と併稱はするが、寧ろ其地位よりする位であつたらしい。許六は彼を評して「本性柔弱にして花あるに似たれども實はなほなし。相應にとりはや

す様なれども、全軀とりしめたる血脉なし。たとへばよく料理する人に献立を
書せて、その献立を前に置き、客をもてなすに似たり云々と、或は其評適中して
居るであらう。芭蕉歿後、矢張一派を立て、雪門と言はれた。東登、蓼太、完來等
相次で其後を承けた。

この句は元日の光景を叙したので、一陽來復して人々の長閑さうな様子は固よ
り、非情の草木迄何となく目新らしく思はれる際、雀のちゆうく、囀つて居るの
も、何やら話でもして居るやうに思はれてなつかしいといふのである。「晴れて」
は天氣がようて、特に前晩雨が降つて居つたといふことを示すのでない。所
謂はれなくするといふやうな意味で、元日の天氣のよいのを現はしたのである。
許六の所謂柔弱な處があるやうて、調子は張つて居らぬけれども、元日の心持は
嵐雪一派によく現はされて居る。

石女の雛かしつくそあはれなる

石女は「うまずめ」て人に嫁がない女のこと。獨身で暮して居る女が雛祭をして、
人形を抱いたりさすつたりして居る。それを哀れなと思ふたのである。子の

あるものが、子をのやうにいつくしむても、普通な事であるが子を産んだ事
のない女が、さも自分の娘のやうに雛にかしづくと思ふと、其心持を察して哀れに
感ぜられる。深く悲惨な感じがするといふのではないが、淺く可愛想な心持に
なる。至極眞面目な句で、石女に同情の深いものは爲めに暗涙を催うすであら
う。「かしづく」は附さそふていつくしむ意味である。

文もなく口上もなし粽五把

粽は「ちまさ」と讀む。五月の節句にこしらへてくふもので、粳粉をこねて、芋の子
のやうにし、それを菰又は笹で包んで蒸したものである。粽を呉れる人から、其
爲め文もかかず、又た口上も言はず、五把だけ置いて去んだといふ句の意。粽は
五月の節句にこしらへると毎年さまつたもので、其取りやりもいと手輕い。こ
の句は其手輕いことを具象的に現はしたので、物を呉れるのだから、何かわけが
ありさうなものぢやが、別に文もなければ口上も言はずに黙つて置いていつた
といふのである。今は柏餅ばかりになつて、粽は殆どすたれたけれども、當時は
粽が普通であつたのであらう。この句によつて自然其頃のつきあひの如何に

も儀式張らず無造作であつたことの一端をも知ることが出来る。

黄菊白菊其外の名はなくもかな

其角がこの句を聞いた時、菊の句として空前絶後であると讃嘆して、以来菊の句は作らなかつたといふやうなるが傳へられて居る。其爲めこの句も名高くなつた。句の意味を碎いて言へば黄菊と白菊とがあればもう澤山で、其外にはもう何菊も不用だ、といふのである。「其外の名」といふて、菊といはぬところが、句作の曲折で、何にも名ばかりをいふのではない。この場合には「名」と「菊」とは同じ意味になるのである。つまり前に「黄菊白菊」とあつて、菊の字が已に二つはいつて居る。その上尙ほ「其外」の菊といふのは、菊といふ字の重複で、人を飽かしめる。それらは名工の苦心を待つて始めて知るのではない。句作者は苟くもこの心掛けがなければならぬ。元來菊といふ花は古來より愛でいつくしむ花で、又た晩秋に咲く處から、重に潔い花といふ感じがある。それにも係らず、植木師などが巧を弄して、種々の色、種々の枝振りなどを工夫し、折角の潔い花を一種の玩弄品のやうにして仕舞ふ傾きがある。加之、それに怪しい漢名和名などを附して、

殆ど識者をして其愚に堪へぬ感を抱かしめる。嵐雪當時にさういふ事があつたか否かは知るよしないけれども、嵐雪は矢張菊の元來の趣味を愛して、黄菊白菊を以て最も高しとしたのである。句法もすら／＼として何等の滯滞なく、菊の花の白さを見るが如き感じがする。其角のこれを讃嘆したのは、眼識ありといふべしであらう。

相撲取ならぶや秋の唐錦

相撲取の裸躰で並んで居るさまを主觀的に叙した句で、普通の人ならば、肌を現はして居つたりすれば、何處となく厭に感ぜられるが、相撲取の裸躰は、其筋肉の具合と言ひ、色艶と言ひ、さもうつくしく思はれる。丁度蜀紅の錦でもひろげたりやうな心持がするといふのである。同じ唐錦でも春の唐錦といふと、けは／＼として目もはなやかに思はれるが、秋の唐錦といふと、少し色もどんよりして居つて、銀色など多く交りつや／＼しないやうに感ぜられる。ところが相撲取を錦にたとへても、不自然に感ぜぬのみか、却つて面白味を生ずるところであらう。相撲取のさまを形容して餘蘊ないと言ふてよろ。

蒲團きてねたる姿や東山

京都の東山の冬のさまを、これも主観的に形容したので、三十六峰うねくとなだらかに南へ走つて居る姿は、丁度人が蒲團を着て寝て居るのと同じだといふのである。京都の地勢、山高からず水早からず、見る物悉く優美な感がある。殊に東山などはなだらかな處、京都の特長を示して居るかとも思はれる。蒲團着たといふ形容も、實に其様に適切であるといふてよい。其句法のずるくとしまりのないやうな處も亦た句意に合して居つてこれらを指して京都然たる句だといふべきであらう。

門の雪白と鹽のすがたかな

嵐雪の住居か、亦た他の家でもよいが、兎に角しばらく住つて居つた家に雪の降つた光景で、其門に白や鹽などが置いてあつたと見える。平生は白も鹽も目なれて居つて汚ない白だとか古い鹽だとか思つて、別に目をとめもしなかつたが、雪の降つた朝、門へ出て見ると、其白や鹽に雪が積んで居る。いつもは何でもなかつた其白鹽が何となく風情のある面白いものに見えたといふのである。姿

哉は其様子かなといふだけで、よいともわるいとも意味不明瞭のやうであるけれども、かなと姿を強めていふたところに、其姿をめていつくしむ心持が現はれて居る。これらも判然と露骨に言はぬところに味ひがある。殊更雪の白いので其汚ないところを隠したといふのではない。白や鹽に雪の積んで居る其形が面白かつたのである。有りふれた場合であるけれども、そをよく無難に叙して居る。

其外嵐雪の句を擧げる。

梅一輪一輪つゝの暖かさ

ぬれ椽や齋こぼるゝ土ながら

顔につく飯粒蠅に與へけり

竹の子や見の齒くきのうつくしき

初秋の心うこきぬ繩籠

名月や煙道ひ行水の上

今少し年寄見たし鉢叩

向井去來

通稱平次郎、又治郎太夫と云、名は兼時又義焉。肥前の人、京都に住す。別號を落柿舎と云ふ。寶永元年九月十日歿。行年五十三又六十二。洛東眞如堂に葬る。著書には伊勢紀行、去來抄等あり。

元日や家にゆづりの太刀はかん

去來は謹嚴正直の人で、殊に芭蕉の信頼する人物であつた。芭蕉が大阪で病氣をした時、去來が京都から看病に往つたのを迎へて芭蕉は、殊更汝は骨肉をわけし思ひあれば三日見されば千日のおもひせり然るに今度かゝる遠境にて難治の憂に罹り再會有ましく思ひ居たりしに逢見ることの嬉しさよと袂を拂りて涙に咽んだとある。これを見ても、其芭蕉との情交が想見されるであらう。許六彼を評して、天性正しくうまれたまふによりて難して言はずとやはやしすこし欠たり。故に不易辨の句は多けれども流行の句すくなし。たとへて言ふと

きは、衣冠束帯の人遊女町にたてるが如し、殿上のましはりに於ては一人の人とも稱すべし。遊女町のとりはやし少し缺たり云々能く去來の俳風を評し盡して居る。芭蕉歿後は、尙ほ其身を持すること注意周到であつて、屢許六其角等と俳風を論じて、侃々諤々の説を立てた。許六の俳諧問答は其贈答した議論を輯めたものである。

この句は元日の威儀を正しうする場合のある事を叙したので、外の日とも違ふから、家に傳はる重代の太刀をはいて、迎容正しく年を迎へやうといふのである。武士に生れた者としては、重代の太刀といへば如何にも重々しく感ぜられる。又た元日にはそれ／＼勤むべき儀式もあつて、一年中の大事な日となつて居る。殊に天性正しき去來としては、この日をよい加減に暮らす事は出来ない。この句の出来るのも決して偶然ではなかつた。

何事そ花見る人の長刀

何事であるか、花見に来て長い刀などをよこつこしくして居る者は、と長刀をさして居る男を咎めたやうな句である。長刀は普通より寸尺ののびた刀で、荒

くれ武士などが好んでさした物であらう。花見といへば上下貴賤の隔てなく、何れも心樂しう遊ぶべきであるに、長刀をさして我物顔にあるさまはるのは、風流韻事を解せぬ奴ぢやとたしなめる心持もある。昔は武士と町人との懸隔が甚しかつたもので、武士は何事によらず威を振ふたものらしい。花見に来てまで、自分一人の花のやうに振舞ふたのを憎んだのは正に然るべきことで、固と長刀ばかりを憎むといふよりも長刀をさすやうな没分曉漢を叱責した物と思はれる。

湖の水まさりけり五月雨

湖はこゝでは琵琶湖のことであらう。さみだれが降つゞくので、湖水の水嵩が増したといふのである。大きな湖水の水の増減などは少しの雨量位ではわかるものでない。五月雨のどうく〜と降る勢ひを以てして始めて其増したことを知るべきである。湖水の大と五月雨の強と、相待つて壮大な句となつて居る。これも必ずしも水が幾尺増したといふことを計算的にいふのではない。増したと作者自身思ふだけでもよいので、要は湖に五月雨の降る景色を見るのである。

る。

卯の花の絶間たゝかん闇の門

所謂五月闇て黑白もわかぬ暗さである。灯もついて居なければ、何處が垣やら門やらも判然しない。が、其闇の中にうつすらと白い卯の花が見える。こちらと向ふとに見えて、其間が絶えて居る。大方あの絶間が門のあるところであらうから、あそこを叩かう、といふのが句の趣意である。人でも尋ねて往つたやうな場合であらう。

ひらくにさける垣根の卯の花は木の間の月の心地こそすれ (千載集)

卯の花のさけるあたりは時ならぬ雪ふる里の垣根とぞ見る (後拾遺)

卯の花の垣根ばかりの夕月夜をちかた人の道や迷はむ (新後拾遺)

など古歌の例證もあつて、卯の花の白い色は殊に目立つものである。貫之が蟻通の宮に詣てた古事なども思ひ合はされて、何となく優美な感じがするのである。

岩鼻やこゝにもひとり月の客

岩鼻は岩の端で、岩の端のやうな思はぬところにも月を見て居る者があつて、こ
 こにも一人月の客が居るといふのである。この句法からいへば、月の客自身が
 乃公こゝに在りと名乗るやうにも取れ、又た其客を他から見て珍らしがるやう
 にも思はれる。この句は去來抄に出て居る句で、猿蓑集選定の時種々議論があ
 つた。

去來曰酒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど予は客の字勝りなんと申先
 師(芭蕉)曰猿とは何事を汝此句をいかに思ひて作せるや去來曰明月に山野を
 吟歩し侍るに岩頭又一人の騷客を見付たりと申先師曰是にもひとり月の客
 と己と名乗出たらんそいくばくの風流ならめたと自稱の句とすべし此句は
 我も珍重して笈の小文に書入けるとなむ予が趣向は一等下り侍りけり先師
 の意をもて見れば少し狂者の感もあるにや云々
 と書いて居る。詞つきの不明な爲め、評者と作者の解釋を異にして居るのも尤
 もである。併しかういふ議論のあつた爲め名高い句になつた。若し尙一步を
 すしめて言へば、去來は漫然と山野を吟歩すといふけれども一夜のうちにとれ

だけの山野があるけるものでない。普通岩といへば、山にしても多少奥深い谷
 の聯想が起るが、さやうな奥深い谷まで往たといふ想像は浮ばぬ。さればとい
 ふて、端山や野の中に岩といふやうな大石が兀然とあるといふのも不自然で、何
 處かの名所か何かでなければ、さういふ場合は稀である。依て思ふに、この岩
 鼻は甚だ突然として居つて、場處の不明といふ醜を免れぬ。其不明といふこと
 から、或は之を海岸の岩とも見立てたく思ふ。去來は首肯するであらうか。

魂棚の奥なつかしや親の顔

孟蘭盆會に佛を祭る棚をこしらへる、それが魂棚である。又た聖靈棚ともいふ。
 けふは迎火を焚いて魂棚へ佛様をお迎へ申してもう來てござると思ふとなつ
 かしかつた親御の顔が自然と目の前に浮んで來る。佛様が來るといふのもほ
 んの佛説で、架空な事とは知りながら、親なつかしさに、ひよつと何處かに見えは
 せぬかと、魂棚の奥の方を覗いて見る、といふ句意である。親には孝行をせんな
 らんものなど、いふ理窟上からさう思ふのでなくて、たゞ一筋に亡くなつた親
 をなつかしむ感情からいふので、この句の平淡なところに盡きざる趣味がある。

應くといへど叩くや雪の門

雪の降つた夜はもう誰も来る人もなからうと早く門を締めて置いた。すると誰か知らぬが遠かに表戸を叩くものがある。少し意外の心で、應々と答へながら、今開けるといふても、それが聞えぬかして頻りに叩く、といふやうな場合である。應々と答へるものは家の内に居るもので、門を叩くものは家の外に居る。雪の降つた夜などにはそれこそ往々有勝ちの事である。この句に就て去來抄に記するところを見ると、丈草、支考、正秀、曲翠、其角、露川等の同門者悉く近來の句（芭蕉歿後）と讃嘆して居る中に許六は單り尤佳句也いまだ十分ならずと評して居る。十分ならずといふ意義不明ではあるが、この句は去來にも似合はず、調子の劣つた句であることは争はれぬ。尤もかゝる場合もあり、意味も判然とはして居るが、應くといへど叩くや雪の門と讀下した調子が多少俗臭を帯びて居る。それは、應くといへどといふのが餘りによく調子が合ひ過ぎて居る爲めてないかと思はれる。歌でも謠ひても調子に合ひ過ぎたのは却つて妙味を殺ぐ感があるのと同じに、雪の門を叩くといふのに對して、餘りに返答がはつきり

し過ぎるといふ憾みがある。立入つた穿鑿ではあるが。この句をよむと、「オー」と答へると、「トン」と叩くのと、兩方の音がはつきりと掛合になつて、「オー」「トン」が少しも紛れず響くやうにも思はれる。この點が調子の上は俗臭を醸す所以であらう。元祿の先輩が讃嘆したものに非難をいふやうであるが、予は許六一人の評に加擔するものである。

尙去來の句を左に。

瀧壺もひしけと雉のほろゝかな

五六本よりてしだるゝ柳かな

乘なから馬くさはませて月見かな

秋風や白木の弓に弦はらん

凧の地にも落さぬしぐれかな

其古き瓢箪見せよ鉢叩

森川許六

名は百仲、字は羽官、通稱五助、初め金平又兵助と云。江州彦根の人。繪をよくす。五老井、菊阿佛、無々居士等の別號あり。正徳五年八月二十六日癩を病んで歿。行年六十。著書には韵塞篇突、宇陀法師、俳諧問答、歴代滑稽傳、風俗文選、和訓三體詩、十三歌仙註、南部餅祭集等あり。

出代や給仕しまうて暇乞

許六は博學達識、蕉門中の一異才であつた。芭蕉と始めて遇ふて俳句の話をした時、芭蕉は「愚老が魂を集にてさぐり當る人は門弟子に許子一人なり、晝夜この魂を門弟子に説くと雖も通じ難し、愚老が本望今日達せり」といふて大に其才を稱した。其後許六の歸るのを送つて「其器繪を好み風雅を愛す予試に問ふ事あり、繪は何の爲め好むや風雅の爲好むといへり、風雅は何の爲め愛すや書の爲に愛すといへり、其學ぶこと二つにして用をなすこと一なり、まことや君子は多能を耻づといへれば品二にして用一なること感ずべきにや、書はとつて予が師とし、風雅は教へて予が弟子となすといふても居る。これらの爲めでもあるか、芭蕉歿後其剛放の氣天下を併呑して自讃論、自得發明辯、俳諧指南などいふ自負自

贊の文を書いて、正風血脉の門人芭蕉翁二代目といはむもにくからんかなどいへらがつて居た。

この句は出代をするもの、ある情態を叙したので、飯の給仕をしまふて後暇乞をしたといふのである。出代は雇人の年期が満ちて主家を出て代ること、主家を去る場合にも亦た新しい主家へ勤めた場合にも言ふ。昔は多く二月中にした。今迄給仕をして居つたものが、出代りて去るといふところは何となく名残を惜む心持もあり、又た出代をする奉公人にしても、もう歸るのだから後はどうでもよいといふやうな取亂したこともなく、ちやんとすることだけはして置くといふ行儀のよいところも、ほの見えてやさしい感じがある。又た一方からいふと雇人の事であるから、親や兄弟に分れるといふ程乙構でなく、稍や手輕に去つたり來たりする思ひもするが、給仕しまうて暇乞といふのが、其手輕な場合をも聯想せしめる。

清水の上から出たり春の月

清水は京都東山の清水寺で、其山の上から春の月が出たといふ叙景である。清

水寺といへば、寺ではあるけれども、其莊嚴華麗な建物を聯想する。又た春の月といへば「朧」と打霞んだ美しさを思ふ。其美しいものゝ配合で、春の夜のめでたさを現はして居る。美しいといふても錦のやうであるとか、又は花の盛りが月が出たといふのとは違ふて、何處かに寂びた處のあるうつくしさである。奥床しいといふ感じがよくこの句を説明するであらう。

産月の腹を抱へて田植かな

田を植ゑる早乙女の状態中滑稽なものを見つけたので、もう産をする前即ちうみ月の腹をしながら田を植ゑて居るといふのである。「かゝへて」は腹の大きなところから、それを仰山に形容して、四斗樽でもかゝへた體裁で居るといふ意である。田植女などは産をすることなどに頓着しないもので、よく産を焚きつけながら産をしたといふやうな話がある。だから妊娠であらうが、産月であらうが、それらの事には構ふて居らぬ。殊に忙がしい農事の際であるから、産婦だからとていたはつても居れぬであらう。多くの田植女のなかに腹の大きな女を見つけたのは、稍下車では居るが、許六一派のさほどい滑稽である。許六はかゝ

る滑稽を思ひきつてやつた。「出代や御亭のすきな黄粉飯」「しわんぼういよくしわし花盛」草餅に手足のうごく蛙かな「大根でせめるてむごし冬籠」など其一例であらう。

十團子も小粒になりぬ秋の風

この句は芭蕉に始めて句を見せた時芭蕉のほめた句である。十團子は判然しないけれども、其頃の何處かの名物か何かであつたのであらう。例之ば姥が餅、麻餅などいふ類で、東海道あたりの茶店にあつたものらしい。其十團子も以前はもう少し大きいやうであつたのに、秋風の吹く頃になつて、大分小粒になつたといふのである。秋になれば金風肅殺などいふて、萬物凋落し始め、見るもの聞くものはかない心持になる。其中にあつては十團子の小粒になつたのも亦た多少はかない感じを抱かせるものでなければならぬ。併し其はかないといふのも強くいふのでなくて、秋風は萬物を瘦せ枯らす、十團子も瘦せ細つたと團子を見た時の興に感ずるのである。草や木が色づくとか馬や牛が瘦せるなどといふのは秋風に對して普通な事であるが、十團子といふ思ひもつかぬものを

配合して、よく其趣味を失はなかつたのが此句の面白い處である。芭蕉がこれを賛稱したのも偶然ではない。實によく猿蓑集の所謂魂、即ち俳句の生命を會得した者でなければ、かゝる句は出來難い。

芋を煮る鍋の中まで月夜かな

芋名月を稱する百姓か、さらずば隱者などの状態を叙したので、月を賞する爲め鍋なども椽端近くか、又は庭の庭の上へ持出した場合である。大方壺所で煮たりするのにも其間月が見えぬから惜しいといふのであらう。ところが名月皎々と空にかゝつて、鍋の中の芋も見える位照した、實によい月夜であるといふ句意である。「鍋の中まで月夜かな」といふと月夜といふ字が適切でないやうに思はれるが、これは少し仰山にいふたので、鍋の中などへ月のさし込むといふやうな事は屢あるものでないけれども今夜は月光明かに浴びせかゝつて居る。それを人間又は山川の景色などが月光を浴びてよい月夜といふ風に、鍋の中も月夜ぢやといふのである。例の滑稽的趣味で、其鍋の側には百姓面が大口あけて芋を頬張つて居る様などが、明かに見える。

茶の花の香や冬枯の興聖寺

興聖寺は山城宇治の寺である。宇治は茶の名所であるから、其邊茶畑も多からうし、又た寺の中にも咲いて居たのであらう。冬枯の時分興聖寺へ来て見たところが、萬物蕭條として如何にも物寂びた感がする。其中にたゞ茶の木ばかりが淋しい花をつけて居つて、何となく其花の香ひがするといふのである。其角の三井の仁王の句は、冬木立の配合であつたが、この句は一點生氣のある茶の花を配合した、共に趣味津々たる好配合である。茶の花には元來句ひといふ程の香はしないけれども、冬枯時ではあり、境内が寺であり、他に物の句ひのするやうなものゝない處から、自然其かすかな香ひも感ぜられるのである。

木端なき朝の大工の寒さかな

木端は木片で、鉋や鉋で削つた屑である。大工が仕事場へ来て仕事をすする前焚火でもせうとするのに、折節木ッばがなかつた。その爲め焚火も出來ぬ寒さかなといふのである。「朝の大工」といふのが句法を曲折したので、普通ならば「大工の朝のとせなければならぬ。けれどもこゝは、大工の手持不沙汰に居る處を現

はすのが主眼であるから、それで轉倒して、朝の大工のとした。其顛倒の爲め句法が奇抜になつて、固と餘り高尚でない趣向も却て淡泊なものとなつて居る。其他許六の句を左に。

觀修寺は藁屋の宮や梅の花

鎗持は立つたばかりて花見かな

時鳥なくや田植の尻の上

下帯は美事なれども京角力

一番に案山子をこかす野分かな

尊とがる兩門跡の煤拂

餅つきや下戸三代のゆづり白

各務支考

始め僧なり、名を鎮藏主と云。後還俗す。美濃の人。別號を野盤子、東華坊、西華坊、見龍蓮二坊、白狂、黄山、梅花佛、十一庵、獅子庵といふ。享保十六年二月、又十

一月七日歿。行年六十七。著書には葛の松原、笈日記、續五論、東華集、西華集、白陀羅尼、三足猿、夏衣、阿難活、俳諧十論、十論爲辯抄、發願文、三千化、蓮の葉風、和漢文、漢、本朝文鑑、桃の首途、俳諧古今抄等あり。

片枝に脉や通ひて梅の花

支考は達筆達文の論客であつた。芭蕉は、靜閑なること支考に及ばずといふて居るけれども、それは芭蕉生前に彼の眞面目が發揮されなかつたので、彼の本領は芭蕉死後に現はれた。其多才の煥發すると同時に俳諧と言はず、俳文といはず、縦横無盡に働さまはりて、殆ど傍ら人なきが如き状態であつたが、惜しいことには、理窟に走りて趣味を忘れた。彼の晩年の句作は概ね俗臭を帯びて、人をして巻を蓋はしめる。俳諧十論に對する越人の不猫蛇を讀んだものは直に支考の俗物に陥つたことを知るであらう。許六は彼を評して、翁は彼が倭なる生得を見とゞけ給へども、かれはこの心をすゐする能はず前にも申すごとく行末いかゞ覺束なし、發句さして手柄ある句見え、俳諧はたしかに血脉を得たり、文章をかゝせても閒事なりしかれども、趣意が通らずかたはしいやみをかけり(中略)

随分利根なる故に人を迷はす所の罪はなほだしくもし乞食をする心なくば世路に墮落せん事あやうし云々支考の肺肝を刺すものがある。

扱て此句は枯くになつて僅に片方の枝に花をつけて居る梅を咏じたので、一方は枯れて一方にばかり花が咲いて居るのは其花の咲いて居る方に脈が通ふて居るのであらうといふのである。片方の生きて居るのを洒落て脈や通ひてといふたので、まだ望のあるといふやうな場合に脈があるといふのと同じ意味である。其洒落たところが支考の長所で、さうして後に俗臭を帯びた素地をなして居る。

馬の耳すぼめて寒し梨の花

梨の花の咲いて居る側を通る馬があつて、それが何かに驚いたかどうかして耳をすぼめた。それを見て居つた時が、春ながら寒い日であつたといふのである。尤もすぼめて寒しといへば、耳をすぼめた事が寒く感ぜられるといふ句法であるが、それも寒く思はれたし、又た其日も寒かつたのである。梨の花の白く咲いて居るのに春の寒さを感じずるやうなるは屢ある。又た馬が耳をすぼめて、さつ

と立てた形は、物に驚いたやうで何やら物寒さを感じしめるものである。すぼめるは末細い又はせばめる意義で、耳を立てた其末の窄くなつた事をいふのであらう。驛路春寒の光景である。

帷子の願ひはやすし錢五百

帷子のかたびらで、帷子を着る願ひならたやすいものぢや、たゞ五百匁の錢さへあればよい、といふのである。夏物をぬいで冬物を買ふとすると、其金高も大層な事で容易でないけれども、帷子一枚ならいかな貧乏人でもさう荷の重い話ではない。そこらの消息を傳へて、願ひはやすしと作つたのである。願ひは人から願はれる場合ばかりでない、自ら買ひたいと願ふ作者の上にいふてもよい。

百合の花たゞものあちら向きたがる

百合の花を花瓶などに挿した場合で、どう挿しても、向ふをむきたがつて、こちらを向かないといふのである。たゞものは、ひたすらといふのを俗に罵る様にいふたので、たゞにといふだけでよいのを、したゝかものなど、いふをかりて、ものと語勢を強めたのに過ぎぬ。枝振りの具合で、くると向きかはる様な事は、一

輪ざしの場合などによくある事である。調子の勝つた句であるけれども、「向きたがる」と言ひ放して、幾度か正面向かさうと勤めた心持をよく現はして居る。

狼の此頃はやる晩稻かな

早稻ももう刈つて仕舞ふてことしも夫ア無事な作であつたと喜びながら近々晩稻を刈らうとして居るうちに、狼が田を荒しに來たといふ山里の事實光景を叙して居る。「はやる」は流行する意で一度や二度出たのではない、度々出たといふ事と又た一村に限られたでなくて、數村の方々に出た事とを意味して居る。又た句は重に事柄を叙したのであるけれども、狼を田荒しに來る晩秋の荒涼たる様も眼前に書き出される。支考の句としては、これら最上に居るものであらう。

野は枯れてのばすものなし鶴の首

「野は枯れては」枯野といふのを引きのべたので、冬の草木も枯れ果てた野のことである。其枯野にあるものは萎むか枯れるかどちらにしても縮むものばかりで一つも上へ伸びやうとするものはないけれども、たゞ一つ鶴の首だけがのびく

と見えるといふので、つまり枯野の中に鶴の居る光景を詞を巧みに現はしたのである。普通ならば中七字をのびるものなしとせなければならぬのを、下が鶴といふ生きたものであるから、こゝにも「のばす」と自働的にいふたので、尙之を解剖していふと、野は枯れてのびるものなし併しのばすものあるは鶴の首とあるべきをのばすものなしの一語につゞめたやうな形である。

尙支考の句數句。

餅くはぬ旅人はなし梨の花

短夜の名残や軒すばかり(留別)

笠著せて見ばや月夜の鶏頭花

食堂に雀鳴くなり夕時雨

きよつとして霰にたつや鹿の角

此外芭蕉には尙多くの弟子があつた。以上は所謂蕉門十哲中の五人で、他の五哲には丈草、北枝、野坡、越人、曾良等があり。知名の士には杉風、之道、祇空、野明、智月、尼、乙州、千那、李由、惟然、荆口、土芳、桃隣、涼菟、園女、牧童、凡兆、句空、秋之坊、曲翠、正秀、嵐蘭

浪化、尙白、猿雖、酒堂、露沾、風國、知足、路通、琴風、百里、乙由、史邦、木節、萬子、荷兮、木因、木導、汝村、杜口、露川、野水、如川等其枚舉に遑ない程あつた。兎に角芭蕉が俳諧の大道を稱へてから天下靡然として其教へに聽いたので、斯道空前の盛をなしたのである。以上列舉の人々に就いても、詳しく研究すれば、其一人を捕へても十分研究の價值があるので、必ずしも斯道の兒童走卒として排斥することは出来ぬ。本書の限りある紙數を以て之を説き盡さんことと思ひもよらぬので、遺憾ながら所謂元祿時代の評釋はこゝに筆を擱く。以上を以て其一斑を知ることが出来れば幸である。

芭蕉の歿後は俳句の混亂時代で、其角の後を受けた江戸座、嵐雪の跡を繼いだ雪門、美濃派、支考門、伊勢派、涼菟門等派を立つるに汲々として眞面目に俳句を研究する人はなかつた。其爲め俳句を作る者の數は或は芭蕉の盛時に倍したかも知れぬが、眞に傳ふるに足るものは寥々曉天の星であつた。順序を追ふ點から言へば、享保の末年から元文、寛保、延享、寛延、寶曆、明和時代に出沒した俳人もここに擧ぐべきであるが、それは俳句研究の上には殆ど何等の價值をも存せぬ。直

ちに天明以後に移つて俳句中興の盛時を覗ふの勝れるに如かぬ。

谷口蕪村

本名は寅、字は春星、後姓を與謝と改む。享保元年攝津東成郡毛馬村に生る。晩年京都に住す。蕪菁、馬東、東成、老々庵、浮風庵、臥庵、紫狐庵、落日庵、碧雲洞、白雪堂、河南道居、草々樹、四明三葉散人、三葉居士、老雲等皆其別號なり。夜半亭の庵號を繼いで二世夜半亭と稱す。天明三年十二月二十四日歿。行年六十八。著書には新花摘、俳諧玉藻集、温故集、十番左右句合、其雪影等あり。

春の海ひねもすのたり／＼かな

蕪村は俳諧の中興として其名を知らぬものもない。早野巴人の門に出たのであるが、其不世出の雄才は、其同人を驅つて俳諧混亂の長夜の夢を覺破した。元祿の幽玄閑寂を主としたのに反して、華麗豪宕の新天地を開拓した。彼は消極趣味に傾いたのを、是は積極趣味を發揮したのである。芭蕉が俳諧の天地を見つけたのも大なる業であるが、蕪村の其天地を尙廣く墾いたのも著しき功績で

ある。つまり俳諧過去の歴史は芭蕉と蕪村の独占であるといふても過言ではなす。

この句は春の海の廣々と浪うつて居るさまを其儘に詠じたので、春の海のことであるから、日も永く長閑なのにつれて浪の打ち方も何處かゆるやかな威がある。それを「のたりく」といふので、浪のうねくして居るのを形容したのである。「のたりく」は俗に怠けたあるき方を形容していふ詞であるが、浪の動きかたの長閑な様が悪くいふと怠けて居るやうにも見える處から、かゝる形容も出たのであらう。沖の方はボンヤリと霞んで居る。暖い風が塵も立たぬ程に吹いて居る。さうして汀近くのたりくと波を打寄せせる。春風駉蕩といふ感じが一旬に溢れて見えるかと思ふ。

春水や四條五條の橋の下

この句は言ふまでもなく京都の句で、加茂川の景色である。春の水が四條の橋と五條の橋の下を流れるといふ句の意味はそれに過ぎぬのである。又たかゝる趣向の生れたのは唐詩選の天津橋下陽春水天津橋上繁華人といふ句に基い

たのも亦たいふまでもないことであるが、この句にはそれらの意味以外記臆すべき一の肝要なる事がある。

凡そ事物を風詠する場合には、先づ其事物の趣味を覺らねばならぬ。趣味を感ずる事の出来ぬものを風詠するといふことは出来ぬ業である。風詠するといふことは畫師が畫を書くのと同じである。畫師が其物の趣味を感じないで畫は出来るものでない。趣味を感じることの出来ぬ極端の場合には其事物を見も聞きもした事のない場合で、知らぬ物の書けやう道理がない。又た其形狀位は略知つて居ても、形ばかり知つて居つたので畫にはならぬ。必ず形以上の趣味を印せねばならぬことは最も見易い道理である。さうして其趣味を感ずる第一の方便は、其事物に對する古人の製作を見ることである。即ち自分に趣味を感ずることの出来ぬ場合は、古人の趣味を教へられて始めて啓發するのである。そは尙園蓑を習ひ、字を習ふと同じであつて、ある趣味のわかるまでは、其師匠其手本に盲從せねばならぬ。其場合教へられた趣味が高いか卑しいか、雅か俗かといふやうな事を論じて居る邊はない。兎に角先づ其指示に左右せられて、今

迄自分にながった趣味を感じねばならぬ。が、多年研究の結果は、單り古人に教へられた趣味に満足されないで、時には己れ始めて他の趣味を発見する場合がある。文學も其境界に達しなければ、到底大成したとは言へぬ。芭蕉の尊ばるる所以はつゞまる處、眞に文學上尊むべき趣味を発見した點にあるので、芭蕉趣味を俳句で風詠したのである。芭蕉以後天明の盛時に到るまでは、たゞ其趣味を規矩準繩として奉じて居た。たゞ奉じたのみでなく、其糟粕をのみ嘗めて安心して居つた。俳句の振興しないのも自然の結果で、芭蕉以上又は以外の趣味を発見するのではなくては、たゞ墮落に終るに過ぎぬであらう。この句などは其別趣味の好適例で、春水と感じに一期限を作つたといふてもよいのである。固より古人にも春水の句は澤山ある。が、其趣味は全く違ふて居つた。例へば

うすきこき霞の下や春の水

紹 巴

雪がすむ峰や川上春の水

宗 祇

道さく野は幾筋の春の水

宗 長

難波江はけふる春風春の水

宗 因

といふやうなので、尙又た蕪村當時の句にも

流れ来る清水も春の水に

蕪 村

日は落て増かどそ見ゆる春の水

几 菫

行舟に岸根をうつや春の水

太 祇

名つかさや雨の後なる春の水

召 波

といふのがある。これらは悉く「春水滿四澤」「春風春水一時來」といふやうな詩の句に教へられた趣味であつて、冬季中涸れて居た川池などが春になつて水が増したといふ水の多いといふ感じか土臺になつて居るが、四條五條の句はその感じではない。即ち春の水の清水とも違ふて、何處かゆるやかに美しいといふ趣味を發揮して居るのである。今日の俳人が、春水といへば美しいといふ聯想を直に惹き起すのは、つまり蕪村のこの句などが其原因をなして居るので、言はゞ蕪村先輩に教へられた結果である。春水に對して「滿四澤」といふ感じが決して不自然ではない。そも亦た一趣味には相違ないが、他に「春の川」といふ題の出來た今日では、四條五條の橋の下といふやうなめでたい美しい感じの方が適切に

思はれる。故子規子は常にこの事を研究して、春の水の趣味と春の川の趣味とを區別して居つた。

廣庭の牡丹や天の一方に

廣い庭があつて其片隅に牡丹が大きく咲いて居る。そを天の一方にと形容したのである。天の一方には望美人于天一方といふ語から借りたのである。牡丹の花の赫奕と咲き満ちて居る様が眼前眩しいやうにも見えて、廣庭の堂々とした様も聯想される。

牡丹の花の眞の趣味の發揮されたのも、全く蕪村の達腕の致す處であつて、其以前には其趣味を風詠したものがなかつた。芭蕉の幽玄主義から言へば、牡丹などは餘りに花やかに過ぎた。淡墨主義の書を受する人には、牡丹の極彩色は稍俗に感ぜられたかも知れぬ。芭蕉全集を繙いても、牡丹の句といふのは有るか無いかわからぬ程である。よし強て之を風詠した者でも、富貴草とか深見草とかいふ多少理窟臭い趣味の外、何等變つた處を發見して居らぬ。其角の焦尾琴といふ書に、牡丹の句を擧げて居るが、其句を見ると

唐物屋あとに暮めたかふかみ草

鬼谷

さりなから雪をよきつゝ白牡丹

重巽

うち見から小聲になつてぼたん哉

幽竹

子の代になつて榮えしぼたんかな

合志

といふやうな句が十中八九を占めて居る。中には

灌佛の香楠にふすほる牡丹かな

魚千

といふやうな趣味的句の交つて居らぬにも限らぬが、それらは百句中僅に一句を見るに過ぎぬ。つまり牡丹の趣味は元祿當時迄は發揮されなかつたので、一方から言へば牡丹あつて蕪村の趣味を托するに足りたのかも知れぬ。其外蕪村には牡丹の名句澤山ある。

閻王の口や牡丹を吐かんとす

寂として客の絶間のぼたんかな

ちりて後ちもかけに立つぼたんかな

地車のとゝろと響く牡丹かな

牡丹切て氣のちとろひし夕かな

山蟻のあからさまなる牡丹かな

蟻王宮朱門をひらく牡丹かな

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

山蟻の覆道作る牡丹かな

ほうたんやまろかねの猫黄金の蝶

など悉く金玉の音を發して、古今の俳句中に卓然として雄を示して居る。これらは到底古今無人境に遊んで居るのである。

鮓桶を洗へば淺き游魚かな

今日では鮓は四季を通じてつける様であるが、昔の習慣では夏季になつて居る。其鮓をつける櫃を鮓桶といふのである。これは鮓をつけたあとの場合で、門川か何かで其桶を洗ふと、小魚が飯粒などを食ひに寄つて来るやうな有様である。「淺き」といふのは、矢張蕪村の句の「東雲や鶴をのがれたる魚淺し」といふやうな鹽梅の使ひかたで、魚が淺い處に遊ぶといふやうな判然とした意味ではなく、水の

淺いことや魚のよく見えることなどを漢詩的に美化していふたのである。つまり詞の曲である。鮓桶を洗ふといふ事が鮓を洗ふとか米上箆を洗ふとかいふのと違つて雅な愉快な感がある。そこに遊魚の離々として集散する様を現出したので、更に清涼な感を與へる。到底市塵屋を覆ふ窮巷の景色ではない。後ろに山を負ひ前に清泉落つるといふやうな山里か、兎に角仙境に近い感じのする場所といふ聯想が起る。鮓桶を洗ふ人も田園の爺嬢でなくて、佗び住む隠者のやうにも思はれる。

元來夏季は萬物の勢力尤も充實した時であつて、草木、虫魚、人事の區別なく、いづれも力が充ちて居る。故に壯大とか、華麗とか、雄渾とか、擴實とか、娛樂とかいふ趣味に富んで居つて、閑寂、素朴、靜謐、悽愴、悲哀などいふ趣味に遠ざかつて居る。古人の句を統計的に計算しても明かであるが、春秋二季の句に比して、夏季の二季は句が少ない。其中にも夏季が尤も少ない。天明以前の如きは尙更さうであつて、これは屢々記した通り芭蕉趣味と一致しなかつた爲めであらうが、蕪村に到つては却つて夏季に入つて多くの句を吐いて居る。これ蕪村の趣

味と一致した爲めでもあらうが、前人の糟粕を嘗めなかつた一適例とも見るべきものである。其中でも、牡丹、鮎の如き前人の多く題目として顧みなかつたものを捕へて、之を縦横に風詠して居る技倆に至つては驚嘆の外ない。其著新花摘が斯道の珍寶とせらるゝのも全くこれが爲めである。

釣上し鱸の巨口玉や吐く

鱸は秋季に漁する魚で、河海の間産し、春の末川に溯り、秋海に入るのである。口大く鱗細かく、大きさ二尺にも餘るものは外形甚だ愉快に美しい。それを釣上げた時の様を句にしたので、その大きな口から玉でも吐きさうに思はれるといふのである。「巨口」と言ひ「玉や吐く」といふ調子の張つて居る點は、蕪村獨得の處で、爲に鱸の状態がいかにも勇壯に畫かれて、さうして秋涼の氣肌を襲ふ感がある。古今鱸の句の絶誦であつて、此一句に鱸の趣味が言盡されて居るかとも思はれる。

なつかしき紫菀かもとの野菊かな

紫菀の高々とある下に野菊の咲いて居る、眼前の一小景を詠じて居る。紫菀も

紫色、野菊も紫色で、何處か花の似た處がある。又たしをに、のぎく共に雅な名であつて、其花の形もめてたい。といふやうな邊から、なつかしきといふ意味が生れるので、それも久しく逢はなかつた人に對してなつかしさに堪へなかつたといふやうな深い強い意味ではない。淡泊に一寸なつかしう思ふたのである。蕪村の句といふとも必ずしも壯大雄渾なものばかりではない。かゝる優美なやさしい句もあるといふことを一例に示すのである。

木のはしの坊主のはしや鉢叩

卑しい坊主を蔑視していふ時に木のはしの坊主といふ、其俗語をこゝにかりて來たので、鉢叩を極めてさげすんだ意味である。「はし」といふ音を重ねたのは、一種の句法で、木のはしの坊主のそのままだはしといふ意味もないではないが、上に木のはしといふから其音を受けて調子をなだかにする手段が重きをなして居る。元來の意味は、木のはしの坊主やといふので盡きて居るのであるが、それは調子をなさぬので再び「はし」と附加へたのである。鉢叩は歳時記にもある通り、空也宗の坊主で、瓢箪をたゝいて歌を唄ひ米錢を貰ふのである。重に京都に

出たやうであるが、今日は全く其跡を絶つてしまつた。尙此句は極めてさげすんだのであるけれども、それは多少滑稽的意味を含んで居つて、内實は其木端坊主をなつかしう思ふて居るのである。木のはしの坊主のはしのつまらんものだが、そのつまらん處が面白い、といふやうな底意のある事に注意せねばならぬ。
いばりせし蒲團干したり須磨の里

須磨の浦へ来て見た處が、寐小便をした蒲團を干して居る家があつたといふので、須磨の冬のある景色を叙したのである。須磨といへば、歴史的の感じが先きになつて、殊に光源氏や行平の故事などを思ひよせる處から、源平の戦ひもあれど、重に敦盛といふ貴公子の聯想がある、何となく美しい感がある。又た實際白砂青松相映じて美しい。其中に寐小便の蒲團といへば、いづれむさくろしいものであるが、それを干して居るなどは餘りに殺風景といふ感がある。が、それが決してさうでない。其美しい中へ稍むさくろしいものを拈出した其配合の不自然でない處が此句の眼目であつて、其爲め美しさも亦た一層増す感がある。のみならず、後世の須磨は天然の景色は美しいにしても、村のさまなどは大きに

さびれて居る。其さびれた様に對象して、いばりせし蒲團が尤もよく調和して見えるのである。殊にそれが冬枯時で蒲目蒲條として居るから、春夏の陽氣な氣節と違ふて、いばりせし蒲團が、それ程汚穢に感ぜられぬのである。これを今一步詳しく説明すると、春や夏では、魚の生臭い匂ひも強く汚なく思はれるが、冬の寒い萬物枯死の中にあつては、大便さへ矢張枯れて臭氣のないものに見えるかとも思はれる。つまり肅殺の氣が、何物をも同化するやうに思はれるので、自然平生汚穢なものも餘りむさくろしく感ぜぬのである。だからいばりせし蒲團は見た目には美しくはないが、其爲め胸を悪うするやうな事はない。荒れ果てた須磨の里にあつてそれを日に干して居るさまなど寧ろ愉快な景色である。けれども句の元來の趣意は矢張美しい中に、汚ない物を配合した點にあるので、其反對の配合がこの場合に適切して居るといふ事を忘れてはならぬ。燕村の句を集めたものは、几童編の燕村句集、新花摘及び燕村遺稿等の數冊子ある。之を繕くに悪句と見るべきは殆ど數ふるに足る程で、句々悉く其面目を發揮して居る。必ずしもこゝに擧げたのが好句ばかりといふのではない。尙左

に數句を摘出する。

白梅や墨芳しき鴻鶴館

春の夜に尊き御所を守身かな

御手討の夫婦なりしを更衣

鮎くれてよらて過行夜半の門

籠なる我蔭麥存す野分かな

名月やうささのわたる諏訪の海

古傘の婆娑と月夜の時雨かな

木からしや何に世渡る家五軒

炭太祇

江戸に生れ、京師島原に住す。別號を不夜庵といふ。水語、徳語亦た其別號なり。明和八年八月九日歿す。享年六十三。下寺町光林院に葬る。著書、鬼貫句選、俳諧新選等。

山路來て向ふ城下や風の數

太祇は始め雲津水國に學び、後慶紀逸を師としたが、京都では重に蕪村一派と交際して句を戦はして居つた。俳諧三昧といふことは、太祇の逸事として名高い。が、太祇は俳人中の不幸なる一人であつて、其名は久しく江湖に埋没されて居つた。尤も蕪村几童召波でさへ、其後輩の蓼太や曉臺に江湖の聲譽は及ばなかつたのであるから、太祇の名の埋没されて居つたのも敢て怪むには足らぬ。太祇句選といふ書は其門人によつて輯められたのであつたが、この書も殆ど世間に跡を絶つ程で、久しく知る人も讀んだ人もない位であつた。それを二度地下に呼起して、世上に紹介したのは子親子であつた。古今の俳人中太祇の如き達作者が凡そ幾人あつたであらうか、天明の盛時を飾るには、是非とも傳へねばならぬ英雄である。

この句は場處の複雑な句で一寸説明し難いが、例之ばこゝに旅をして居る人がある。木曾か丹波路邊の山路をあるいて居るとして、けふは何處其處の城下へ

着くといふ豫定で巖を越へて来る。城下といふのは城のある町のこととて、大名の住居の所在地をいふ。城下へ著くのであるから、いくらが嬉しい心持がある。もうどの位あるけば城下へ入るだらうと向ふを見ると、町は見えないけれども、山か森かの上に風が澤山上つて居るのが見える。一つや二つでは村やら城下やらが判然せぬが、澤山上つて居るので、それが城下であるといふことがわかる。自然其風を愉快に見て行く心持もする。といふやうな場合で、正月の長閑な空に繪風地風が打交り上つて居るのを見るのは旅情を慰めるばかりか、城下が見えないで、風ばかり見える處がこの句の生命である。「向ふ城下やは山路来てから受けて言へば山の向ふの城下といふこととて、城下は其山路を下りた向ふの平原にある場合であらう。さういふ實景は何處といふ迄もなく、處々方々にあることは贅する迄もない。

春の夜や女を怖す作り事

何かこしらへ事をして、女をちどすといふ春の夜のある出来事を叙したのである。作り事といふのであるから、鬼面を被るとか、怖しい形のものを行燈のかけ

に作るとかいふので、女をこはがらせる罪もない仕掛けである。これが秋の夜に男を怖すといふことになる。作り事にも罪があつて、愉快な趣味を抹殺して仕舞ふが、長閑な春の夜の座興に、物に驚き易い女を怖すといふので、怖ろしさよりも面白さの方が勝つて居る。いづれ何處かの御殿とか若くは妓樓邊の光景で、この句の半面には多少戀味を含んで居る。

短夜やけさ關守のふくれ面

夜の短い頃の明方關所へ通りかゝる。別に叩いて起したといふのでないけれども、何處やら寐足らぬ顔つきで、關守がふくれづらをして居るといふのである。關守といふ者の横柄であつた事、町人などは人間としてあつかはなかつたといふやうな事から、朝の早いのを、何か通行人のせいのやうに面を膨らすなどいふことが、實に適切に關守を現はして居る。さうして關處の明易い頃のさまも自然躍然として居る。關守といふと、和歌などに讀込まれて優にやさしいもののやうに感ぜられるけれども、其實は無風流極つたものであつた。太祇は其和歌に教へられた陳腐な趣向を脱して、他に寫生的新趣向を求めたのである。か

かることは、當時關處を通行した人の何人も感じたことであらうけれども、それらは句の材料にならぬとして捨てたのであらう。太祇はそれを拾ひ上げてよく美化し得たのである。つまり人間目前の出来事で、何人も不用意に見過す事を捕へるのは太祇の特技で、是亦た文祿には餘り類を見ない新発見であつた。

物がたき老の化粧や更衣

昔は四月朔日に更衣といふて、必ず袷を着ることにして居つた。殆ど一の儀式のやうになつて、武家などでは殊に家中揃ふて衣を更へたものである。年によつては未だ寒いやうな事もあつたが、それらには頓着しなかつたので、太祇にも「かしこげに著て出て寒き袷かな」といふやうな句もある。其更衣の當日は、如何なる年寄でも女は必ず白粉をつけるものぢやといふやうな習慣も處々にあつたが、この句はその場合を現はしたので、年寄の物堅さは從來のしきたりを改めないで、皴の深い顔にちやあんと白い物を塗つて居つたのを見つけたのである。物堅い年寄といふのが、已に更衣のゆかしさを忍ばせるものであるが、それが化粧をして居るといふので、更に奥床しい。古風な襟が目に見えるやうて人をして襟を正さしめる心持もする。衣更への句としては第一位に置くべきものであらう。

稻妻や舟幽霊の呼ぶ聲

船が難船其他で沈んだ時、助からずに死んだ人が、其恨みて幽霊に出るといふ傳説がある。それを舟幽霊といふのである。「呼ぶ聲はよばふこゑ」と讀む。稻妻のする夜、舟幽霊の呼ぶこゑが、何處ともなく聞えるといふ、物凄く光景を叙したのである。作者が船に乗つて夜の航海をして居る時と見ると尙更物凄くなる。遠方で稻妻が光る。さうして其光らぬ間は眞の闇である。丁度檀の浦といふやうな處へさしかゝつて、昔誰といふ者がこゝで死んだなど、話をして居ると、浪の音ともつかず、風の音ともなく、物凄く浪の上に人を呼ぶやうな、助を求め、やうな聲がする。航海になれたものは、舟幽霊など、すまして居るけれども、乗合の者などは怖しさに堪へられない、といふやうな聯想も浮ぶ。稻妻といふは直ちに物凄くといふ聯想は浮ぶが、かゝる珍らしい場合を句にしたのは殆ど其比を見なす。

鶏頭やはかなき秋を天窓勝

「天窓勝はあたまがちと讀む。鶏頭は秋さく花であるけれども、秋も末になると、大抵葉が落ちて仕舞ふて、頭の花ばかり残るやうになる。この句はたゞそれだけの事を詠じたので、はかなき秋を」といふ主観で其感じを補綴して居る。固と秋の感じははかない哀れなものであるが、鶏頭の葉の茂つて居る間は、それ程哀れにも思はなかつた。けれども下葉が段々落ちて来て頭ばかり残るやうになると、あの鶏頭もこんなになつたかと、自然秋のはかなさを感ずるやうになる。そこで特に「はかなき秋を」といふ必要があるのである。「秋を」は詞を略した使ひかたで、「秋を」の下に「かこつ」とか「悲しむ」とかいふやうな働きがあるものと見るのである。

火を運ぶ旅の火燧や夕嵐

旅人宿へとまつた冬の夕暮の有様で、客間の火燧へ火を持って行く。大方十能か何かへ澤山盛つて行くのであらう。それがさつと吹く嵐にパチ／＼と音をたてて火花を散らすやうな場合である。火を運ぶ時分に火花を散らすといふこ

とはよくある事實であるが、それを旅中の光景とし、其火を火燧へ運ぶものとし、其複雑さは、何人も言ひ了せぬ事として捨て、仕舞ふ事實であるのを、かく手輕に言ひのけたのが、矢張太祇の手腕である。殊に下五の「夕嵐」が、置き得て千金の價值がある。第一にはこの景色が夕暮であるといふ時間を制限して、印象を明瞭にして居る。第二に火を運ぶ旅の火燧といふだけでは、如何なる處を運んで居るか、わからぬが、この下五のある爲め、嵐の吹くのに觸るやうな處を運んで居ることを説明する。自然廊下であるとか、部屋の障子を明けた場合といふやうな聯想が浮ぶ。第三に火を運ぶ云々といふだけでは、景色が何となく狭く又たむさくろしい一方にのみ傾いて、目前餘り心持のよい宿屋は想像されぬが、夕嵐といふ大きなものを持つて来た爲め、其狭さもむさくろしさも、幾分か減ずる傾きがある。つまり人事に配するに、天文を以てして、人事の醜汚な部分を打消す手段である。以上の三つはこの句を見る上に於て作者の苦心を知る必要條件である。これらも固と普通作者の不用意に見過す出来事であらう。

そりこかす若衆のもめや年の暮

俳句評釋 炭大祇

この句も純然たる太祇調の句であつて、趣向亦た複雑である。「そりこかすは頭の髪をそり落すこととて、今迄長くのびて居たのを剃つて仕舞ふから仰山に剃りこかすといふのである。」「若衆のもめは若衆の騒ぎで、若衆は年の若い男でいくらか美男子であるやうな想像も浮ぶ。大方若衆を僧にでもせうといふ場合で、剃るとか剃らぬとかいふて若衆が泣いたりわめいたり、或は親類の人が来て仲裁するとか、父親は頑として聞かぬけれど、母親が共泣きに泣くといふやうな騒きがあるらしく見える。「もめ」といふ簡単な詞であるけれども、其聯想は殆ど書き盡せぬ程である。又た「もめ」といふのは現在騒ぎ立つて居る光景ばかりでなく其頭を剃る原因までを聯想せしめる、即ちこの若衆を剃るのは、たゞ何でもなく僧にするのではなくて、何か寺の住持に生れぬ先から約束があつて僧にせねばならぬとか、又は若衆が放埒で詮方ないから誠めの爲め僧にするとか、いふやうな小説的事實がそこにあるらしく思はれるのである。「剃りこかす若衆のもめや」といふ十二字が已に平凡でないが、之れを「年の暮にしたのが更にうまい點である。之を春の句にして下五に「春の宵」とか「春の風」とか置いては一通りの句にならぬ

事はないが、年の暮の忙がしい中にこの事のあるに比しては數十歩を譲らねばならぬ。何故といふに第一年の暮といふので「もめ」といふことが適切に感ぜられる。第二に剃りこかす事が段々伸びくになつて、暮まで押詰つたやうな聯想がこの句に新たなる生命を興へる。第三には矢張時候の關係で、若衆のもめや」といふ花やかな事、僧にするのは花やかでないけれども、其騒ぐ場合は若衆といふ詞から自然花やかになるに對して、年の暮のさびれた時が調和する。熊村にも「追劔を弟子にそりけり秋の旅」といふ句があるが、それは何處までも熊村調で何となく氣高い處がある。太祇のは其氣高さはないけれども、却て小説を讀むやうな他の面白味がある。蓋しこれらは兩人の趣味を説明する好適例であらう。

大祇亦た好句山の如してある。其中二三。

山吹や葉に花に葉に花に葉に

女見る春も名残や渡し守

めてたきも女は髪は暑さかな

側に置て著ぬ断りや夏羽織

揉みに揉んで夜嵐渡る鳴子かな

渡し守舟流したる野分かな

京の水つかふて嬉し冬籠

掃さけるか途には掃かす落葉かな

蕪村一派には尙三世夜半亭を續いた几童を始め召波、柳良、移竹、大魯、保吉、月居、百池、春坡、雁宕、東阜等各一方に雄視するに足る豪傑枚擧に違ない程であるが、紙數の制限の爲め惜むらくは今詳説する餘裕を存せぬ。天明の盛時を叙するに僅に蕪村太祇の二人のみでは甚だ飽足らぬ事言ふ迄もないが、句の選擇については稍其特色を指示し得たと信じて居る。尙天明の別働隊とも見るべき蓼太以下に就いて詳説する。

大島蓼太

名は陽喬、空庵居士と稱す。三世雪中庵を繼ぐ。江戸に住す。天明七年九月

七日歿。行年七十。深川六軒堀要津寺に葬る。著書には附合小鑑、發句小鑑、芭蕉庵再興集、住吉千句、曳登翁遺稿、俳諧棚さかし三春日記、二夏百句、筑波記行、百羽かき等あり。

夜櫻や三味線弾て人通り

蓼太は嵐雪の後を繼いだ三世雪中庵で、二世雪中庵吏登の後を承けたのであつた。京都の蕪村、名古屋の曉臺等と名を等うして江戸に雪門の一派を唱導して居つたが當時名の賣れて居つた事は蓼太の右に出るものが無つたらしい。其門葉も天下に廣まつたので、雪門中興の祖と仰がれて居る。其句豪宕艶麗時に蕪村一派の墨を磨するもの無きにも限らぬが、惜むらくは趣味稍卑賤で、十中の八九は俗臭覆ふべからざるものがある。是れ或は俗耳に入り易かつた爲め、其名を恣にし得た原因ではなかつたであらうか。尙蓼太には四世雪中庵を次いだ完來を始め大江丸、吐月、宜麥、寒松、沙羅、雷堂、文足、青牛等當時に名高い門弟があつた。

此句は其長所を見又た短所を知ることの出来る蓼太調ともいふべきものであ

らう。「夜櫻」は江戸の所謂夜櫻で、吉原の廓中の櫻をいふたのであらう。仲の町の光景なるもので、既に尋常一様の艶麗さではない。そこを三味線を弾きつゝ通る者があるといふので、其賑かさも察せられる。其三味線も恐らく粹なといはるゝ新内の流しか何かであらう。さうしてそれもたゞ一二人に止まらず、ぞろ／＼打連れて居る様があつて、其前後は種々雑多の嫖客がうめきつゝ右往左往して居るといふ夜の賑ひの光景である。「三味線弾て人通り」といふ詞は多少曖昧で、人通りといへば多数の人を連想する場合「弾て」と原因を示した爲め、其多数の人皆三味線を弾いて居るものゝ如く連想されるけれども、こゝでは其多数の人が皆三味線を手にして居るといふのではない。つまり三味線を弾くものは一人二人位であるとしても、それを中心にした一團の人があるいて居る様を叙したのである。或は上野鳥飛山邊の花見戻りの一坐が、頭に揃ひの置手拭か何かを被つて賑やかに囃して通るやうな場合であるかも知れぬ。さういふ場合、三味線弾て人通り」といふ言ひかたは簡潔で氣がきいて居る。これらは天明の特徴で、元禄には餘り類を見ない。元來かゝる花やかな光景を捕へるとい

ふことが、他の作者には珍らしい。尤も廓とか娼家とか妓とかは古今俳句の好題目にはなつて居るけれども、ぶつつけに仲の町の夜櫻を捕へたやうな例は少ないので、蓼太の艶麗主義で始めて之を材料となし得たのである。が、假令この句は稍成功して居るとしても、かゝる取材は一步を誤れば俗臭紛々たるものに落つるのが普通の場合である。

さのふ見しあれが禿か初櫻

蓼太

唇は笛も吹へし貴妃さくら

同

の如きに到つては明かに失敗して居る。予が蓼太調の長短所を知るといふたのも其爲めである。

夕霞たきゝの鼓しらべけり

この句には、奈良といふ前置がある。前置は無くとも奈良の光景を叙したことは明かである。たきゝの鼓は、新能の鼓のこと、新能は興福寺の門前の芝生で七日間二月中行ふた能である。一に芝能ともいふ。薪を焚いて行ふのであるから、夜能であることはいふまでもない。其能の鼓をしらべる音が、夕霞の籠つ

て居る中にきこゆるのである。音曲ものは何に限らず其調子に合ふて居るか否かを試しに鳴らすことをしらべるといふ。鼓のしらべは他のものよりいくらかよく響きよく聞ゆる心持もする。丁度蓼太が奈良でも来た時と假定すると其處らあたり臚に夕霞が罩めて、そいろに寧樂の昔を忍ぶ時遠くに鼓の音が物なつかしげに響く。何ぞと聞くと、けふは薪能の當日で、其鼓のしらべが聞えるのであらうと、わかつたといふやうな場合である。或は作者が奈良人の心持になつて、始めから薪能のあるといふことを知つて居つて、其鼓のしらべを聞くとしても差支はない。これらは蓼太集中温健にして俗臭を脱した好適例であらう。

里の灯を含みて雨の若葉かな

「里は田舎の村のこととて、そこに一つか二つ位の灯の明りが見えて居る。それが「里の灯である。夏の始めの樹々若葉をする頃しとく雨が降つて居る。それが「雨の若葉かなで、其里の周圍又は家の間などにも茂つた樹がある場合、其灯が何となく若葉に映じて、灯と同じく雨に濡れて居るかとも思はれる。その邊か

ら「含みて」といふ詞が出るので、丁度人が口に物を含んだやうに、若葉が灯を含んで居るといふのである。若葉頃のみづくした様が、雨と灯の配合でよく現はされて居ると思ふ。又此句は、里を除き離れて見た場合でもなく、又里に接近した時でもない。其距離は灯が雨に映るのが見える位の場處でありたく思ふ。

家二つ中に流るゝ清水かな

家が二軒立つて居る間を清水が流れて居るといふ單純な光景であるが、家二つといふのが、清水の淡泊な趣味とよく調和して居る。田舎の光景で、固より市中の有様ではない。「中に流るゝ」といふ「中」の字に注意して見ると、この二軒の家の關係が稍推測される。試みにこの二軒の家は、どういふ風に建つて居るかを考へて見ると、二軒同じ方向に並んで居るであらうか、又は向ひ合せになつて居るであらうか、判然しない。が「中」とあるので、この家は向ひ合せにあるといふことがわかる。中といふのは、いくらか清水を包んだやうな感じにならねばならぬ處から、自然入口の向き合つた家でなければ、さう言ひ難い爲めである。若し同じ方向に二軒並んで居る場合として、其家と家との境を流れるものとすれ

ば「中」ではない「間」である。故にその場合は「家二つ間に流る」とせねばならぬ。若し又二軒並んだ前を流れるものとすれば「前を流る」とせねばならぬ。「中」にはそれらと違はねばならぬといふことは贅する迄もない。

白萩や露一升到花一升

白萩に露の降りかゝつて居るさまを所謂俳諧手段で奇な言ひかたをしたのである。意味は露も多い花も多いといふのに過ぎぬのを一拍子ひねつて「露一升到花一升」と洒落れたのである。これらは單に其詞の奇を味ふべきで、露も一升あれば花も一升位あるといふやうに正面に詞を解しては、句の妙を殺ぐ感がある。が、單に露と花の多いといふことの外、かく量目をいふ裏面には、白萩の花も散りつゝ露もこぼれつゝあるやうな景色が目に見えて来る。つまり萩の眞盛り露の置盛りで、風が吹くでもないに、自然と咲きこぼるゝ感がある。又た何故「白萩」としたかといふことを探ぐると、花と露との區別のつかぬやうな場合を現はさうとした形迹もある。白萩の露の中にうねつて眞盛りであるのを見て

露やら花やらわからぬと、一見驚嘆した心持もほの見える。かゝる詞づかひは、多くの俳人が奇を衒ふて往々摸倣するけれども、この句の如く成功したのは稀であらう。

黄菊白菊銚紅の節句かな

重陽の句で節句は九月九日の菊の節句のことである。黄菊白菊に銚の切身の赤いのを配合した色の取合をした句である。銚の切身といへば餘り感じのよいものでないけれども、銚紅と詞を雅にした爲め、其俗臭が除かれた。さうして「黄菊白菊」に配合されたので益其俗氣を去ることが出来た。これらは到底凡手の及ぶ手段ではない。單に色の配合といふので「黄菊白菊衣紅」としてもよいかといふに、銚くれなるの奇抜なるには遙に及ばぬ。この句は「銚くれなるのが魂である。「黄菊白菊」といふ上七字も雪門の開祖嵐雪に「黄菊白菊其外の名はなくもかな」といふ有名な句がある爲め、始めて「黄菊白菊」といふたよりも歴史的感じて、一層感深くする。そこへ「銚紅」と思ひもつかぬものを持つて来たので、自然この句が活動するので、これが「衣紅」といふやうな尋常のことをいふたのであ

るとすると、黄菊白菊と詞をかりて来た働きがなくなつて、單に先人の模倣をしたのに止まるのである。

重陽を現はすが爲めに態と昔めかして優にやさしいことを言はうとせず、銚といふやうな何人も氣のつかぬやうなものを材料にして、よく成功して居る點がこの句の面白い處であるけれども、これは江戸又は東京に住んで始めて感ずる句であつて、銚を常食とせぬ地方の人には或は銚くれなるの味が咀嚼され難いかとも思はれる。

燈火を見れば風あり夜の雪

靜に夜の雪が降り積つて居る。萬籟閑として更に聞ゆることがない。其時不圖座中にもつて居る燈火を見ると、何處から吹くともなき風に動いて居つたといふのである。靜中の動ともいふ場合、雪の光景に對して、其灯も銀色煌々たる感がある。かゝる場合之を讀む人によつて、或は殿中高貴の場處を連想し又た茅屋佗住居の様を想起するであらうけれども、この句の面に其様が現はれて居ない限りは、其場處の連想などは如何やうであるとも差支ない。要するに

靜かなる雪に對して、燈火の動く狀況を見れば足るのである。

羽二重の京に嵯峨ある紙子かな

羽二重は絹で織つた美しきもの、紙子は紙で作つた佗びたもの、其美しきものに對する佗びたものは、丁度西京の美しさに對して嵯峨の淋しき様のあるやうなものである。といふのが句の趣意である。羽二重の京と紙子の嵯峨を對照したので、京で羽二重を着た美しい人を見嵯峨で紙子を着た佗びた人に接したといふのではない。京の美しいのと嵯峨の佗びたのを、羽二重と紙子に譬へたのである。或は京に田舎ありといふ俗諺などから、京に嵯峨あるといふ中七字が生れたのであらう。巧みな句法で、京と嵯峨との對照も適切である。尙此外藤太の句には俗世間に喧傳されて居るもの甚だ多し。其一二を上げると

五月雨や或夜ひそかに松の月

むつとして戻れば庭に柳かな

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

などで、俗歌情歌などにも屢引用されて居る。けれどもこれらは皆所謂俗人の

嗜好に適するものであつて俳句としては固より論ずる價值がない。殊更に省いた所以である。

蓼太の句として賞すべきもの尙數句を抽出する。

曙や櫻をふるふ雉子の聲

桃櫻白髪の雛もあらまほし

夏瘦のわが骨さくる寐覺かな

大津繪に丹の過たる暑さかな

岩端の鷺吹はなつ野分かな

楠の鏝させたるかゝしかな(河内路にて)

傾城の市にかくれて頭巾かな

冬の月何咄すらん高笑

加舎白雄

名は昨鳥通稱五郎上田藩の人後中京又た江戸に住す。別號を春秋庵といふ。

品川海晏寺に葬る。寛政三年九月十三日歿行年五十三。俳諧寂樂、白雄夜話、俳諧五百題等其著書なり。

巢燕の下に火を焚く雨夜かな

白雄は伊勢涼菴門白井鳥醉に發句を學んで、別に一家をなした。蓼太とは全く趣を異にして居つて、温健精緻又た雅馴の體を得て居る。曉臺蓼太等と相往來して盛名相下らなかつたのである。白雄門下にも葛三、保吉、道彦、巢兆、冥々、碩布等一騎當千の強の者があつた。

此句は燕が巢を作つて居る下で、雨夜に火を焚いたといふ事柄を叙したのである。火を焚くのは何の爲めであるか判然しないけれども、燕の巢を作る時は、まだ春も深くはないので、自然春寒を感じる處から暖を取るののであるまいかと思ふ。殊に雨夜かなとあるので、其心持がはつきりする。暖を取るとすると、竈の下の焚火とも見えぬから、爐で柴などを焚く心持がする。爐で焚くとすると、普通の町の家などでなくて、いくらか村里の家のやうにも思はれる。つまり此句は燕の巢くふて居るのを氣にもかけず、悠々と火など焚いて居る、長閑な感じの

する光景を叙して居るのである。巢燕の下といふ位置を定めて、それに火を焚くといふ働きをも現はして居る。そのみならず、其時間及び雨天であるといふことを、雨夜かなで決定して居る發句としては如何にも複雑な句である。

夕汐や柳かくれに魚分つ

海濱の漁村では夕汐の満つるにつれて魚を釣るとか網するとかいふことがある。この句は其光景を叙したのである。夕汐やは俗にいふ夕河岸といふやうな意味もこゝに含まれて居つて、正面の意味は夕の潮といふことであるけれども、裏面には其夕汐に乗じて魚を捕つたといふことを現はして居る。魚を取つた漁師が柳の木の下で魚を分けて居るといふのである。夕の鮮魚が柳の青々とした下に潑瀾として居る光景は眼が覺めるやうである。さうして其片方には海が漫々と廣がつて居る。幾分か魚の生臭味も其爲め消されるやうで、俗なことが却つて高潔なやうに感ぜられる。尙この句の一方には夕汐といへば多少穏やかな感じがするが、そこに穏やかな柳の下で漁師などが呑氣に魚の分配をして居るといふ、漁村の悠長な趣味を叙したやうな處もある。

むら松や消えんとしては行く螢

松のむら立つて居る處を螢の飛ぶ場合を叙したので、螢の飛ぶ時は暫らく光つては暫く止み、又た光つては止むといふ風であるが、其光りの見ゆる時はもうそれきり光らぬかとも疑はれる、それを消えんとして、は行く螢といふたのである。他に目を遮ざる物のない場合は、消えんとして、といふのが適切でないけれども、むら松といふて、殊に目を遮ざる感じを與へて置くので、其感じが遺憾なく刻みこまれる。句の表面には表はれて居ないけれども、この螢はいくらか大きな螢がたゞ一疋飛んで行く場合で、光る場合には殊に美しく感ぜられるが、消えた時には著しく暗く思はれるやうな心持がする。さうしていつ迄も其行方を見つめて居るらしくも感ぜられる。

入梅のひま鼻通さるゝ子牛かな

「入梅のひまはつゆのひまで、入梅になつてから、いつも雨が降つて居つたが、其間に半日か一日位空の晴れた時があつた。それが、入梅のひまでである。其天氣のよかつた日に、げふは子牛の鼻を通してやらうなどと、主人が言ひ出して、遂には

なづら牛麩を通したといふ、牧場か牛乳屋などの光景を叙したのである。
牛の孳するのは馬などと同じやうに春の末で、子を生むのは夏の始めてあるから、入梅頃には最早可なりの大きさになつて居る。一寸考へると入梅のひまといふことにそれ程殊別な関係はないやうなもの、よく探ぐつて見ると子牛の鼻を通すといふこと、つゆのひまといふことには微妙な點に言ふべからざる趣味の調和がある。元來、つゆのひまといふことに對して、思ひもつかぬ珍らしい出来事を捕へた點だけでもこの句の働きはある。若し實際について子牛の鼻を通すことを見た場合、このつゆのひまの句を考へ浮べたならば、作者の妙腕を知ることと思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

稻妻の怖しうなる一人かな

文字通りの句で稻妻のする夜、一人て居ると段々恐しうなつて來るといふのである。發句で稻妻といふと、雷の音は聞かないで、遠方てびか〜と光るのを普通にいふ例になつて居る。夜更など其の光りを見ると一種物凄いな感じがして、夜の物静かさを一層添へる心持がする。この句はたゞそれだけの事を叙して

居るので、淡泊無味のやうに思はれるけれども、却て斯く平淡に叙した處に言ふやうな妙味がある。第三「怖しうなる」の中七字が平用のやうで決して乘尾でない。而して「稻妻の怖しうなる」一人かなといふのは、大變な相違である。昔「怖しうなる」と言ふはある刹那、即ち稻妻の光つた瞬間のみ起つた感じに「怖しうなる」怖しうなるといへば、稻妻が幾度も光る、又た夜も追ひ〜更けて行くといふ長い時間を含んだことになる。この時間を含めるといふことが、さう平淡な詞のうちには現はされて居るのは俳句としては稀に見る處である。第三下五「一人かな」といふのが怖しうなる、とゆふ感じを二層適切に感ぜしめる。これも、夜半かな、雲間かななどあつては、稻妻をそれ自身を現はすに止つて、作者の位置感亦な感じを漠然としたものになる。さうして悪句といふのではないが、「淋人かなと確然と作者を現はした方が、この場合感じを専らならしめる利益があるやうである。以上「稲妻の怖しうなる」の句は、其の句の「怖しうなる」が「露けしや高燈籠のひかへ綱」の句と異なるといふ。高燈籠は盆の灯籠を高く竿の先へ揚げるのをいふ。ひかへ綱は其灯籠を揚げ

卸しする爲め竿につけた網である。盆の灯籠といへばいつれを見ても哀れな感じがして果敢ない思ひをするものであるが高灯籠の高く揚げられたのは殊に物淋しく哀れが深い。灯籠がさやうであるのみならず其ひかへ網も夜露に濡れて居るやうで手觸りが哀れに感ぜられるといふのである。或は灯籠を却るす時など網に觸れた場合の感じてあらう。露けしやは全く露に濡れて居るといふのでなく何處かまめくして露に濡れたやうに感ぜられるといふ詞であることは養する迄もない。必ずしも如露若電など、露の果敢ないといふことをこゝには聯想するのでなく網がからくして居ないでまめくして居るといふ處に哀れを催うすのである。

馬の跡枯野の野越いそがる

冬枯の野を旅して居るやうな場合で別に往還といふ程の道もなく僅に馬の往來する位の徑を辿つて居る。蹄の跡などがついて居るので馬の跡といふのである。つまり人里離れた枯野を辿つて居ることを現はして居る。枯野のことではあり風物何となく寂寥を感ぜしめる。それに人にも遇はねば家をも見な

い。早う人里近い處へ出たいといふので心いそぎにあるいて居る有様を叙したのである。「枯野の野越えは枯野を越えるといふのを調子よく言ひ現はしたのに過ぎぬ。いそがる」とは普通の詞では他人のすることを尊敬していふ場合に使はれるけれども、ここでは作者の心持を現はしたので心いそぎがせらるゝといふ風に見ねばならぬ。旅行家は屢々かゝる場合に遭遇してかゝる経験を積んだであらう。

いちはやく燃えてかひなし楳の蔦

楳を燃す場合のある出来事で其楳に巻きついて居つた蔦は逸早くぼろ／＼と燃けてしまふたが楳には容易に火がつかぬ。そこで「かひなし」といふのである。「かひなし」といふ詞のきぢには蔦の無造作に燃けてしまふたのを哀む心持もないてはないがそれは特に強く言ふ必要はない。寧ろ淡泊に蔦ばかり先きに燃えてしまふてせうがないといふ位に見たい。一寸した即事の句で深い意味はないのである。

以上畧白雄の特技を擧げ得たと信ずる。尙數句を示す。

俳句評釋 加舎白雄

以梅折口で舟は多摩のわたじかな
美人戀し灯ともし頃を櫻散る

町中を走る流れよ夏の月
長々と腕にかはたぬ菖蒲賣
名月や影四つ橋の橋柱
黄に咲きぬ酒ねるし行空門の菊
梅は冷からに驚かれぬる庵の煤
木枯や潮ながら飛ぶ漢の砂

加藤曉臺

俗稱平兵衛後久村吳一と通稱す。名古屋の人。暮雨庵龍門買夜丞等の別號あり。寛政四年正月二十日没。享年六十。京師寺町四條下る大雲院に葬る。著書としては特に記すべきなきも世に曉臺七部集として堅並集志紅萩秋の月密袋佐渡日記爪まるし夜の柱等を編輯せしもの流布せり。

浦の梅花かたのつらに咲ぎにけり

曉臺は名古屋に生れたけれども、壯年の時が京師文は江戸に往來して居た爲め、何人に俳諧を學んだといふ明らかなき傳説はない。が、蕪村白雄等と往來して相研鑽を怠らなかつたことは明かである。其句素朴宏壯の趣味を缺くことはいへ。續麗明媚亦た捨て難い處がある。其門葉中には歐央羅城樂柳堂白居易太早僧青士朗等の豪傑があつた。就中士朗は中京に於ける大勢力となつて、近世の大家と仰がれ居る。遠藤百人松窓乙三の如きも亦た曉臺の系統を引いて居るのである。この句は海濱漁村の梅の木の様を叙して、花が先づ片側だけに咲いたといふのである。梅には南枝先開くなどいふて同じ木でもいくらか温かい方へ向いた枝は先づ花が咲く傾きがある。普通海は暖かいものであるから、此梅も或は海に向いた方が開いたのでないかと思はれる。「花かたのつらに咲にけり」といふ景色に對しては、浦の梅の動がすべからざること膠漆たゞならぬ感がある。元來、花かたのつらといふのは非常に特別な場合で、これが他の梅であつたならば、

自然な厭な感じを起すのであつたであらうが浦の梅といふので其不自然な感じを救ひ得たのみならず却て面白い景色と思はしめるやうにした。これらに眞に作者の働きといふものである。がもと／＼景色の繊細な巧みを弄した痕跡は全く去ることが出来なかつた。

日暮れたり三井寺下る春の人

三井寺は近江八景の中の有名な寺である。少しく山に沿ふて居るので石段を上り下りせねばならぬ。句は春の日暮に三井寺を下りる人があるといふ趣味であるがそれを多少曲折つけて「三井寺下る春の人」といふたのである。併し春の日暮に三井寺を人が下るといふのと春の人が日暮に三井寺を下るといふのは機微の差がある。「春の人」といふのは特にさういふ人の種類があるのでなく、春は矢張四季の春で意味は春の長閑な頃の人といふのと同じである。普通の文章には餘り用ひぬ詞であるので異様に感ぜられるけれども俳句には往々使れて居る。つまり春の人といへば行處が長閑な優長なところとした處のあつるやうに感ぜられるのである。だから自然春の日暮に人が下るといふのと春

の人が日暮に下るといふのには言ふべからざる處に相違を生ずる。三井寺といへば直に湖水を聯想し其春の日暮の朦朧と霞む水面の景色なども目に浮ぶがそこを參詣の衆か何かい悠悠々と下りて居る光景は三井寺の門叩かばやけふの月と芭蕉が吟じたのと品替りて又た別種の趣きがある。

蝙蝠や月のほとりを立去らず

蝙蝠の夕空に飛んで居る様を叙したので丁度月が白々と出て居る。其月の側を離れずに飛んで居るといふのである。蝙蝠には特に月の側を離れるとか離れぬとかいふ考へはないけれども月があかるいので其近くに居るのがよく目に入り又た澤山に見える。さうして夕空高く飛ぶ蝙蝠はひらく／＼とかよわさうに近い距離を飛び廻るものであるからその邊を捕へて月のほとりを立去らずと主観に叙したのである。尙附加へていふと立去らずといふ主観の中には蝙蝠が何となく月と親じて側を離れないやうにして居るらしいとやゝ蝙蝠を心憎く思ふ處もある。

涼しさや腮下げ行く夕さかな

俳句評釋 加藤曉斎

腮はあきと讀むので、さものことである。夕さかなといふから夕河岸か又は夕網に上つた魚で、それを買ふて歸る場合か何かであらう。腮を見えるやうに腮の處を一杯に開けて魚を下げて行くのを、夕暮の涼しい中に認めたのである。腮を下げるといふので、多少魚の大きい事も想像されるし、其をらは真赤な新しい魚で、鱗の光も銀色に光つて居るやうに感ぜられる。殊に細にも通さず無造作に引下げて行くといふ處は、色の配合といひ、又た場合といひ、何となく夕納涼中の出来事の如く思はれる點がある。其魚を下げて行く人は浴衣姿の尻端折でもして居りさうに想はれる。

何草のうら枯草そ花一つ

うら枯は草の葉末の黄色に枯れるのをいふので秋季になつて居る。何といふ名の草かは知らぬが、末枯になつて居りながら、まだ花が一つ残つて居るといふのである。「何草の末枯草ぞ」と草の字を重ねたのは句の調子の爲めて意味はなし。けれども字を重ねるだけ其草を注意せしむる傾きがある。「花一つ」といふのも、うら枯時であるので、「つ」といふのがよく利いて居る。草葉の凡て枯れて

居る中にこの一つの花許りは鮮かに生々と咲いて居るので、尙更に末枯の淋しさを感ぜしめるのである。

脇差の柄うたれ行栗穂がな

脇差をさして栗畑の中が野の徑などを通る時の即事の句で、柄が栗の穂に觸るのをうたれ行くといふのである。栗の穂は他の黍などに比べては、穂が大きく重い。自然觸るとびぶまりも、うたれるといふ方が適切である。「柄うたれゆく」といふ詞は例の俳句的に詰つて居るが、意味は、柄がうたれて行くといふのと相違はない。何故刀にしないで脇差にしたのであらう。或は刀としては句法をなさなかりたかも知れぬが、一方からいへば、大小を帯びて居るとしては餘りがあつて過ぎ、栗畑の中をさするといふことに不調和を感ずる。脇差とすれば、同じ武士でも、必ず手廻り出たやうに、脇差は思はれる。無理にも思はぬ所がある。こゝでは刀でなくて脇差の方が適切であらう。

つらゆは時雨の降る形容であるが、矢張りつらゆはさつらゆはさつらゆ

つらゆは時雨の降る形容であるが、矢張りつらゆはさつらゆはさつらゆ

のと畧同じで美しく滑かに光るやうな心持を現はして居る。杉の日面は、すきの日れもてと讀む。杉の木に日のさして居る其前を時雨の降り過ぐる光景を叙したのである。杉は元來黒く暗いものである。其處に日がさして居るので際立つて日があかるく感ぜられる。其日に照らされながら時雨が通るので、其時雨も普通日の照る處に降るのとは違ふて、一層鮮やかに輝く心持がする。つまり一方の闇い杉と對照するからである。つらくといふ形容は此場合決して杜撰ではない。杉の日れもてゆくしぐれも、元來複雑なことをいふ爲め詞が非常に詰つて居る。しかし詞の詰つて居るのと反對に、景色は如何にも印象明瞭に判然と現はされて居る。

蠅一つわれをめぐるや冬籠

冬籠の佗びた状態で、生残つた一つの蠅が、身邊を離れないといふのである。實際が、居ることは屢々あることとて、其蠅を哀れとも亦たうるさいとも思ふのでないが、物靜かに冬籠をして居るので、さういふことさへ特に注意を惹く物になるのである。「我をめぐるや」といふ中には言ふ迄もなく、其蠅に注意して居る心持

を現はして居るが、何となく其羽音の佗しいのを耳に聞答める意も寓せられて居る。この句の調子は前二者に比して遙にのびて居る。其調子の迫らぬところも、自然に冬籠の情に適して居る。尙曉臺の句を掲げる。燈ともせばうら梅かちに見ゆるなり。袖たけの松の中行く春日かな。人媚で朝宴す新樹陰。すもしくも明行月を照る日かな。出藤の實の鳴り出しにけり秋の風。若々と苦折伏新秋の水。春日野の片端麥を蔭そめぬ。又猪鬼つるしかけたり楳明り。以上は天明前後尤も頭角を現はした俳豪を擧げたのであるが、此外多少世間に傳はつて居る俳人は殆ど屈指に違ない。試みに天明盛時に前後して其門葉を

張つたものを擧げて見ると、先づ京都には蕪村以前、松木淡々が唐を下めて盛んに其角派の説を唱道せ居た。其幕下には卒秋、羅入、柱白、嵐、等名を知られ、又た多少其別働隊を以て擧げな風で、田川、移竹、山口、波光などいふのが縦横の杖を振舞つた。其中で新移竹は蕪村一派に交際したゞけ、其句は最も重きをなして居る。移つて伊勢へ來ると、無爲庵、樗良が控へて居つて、所謂伊勢風の傳燈を掲げ居る。この伊勢風即ち涼菟風は、涼菟が屢々北國に旅した爲め、其處に種子を蒔いて却つて此方でも彼方に繁茂した傾きがある。希因、麥水など其中の有名なもので、かの千代女も亦た其中の一人であつた。のみならず希因の門下には高桑、關更といふ傑物が出て、遂に文化文政以後の俳壇を壟斷するやうになつた。其外關更同門には五升庵、蝶夢といふ博識の士があつて、古今の俳書又た俳句は此人の爲に漸く散逸を免れた程であつた。建部稜足として聞えて居る涼菟も亦た希因は教を請ふたのである。名古屋には井上士朗が曉臺の後を受けて門戸を張つた側、横井也存の如き風流人も交つて居つた。殊に江戸に上つては各派割據といふ傾向が著つて、俳人雲集して居つたが如し。所謂稻津祇

米空の後を受けた法師風には夏目成業の一派が跋扈して居る。其弟吟江侮るべからざる俳才を抱いて居つたのみならず、信州の小林一茶の如きも遙にこれに聲援を與へて居る。さうかと思ふと、素堂の後繼溝口素丸の徒は萬飾風を旗幟にして盛んに俳風復古を稱へた。多少宗因門の縁故のある藤田青峨即ち紫子春來の一派は岡田米仲馬場存義の徒を得て、一時最も旺盛を極めた。米仲の子弟には沖巢、牛香、由林、米翁あり、存義の配下には可因、晚得、龜成、曲笠等前後して起つた。其外出羽に松窓、三お、結城に伊佐、岡、雁、宕あり、甲州に辻嵐外あり、浪花に安井、末江丸最も力を振ひ、京都には三宅、嘯山あつて、其子李流と古書保存に力を費した。といふやうな有様で、元祿の盛時に優るとも劣るとのやうな精華を競ふものがある。最盛の人の同門といふは、俳壇の歴史を記すに於ては、以上列傳の俳人中後世に傳ふべきもの決して並三に限らぬのであるが、其一人を擧ぐれば他の廿五を擧げねばならぬ。是故を記せば、此を録せねばならぬ。余の俳風に於て、これを輕重に難いので、已むを得ず其頭領に屬するべき數人を録するに止めたのである。其餘の俳壇の歴史は、後述の如し。

俳句 加藤曉堂

この盛時を過ぎた後の俳句は如何やうに變化したてあらうか、言ふ迄もなく明治の新氣運が勃興する迄は、卑俗に落ち輕佻に走り、柔弱技巧に墮落して居たのである。所謂月並の陋俗を事として居つたのであるが、其月並に陥る最後の俳人は何人であつたであらう。即ち俳句を月並に陥れた開祖は誰であるか、俳人として目すべき最終の人は何といふ雅號であつたか、それは明らかに指定し難いとしても、十目に見る處畧動かし難い評定がある。予は最後に其人を録して本書の結末を告げるのである。蓋し其人以後に俳人として論ずる價值の英雄は輩出しなかつた尤も明治を除いてからである。

成田蒼虬

加賀金澤の藩士、出て、京師に住す。二世芭蕉堂、二世南無庵、對塔庵等の別號あり。天保十三年三月十三日歿。行年八十三。著書として録するに足る物を見ず。柴の戸を左右へあけて花の春。

蒼虬は關東の高弟で、其南無庵といふ庵號を繼いだ人である。關東は天明の盛時に携つた、其句は尙活氣を帯びたものがあつたけれども、蒼虬に下つては其活氣が全く跡を絶つた。元來關東其人も之を蕪村白雄等に比ぶれば遙に優柔な形があつて、稍もすると其句多く技巧の俗臭に落ちんとして居るが、之を僅に救ひ得たのは一道の活氣の存する爲めであつたにも關らず、其活氣を受け繼ぐことの出来なかつた蒼虬は遂に技巧卑俗の趣味に陥つた。僅に支柱で支へ得て居つた家屋が支柱を失ふて崩壊したのと同じである。けれども蒼虬の時代は天下萬人の趣味が弛んだ並の如きものであつた爲めであらう、其勢力は概然として天下を風靡した。俳人は悉く其門下に集つて、それ迄區々の紛争を事として居つた俳界は蒼虬を得て殆ど一統したかの觀がある。即ち天保以後の俳界は蒼虬趣味の擅にする處となつたのである。故に若し趣味といふことを度外にして文學といふことを眼中に置かないで、其趨勢を察したならば、天下に蒼虬程成功した人はない。宜なり月並の俳家は殆ど神の如く彼を尊んで居るのである。

この句は元日の句である。「花の春の元朝の異名であることは已に説明した。」
 「柴の戸は柴で編んだ戸といふことであるけれども、後世柴で編んでなくとも、住居のことを草庵、草の戸などいふと同じやうに、凡て隠者など住んで居る家又は門の邊をいふやうになつた。この場合は蒼虬自身の庵の戸を指していふので、それを左右へあけて元日を迎へたといふのである。元來の意味は住居をして人里離れたところに住んで居つても、矢張一陽來復の恵みには漏れぬといふことを現はして居るのであるけれども、たゞさういふ許りでは無造作だ、苦い笑ひので、左右へあけて」と丁寧な叙したのである。けれども其左右へあけてが如何にも殊更に春を迎へる形ちがあつて、態をらしめといふ處があるのみならず、其調子がいかにも涼んで居る。若し十徳でも着た俗な俳諧師が兩開きの門を下等さうに左右へあけて居るといふやうな場合を想像すると、俗臭紛々といふ見るに堪へぬ感がある。然しこれらは尚ほ淡泊な調ひかひてあるけれども、其中書ふべからざる俗臭を含んで居る。其調子は、
 家々山吹か咲いて居つてそれが水を入れた桶の中に散つて居るといふのである。家毎にと始めに言ひ出して、山吹も多少技を弄した點であるが、それは兎に角、山吹が家毎にあるといふ景色はないとも限らぬにしても、水を入れた桶が同時にあるといふことは餘程都合のよい場合でなければならぬ。即ち桶の水が家毎にあるといふのは、實際に遠い感じがある。固と趣味を尊ぶ作者であつたならば、こゝに一考を費すべきであるが、蒼虬は却てこれが得意であつたのであらう。つまり物をうつくしく見せやうといふ手段が先きに立つて、實景に遠いとか、事實に疎いといふやうなことを考へる逸がないからである。景色の面白いと面白からぬのとは別問題にして、麗どか美しいとかいふ一方からいへば、山吹が一樣に家々の桶の水に散つて居る方が、中には桶のない家があつて齒抜けになつて居るよりも美しいであらう。けれども、さういふ場合があり得べきとか否かと疑はしい。即ち蒼虬は實際疑はしいやうな景色を自分勝手にこしらへて居るのである。其こしらへたとい

井出の玉川あたりの光景であらう。家々に山吹か咲いて居つてそれが水を入れた桶の中に散つて居るといふのである。家毎にと始めに言ひ出して、山吹も家毎に咲いて居れば、桶の水も家毎にあるといふことを示して居る。これらが多少技を弄した點であるが、それは兎に角、山吹が家毎にあるといふ景色はないとも限らぬにしても、水を入れた桶が同時にあるといふことは餘程都合のよい場合でなければならぬ。即ち桶の水が家毎にあるといふのは、實際に遠い感じがする。固と趣味を尊ぶ作者であつたならば、こゝに一考を費すべきであるが、蒼虬は却てこれが得意であつたのであらう。つまり物をうつくしく見せやうといふ手段が先きに立つて、實景に遠いとか、事實に疎いといふやうなことを考へる逸がないからである。景色の面白いと面白からぬのとは別問題にして、麗どか美しいとかいふ一方からいへば、山吹が一樣に家々の桶の水に散つて居る方が、中には桶のない家があつて齒抜けになつて居るよりも美しいであらう。けれども、さういふ場合があり得べきとか否かと疑はしい。即ち蒼虬は實際疑はしいやうな景色を自分勝手にこしらへて居るのである。其こしらへたとい

ふ痕跡が歴々として指摘されるに至つては、人をして倦悪の念を抱かしむるの
已むを得ない。この句も一見強いて擧ぐべき欠點のないものであるけれども
尙その技巧を弄する手段の忌むべきを見るのである。

廣澤や一りん見ゆる燕子花

廣澤は嵯峨の池でそこに杜若が一輪咲いて居るのを見た景色を叙して居る。
が矢張中七一りん見ゆるが如何にも調子が弱い。廣澤といふのに對して一輪
としたのも實景であつたとしても「見ゆる」といふ詞のたるんで居る爲め細工に
なつたのではないかと思はるゝ點がある。

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎

史邦

朝顔や一輪深き淵の色

蕪村

何草の末枯草や花一つ

晚臺

などに比べては調子の強軟殆ど比較にならぬ。

暮いそぎして暮残る薄かな

こゝに至つては正に月並の中心を得て居る。句の意味は薄がはやく暮れやう

くといふ日の暮れをいそいで居りながらまだ全く暮れきらずに居るといふので
芒の穂の風に靡き易い處及び日暮になつても穂の白う見ゆる處などから主觀
にかく叙したのである。主觀に叙するといふことは何の妨げはないとしても、
第一「暮いそぎして」といふ詞が甚だ卑俗で、芒に對して何の感興も起らぬ。第二
「暮いそぎして暮残る」といふのは非常に巧みな詞であるけれども、其場合が甚だ
際どい。急いで居つて残つて居るといふのは先へも行かず後へもひかぬとい
ふ危い間隙の状態で殆ど綱渡りでもするやうな峻呑な詞つぎである。さうい
ふ際どい詞は多く卑俗に落ちて仕舞ふ。第三この句は其綱渡りの詞が主に
なつて居つて「芒」といふ主題がどういふ情態にあるかといふ、即ち客觀の景色が
少しも目に見えぬ。詞が主になつて景色の見えぬ場合は、餘程詞が淡泊に出來
て居らねばならぬ。例之ば
　　扶蒼は伏しかくれ松露はあらはれぬ
　　蕪村
の如き句で、何等の理窟もない洒々然としたものであるが「暮いそぎ」に大理窟が
あつて詞の妙味といふものがなく、然も尙危いところを渡らうとする野心がほ

の見える。以上三つの理由でこの句を月並的俗句と判ずるのである。尚ほ

山は暮て野は黄昏の芒かな

蕪村

といふ句があるが、この句は「山は暮て」といひ、野は黄昏の芒を中心にした景色が目に見えけれども、然も暮てと黄昏との關係が餘り際どいので、技巧に陥つたといふ誹りを免れぬ。蒼虬の句は蕪村の句に比して、更に一段の俗臭を被せたものである。

名月の沙に濡るゝや人の裾

十五夜の月夜に海端近く出て居た場合、沙が散つて裾にかゝつたといふのである。が「人の裾」といふ五字が判然せぬ詞である。「人は人間」といふ廣い意味か、又た「吾」に對する「他人」の意か何れであらう。人間といふことにすると、名月の夜の沙に濡れるのは天人の羽衣や兎の足ばかりではない、人間の裾も濡れるのぢやといふことになる。即ち羽化登仙するといふやうな感じて、月の嫦娥に對して吾も人間でありながら其夜沙に濡れて仙人らしい思ひをするといふやうな意味になる。他人の裾とすると、人が海岸に立つて居るのをこちらから見るやう

な場合になる。いづれにしても此句は前句のやうな俗臭がない。詞の曖昧なだけでも、わかり過ぎるといふ弊を救ふて居るかと思ふ。強いていづれにか決定せなければならぬといふ句ではないやうである。

行く雲の家より低き枯野かな

純然たる客觀の句で、枯野を家よりも低い雲が通るといふのである。行く雲といふのであるから、強い風に吹きさらされて飛ぶといふやうな場合ではない。いくらかゆるく動いて居るらしい。それが地面をすれすれに通るので、枯野の荒涼たる様が更に物凄く感ぜられる。寒雲凝つて廣野に落つるといふやうな事は屢々あることで、それが雲であるため、更に景色を壮大ならしめる。調子は多少緩なといふことはあるにしても、たるんでは居らぬ。これらは蒼虬句集中の金玉の文字であらうと思ふ。

散紅葉裏葉勝なる日和かな

紅葉の散つて居るのが、表向いて居るよりも裏向いて居るのが多い。丁度其頃よい天氣ついでであつた、といふのである。裏葉勝といふのと日和のよいとい

ふことは何の関係も理窟もない。たゞ天氣のよい頃に紅葉の散つて居るのを見た所が裏向いて居るのが多かつたといふ事實を叙したのである。又た「裏葉」といふのに何か意味がありさうに思はれるけれども、之もさしたる意味はない。表葉と裏葉との相違は、表葉が赤くうつくしく、裏の方はさまで赤くもなく却つて醜いといふ位である。表の方が散つて居れば、それは普通の場合でさして目にとまらぬが、裏葉が散つて居るので、稍注意を惹くのである。「裏葉勝なる日和がな」といふ中には一種拗すべき趣味もあつて、これも捨て難い句である。蒼虬の句一二。

蓬來の橙赤き小家かな

白梅やよその夕暮先見ゆる

紫陽花やためてはこぼす雨の音

うつむいて旅人來り秋の暮

あと低きすわり心や秋の雨

野の末の雲に音ある霞かな

尙蒼虬と同時代の俳人櫻井梅室といふ金澤の人がある。矢張關更の門で近世の俳人として蒼虬と名を等しうして居る。蒼虬に比しては句法勁健な處があつて一頭地を抜いて居るけれども、晩年月並に陥つたことは蒼虬と選ぶ所はない。試みに遠き古へに遡りて考へて見ると、俳句は守武宗鑑に始まつて芭蕉に大成し、蕪村に華實を添へ、梅室蒼虬に終りを告げて居る。梅室蒼虬も亦た榮譽ある時代に生れたのであつた。

或人本稿の最終に日に古人となつた正岡子規を録すべきを勧めたけれども、予は之を記するの情に堪へぬ。明治俳句を論ずるの人後世に少なからぬとてあらうに今日自ら賛するの用を見ぬのである。

俳句評釋終

明治三十六年十一月五日印刷
明治三十六年十一月八日發行

俳句評釋終
定價卅五錢

著者 河東秉五郎

發行者 高見憲治

東京市神田區錦町二丁目五番地

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷所 三秀舍

東京市神田區美土代町二丁目一番地



發兌元

東京市神田區錦町二丁目五番地

人文社